

七尾瓦窯跡（工房跡）

—都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書2—

1999年3月

吹田市都市整備部

吹田市教育委員会

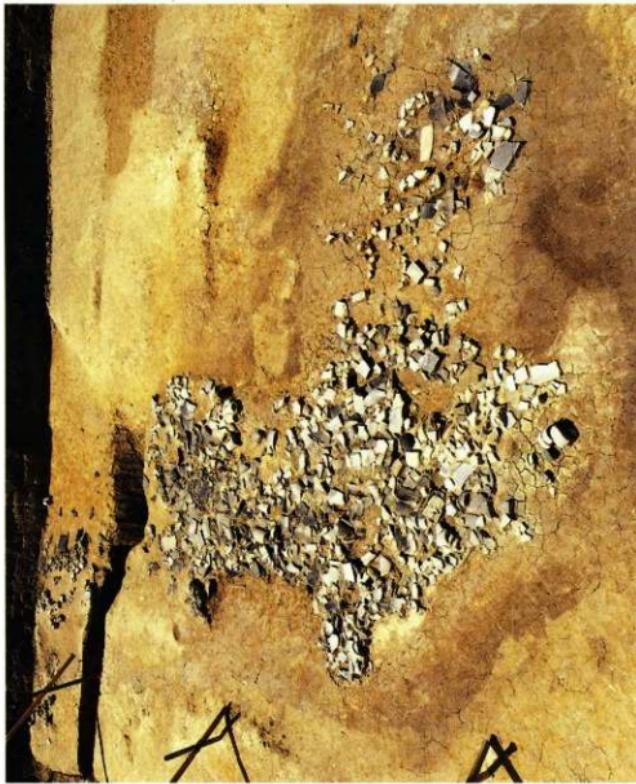


七尾瓦窯跡周辺航空写真（西から）

A区検出大溝全景（北から）



瓦溜1検出状況(東から)



序

吹田市の北部から中央部を占める千里丘陵は焼き物を作るのに適した良質な粘土を産し、古墳時代後期にはこの粘土を原料とする須恵器の生産が大規模に行われた我国有数の製陶地帯であります。須恵器の生産が終了した後も、その地質的な条件や技術的な伝統を背景に、聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯跡や桓武朝の平安宮造営当初の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡が操業されるといった、古代窯業史を考える上において非常に重要な地域であります。

七尾瓦窯跡は昭和54年に開発に伴う発掘調査によって7基の瓦窯が発見され、聖武朝難波宮の造宮瓦窯が初めて明らかとなりました。吹田市では国、大阪府の指導をいただきながら、瓦窯跡の重要性から永久に現状で保存すべき重要な遺跡であると判断し、関係者のご協力を得て昭和55年3月に国の史跡指定を受け、平成元年及び2年度に環境整備事業を実施いたしました。

さて、本市おきまして計画された都市計画道路千里丘豊津線の予定地はこの七尾瓦窯跡や吉志部瓦窯跡の近接地を通過することから、関係機関の協議により七尾瓦窯跡及び吉志部瓦窯跡の造瓦工房跡の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げることができました。

本報告書はその発掘調査の第2冊目の報告書として、七尾瓦窯跡工房跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書により、調査によって得られた成果がより多くの方々に生かされ、文化財保護のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力をいただきました多くの方々に心より感謝を申し上げます。

平成11年3月

吹田市教育委員会
教育長 今記 和貴

例　　言

1. 本書は吹田市都市整備部において計画された都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う七尾瓦窯跡（工房跡）の発掘調査の報告書である。

発掘調査は平成4年度から6年度にかけて実施した。年度ごとの調査地点は以下のとおりである。

平成4年度 岸部北5丁目10他

平成5年度 岸部北5丁目26・28

平成6年度 岸部北5丁目32-2他、岸部北5丁目9・15

2. 発掘調査及び資料整理は吹田市立博物館文化財保護係西本安秀・増田真木が担当した。調査及び報告書作成に係る経費は都市整備部において予算化された。

3. 調査で出土した遺物等の整理は博物館（岸部北4丁目10番1号）において実施し、資料の保管も同所において行っている。

4. 本報告書の執筆は第3・5章1を西本が、はじめに・第1・2・4・5章2を増田が分担して執筆した。

5. 図中の方位は磁北をさし、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。

6. 本文中の遺物番号は図版、挿図とも統一した。縮尺については1:4である。

7. 調査の実施にあたっては大阪府教育委員会文化財保護課の指導を受けるとともに（株）岡本銘木店をはじめ地元の多くの方々の協力を得た。記して感謝いたします。

8. 発掘調査及び資料の整理作業には以下の諸氏の参加を得た。

外業調査：太田宏明、濱田竜彦、福住日出雄、村上大輔、海邊博史、田中学

内業調査：花崎晶子、長谷部裕子、林裕子、高井明美、中川泉、野口佳子、太田美由紀

目 次

はじめに	1
第1章 調査に至る経過	
1. 七尾瓦窯跡の概要	4
2. 調査に至る経過	9
第2章 位置と環境	10
第3章 平成4・5年度の発掘調査	
1. 調査の経過	13
2. 調査の成果	16
a. 基本層序	16
b. 遺構	31
c. 出土遺物	43
第4章 平成6年度の発掘調査	
1. 調査の経過	51
2. 土層序	51
3. 遺構・遺物	53
第5章 まとめ	
1. 平成4・5年度の調査	69
2. 平成6年度の調査	74

図版目次

- 図版 1 平成 4 年度 A 区 (1) 調査前近景、大溝・瓦溜検出状況
図版 2 平成 4 年度 A 区 (2) 大溝 1・瓦溜 1、瓦溜 1 近景
図版 3 平成 4 年度 A 区 (3) 瓦溜 1 近景
図版 4 平成 4 年度 A 区 (4) 瓦溜 1 細部
図版 5 平成 4 年度 A 区 (5) 大溝 2・瓦溜 2、瓦溜 2
図版 6 平成 4 年度 A 区 (6) 瓦溜 2、瓦溜 2 細部
図版 7 平成 4 年度 A 区 (7) A 区全景
図版 8 平成 4 年度 A 区 (8) A 区第 2 次遺構面全景、大溝 1 南半部
図版 9 平成 4 年度 A 区 (9) 大溝 1 東端部、大溝 2
図版 10 平成 4 年度 A 区 (10) 大溝 1 近景
図版 11 平成 4 年度 A 区 (11) 大溝南半部近景、大溝 1 近景
図版 12 平成 4 年度 A 区 (12) 大溝 1 西端部土層断面、大溝 1 東端部土層断面
図版 13 平成 4 年度 A 区 (13) 大溝 2 西端部土層断面、ピット群 1
図版 14 平成 4 年度 A 区 (14) 落込み 3、落込み 3 内須恵器出土状況
図版 15 平成 4 年度 B 区 (1) 調査前全景、調査前近景
図版 16 平成 4 年度 B 区 (2) T 2 全景、ピット群 1 0
図版 17 平成 4 年度 B 区 (3) T 6 全景、T 6 ピット群 7
図版 18 平成 4 年度 B 区 (4) T 8 全景、溝 2
図版 19 平成 4 年度 B 区 (5) T 9 全景、T 9 坑跡
図版 20 平成 4 年度 B 区 (6) 溝 1、T 1 3 全景
図版 21 平成 4 年度 B 区 (7) T 1 4 大溝 1、T 1 4 全景
図版 22 平成 4 年度 B 区 (8) T 1 4 ピット群 5、T 1 4 大溝 1 土層断面
図版 23 平成 5 年度 B 区 (1) G 1 全景、G 1 大溝土層断面
図版 24 平成 5 年度 B 区 (2) G 1 大溝全景、G 3 全景
図版 25 平成 5 年度 B 区 (3) G 3 ピット群 6、G 3 溝 2
図版 26 平成 5 年度 B 区 (4) G 4 近景、G 4・5 全景
図版 27 平成 5 年度 B 区 (5) G 4 ピット群 9、G 4 大溝 1
図版 28 平成 5 年度 B 区 (6) G 4 大溝 1、G 5 大溝 1
図版 29 平成 5 年度 B 区 (7) G 5 坑跡 3、G 6 大溝 1
図版 30 平成 5 年度 B 区 (8) G 7 ピット群 4
図版 31 平成 5 年度 B 区 (9) G 8 ピット群 2、G 8 ピット群 2 近景
図版 32 平成 5 年度 C 区 (1) 調査前風景、第 2 次遺構面全景
図版 33 平成 5 年度 C 区 (2) 大溝 2 西端部、大溝 2 土層断面
図版 34 平成 5 年度 C 区 (3) 溝 3、第 4 次遺構面検出状況
図版 35 平成 5 年度 C 区 (4) 第 4 次遺構面全景、第 4 次遺構面
図版 36 平成 5 年度 C 区 (5) ピット群、ピット群細部
図版 37 平成 5 年度 C 区 (6) ピット群細部、落込み 4
図版 38 平成 4 年度出土遺物 (1)
図版 39 平成 4 年度出土遺物 (2)

図版 4 0	平成 4 年度出土遺物 (3)	
図版 4 1	平成 4 年度出土遺物 (4)	
図版 4 2	平成 4 年度出土遺物 (5)	
図版 4 3	平成 6 年度 A 区 (1)	A・B 区調査地点、調査区断面
図版 4 4	平成 6 年度 A 区 (2)	調査状況、SD 0 1
図版 4 5	平成 6 年度 A 区 (3)	SD 0 1 西半部調査状況、SD 0 1 東半部調査状況
図版 4 6	平成 6 年度 A 区 (4)	SD 0 1 断面 (a)、SD 0 1 断面 (b)
図版 4 7	平成 6 年度 A 区 (5)	SD 0 1 断面 (d)、SD 0 1 断面 (e)
図版 4 8	平成 6 年度 A 区 (6)	A 区東半部調査状況、SB 0 1
図版 4 9	平成 6 年度 A 区 (7)	SB 0 1 P 5 瓦出土状況、SD 0 2・0 3
図版 5 0	平成 6 年度 B 区 (1)	調査区断面、調査状況
図版 5 1	平成 6 年度 B 区 (2)	調査状況、掘立柱建物 SB 0 2~0 6
図版 5 2	平成 6 年度 B 区 (3)	SG 0 1、SD 0 5
図版 5 3	平成 6 年度 B 区 (4)	SD 0 5 断面、SD 0 6 断面
図版 5 4	平成 6 年度 B 区 (5)	掘立柱建物 SB 0 2~0 6、掘立柱建物 SB 0 2~0 6
図版 5 5	平成 6 年度 C 区 (1)	調査状況、SD 0 7
図版 5 6	平成 6 年度 C 区 (2)	SD 0 7・0 8、足跡検出状況

挿図目次

第 1 図	調査地点位置図	4
第 2 図	七尾瓦窯跡平面図	5
第 3 図	七尾瓦窯跡周辺調査概要	8
第 4 図	調査区平面図	9
第 5 図	周辺遺跡分布図	11
第 6 図	A・B・C 区検出遺構全体平面図	14
第 7 図	A 区遺構平面図	15
第 8 図	B 区遺構平面図	17・18
第 9 図	C 区遺構平面図	19
第 10 図	A 区土層断面図	20
第 11 図	B 区土層断面図 (1)	21
第 12 図	B 区土層断面図 (2)	22
第 13 図	B 区土層断面図 (3)	23・24
第 14 図	B 区及び C 区土層断面図	25・26
第 15 図	瓦溜 1 平面図	29・30
第 16 図	瓦溜 2 平面図	31
第 17 図	瓦溜 1・2 横・縦断面図	32
第 18 図	瓦溜 1・2 出土瓦構成図	33
第 19 図	B 区 T 2・3、G 1 遺構平面図	34
第 20 図	B 区 T 6・8・9 遺構平面図	35
第 21 図	B 区 G 3 遺構平面図	35

第22図	B区G4遺構平面図	36
第23図	B区G5遺構平面図	37
第24図	B区T13、G7・8遺構平面図	38
第25図	B区T14、G6遺構平面図	39
第26図	C区第2次遺構面平面図	40
第27図	C区第4次遺構面平面図	41
第28図	出土遺物実測図及び拓影(1)	44
第29図	出土遺物実測図及び拓影(2)	45
第30図	出土遺物実測図及び拓影(3)	47
第31図	出土遺物実測図及び拓影(4)	48
第32図	出土遺物実測図及び拓影(5)	49
第33図	調査区断面図	52
第34図	C区平面図	53
第35図	A・B区平面図	54
第36図	A区平面図	55
第37図	S D 0 1 平面図	56
第38図	S D 0 1 断面図	57
第39図	S B 0 1 実測図	58
第40図	溝・土坑断面図	58
第41図	B区平面図	59
第42図	S B 0 2 ~ 0 6 平面図	60
第43図	S B 0 2 実測図	61
第44図	S B 0 3 実測図	62
第45図	S B 0 4 実測図	62
第46図	S B 0 5 実測図	62
第47図	S B 0 6 実測図	63
第48図	S D 0 5 ・ 0 6 、 S G 0 1 断面図	63
第49図	C区平面図	64
第50図	C区溝・土坑断面図	64
第51図	出土瓦	66
第52図	出土土器	67
第53図	七尾瓦窯操業期遺構全体図	70
第54図	七尾瓦窯工房全体図	76
第55図	吉志部瓦窯工房跡出土七尾瓦窯瓦分布図	77

はじめに ——簡単な紹介にかえて—

七尾瓦窯跡とは

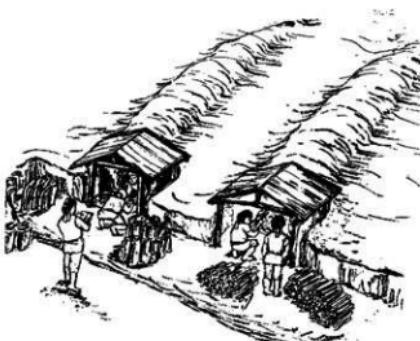
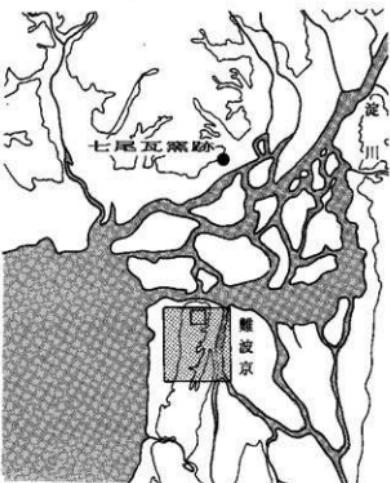
七尾瓦窯跡は吹田市岸部北5丁目10他
の、約2.0～2.5mの高さの丘陵の北斜面に
築かれています。昭和54年に発掘調査が行
われた結果、7基の瓦窯がみつかりました。
また、出土した軒瓦の紋様を観察すると、
それは大阪市中央区に所在する難波宮(神
龜三(726)年に聖武天皇が再建に着手し
た後期難波宮)で出土している瓦の一部と
全く同じものであることが明らかとなり、
七尾瓦窯跡が後期難波宮で使用する瓦の
造瓦工房であることわかりました。

少し詳しくみると、窯が立地する丘陵は
千里丘陵と呼ばれ、この丘陵に堆積してい
る粘土は焼き物を作るのに適した粘土で、

市内では古墳時代の6世紀前半から7世紀前半にかけて、須恵器と呼ばれる硬質の焼き物を生
産する窯が60基近く操業していたと考えられます。このように千里丘陵は焼き物の生産地とし
ての伝統を伝えてきた地域であり、良質の粘土を得られることを含めて、七尾瓦窯跡がこの地
に開かれた大きな理由の一つと考えられます。また、この七尾瓦窯跡の操業から約60年後には、

七尾瓦窯跡の西方約200mの地点
に平安宮造営当初の瓦を生産した
吉志部瓦窯跡が操業しています。

瓦窯跡についてみると、窯は丘
陵の北斜面に窯の床が傾斜する登
窯が6基、登窯とはやや離れて、
東南約25mの地点で窯の方向が
登窯とやや異なる、床面のほぼ平ら
な平窯が1基と、2種類の形態の
窯があります。また、登窯も全体
が詳しく調査された2号瓦窯の床
面の傾斜は平均40°と急なのに対
して3号瓦窯は平均17°と緩やか



七尾瓦窯跡の操業風景



整備後の七尾瓦窯跡

元年及び2年度に七尾瓦窯跡を訪れる人々にその様子がよくわかるように整備工事が行われました。

工房跡の発掘調査 —— 今回の調査でなにがわかったか ——

昭和58年度から60年度にかけて、瓦窯北側、2~6号瓦窯前面の地点において発掘調査が実施され、規則的に「コ」の字形に展開する幅3~4m、深さ1mの大規模な溝が展開していました。また、溝の一部では多量の七尾瓦窯跡の瓦が投棄された状況でみつかり、瓦窯の前面に瓦製作のための工房が展開していることが明らかとなりました。

今回報告する調査は、工房が展開していると考えられる史跡七尾瓦窯跡の北側の地域に道路を通すことが計画されたために、平成4~6年度にかけて調査を実施したものです。

調査では、昭和59・60年度に確認した大規模な溝がさらに西方に展開しており、東西140mの範囲におよぶことがわかりました。この溝は瓦製作に必要な水を引き込むためや、溝内の粘土の堆積状況から粘土溜等の機能があったことが考えられます。また、溝は所々でほぼ90°近く、大きく屈曲しながら走行しており、瓦製作の作業場を区画していたことも考えられます。

平成4・5年度に実施した工房東半部の調査では溝以外には、ピット（掘り込まれた小さな穴）が多数みつかり、樋あるいはごく小規模な構造物であった可能性が考えられますが、明確な建物の存在は考えにくく、屋外の

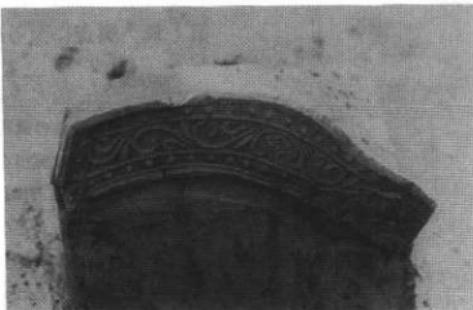


瓦窯前面に展開する大溝

作業空間であったことが考えられます。また、溝の一部には多量の瓦が投棄された状況でみつかっており、その付近で焼成された瓦の選別が行われたものと考えられます。平成6年度の工房西半部の調査では溝の延長部分を調査するとともに掘立柱建物や池状の落込みがみつかりました。建物はその調査状況から、今回の調査区のすぐ北側に建物群が展開している可能性が高いと考えられます。

また、池状の落込みは小規模な溝が接続しており、水の流入等が調節されたことが考えられ、水溜あるいは粘土溜等の瓦作りに関連する施設の可能性が高いと考えられます。以上の調査成果から、工房は溝によって各作業場が区画され、整然とした状況で作業が行われていたものと考えられます。

なお、工房の範囲については、西方約200mの吉志部瓦窯工房跡の平成3年度の発掘調査では瓦と共に七尾瓦窯跡操業時の井戸等もみつかっていることから、吉志部瓦窯跡の東半部の一部に七尾瓦窯跡の工房も展開することがわかり、七尾瓦窯跡の工房が東西300mの範囲に広がることが明らかとなりました。ただし、吉志部瓦窯跡と重なる地点は今回報告の工房とは反対の丘陵の南斜面側であることから、両者がどのように関連するかは今後の大きな検討課題として残されています。



大溝内から出土した軒平瓦

第1章 調査に至る経過

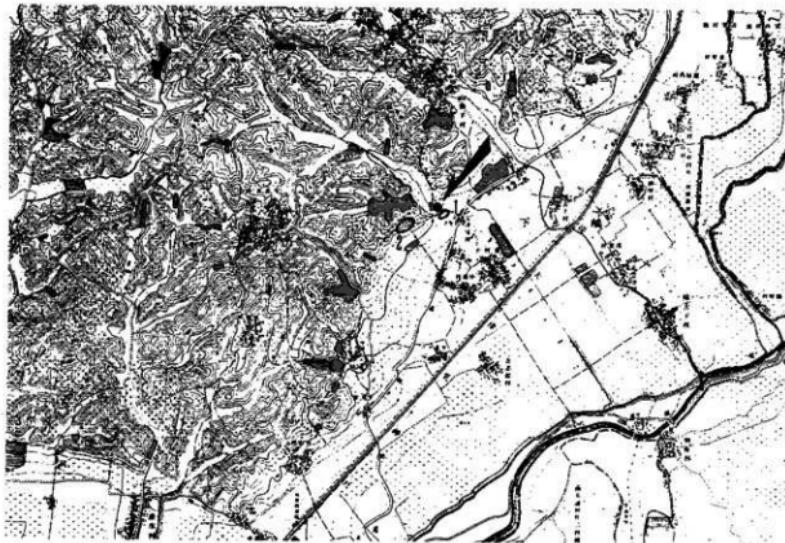


1. 七尾瓦窯跡の概要

七尾瓦窯跡は淀川右岸の沖積平野に面した千里丘陵東南縁にあたる吹田市岸部北5丁目10番ほかに所在する。瓦窯の存在が明らかとなったのが、いつの頃であるのかは明らかではないが、昭和39年頃には地元の研究者には認識されていたといわれる。高さ約2.0～2.5mの台地状の地形が東西に延びる斜面に灰層が露出し、多量の瓦が包含されていることから、この地に瓦窯の存在が予想されていた。昭和43年には地元の一中学生の瓦片の採集が契機となり、地元の研究組織である吹田郷土史研究会によって、軒平瓦

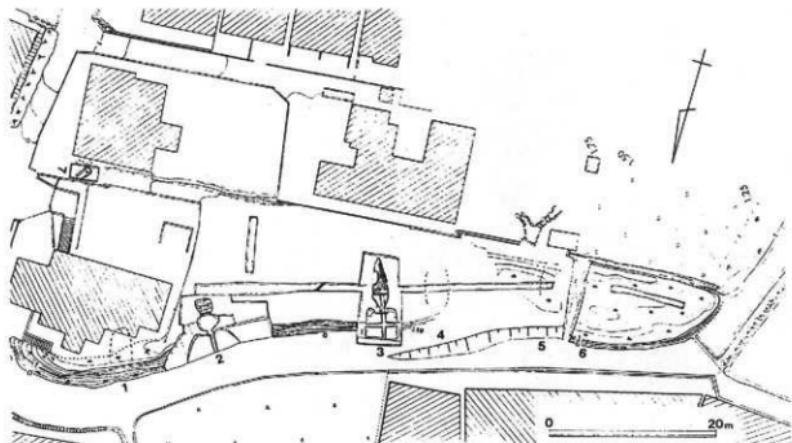
の断片が確認され、現地を訪れた大阪府文化財専門委員の藤澤一夫氏によって平城宮式軒平瓦をもつ奈良時代の瓦窯であることが明らかにされた。

このような経過によって、七尾瓦窯跡は市内で唯一の奈良時代瓦窯として注目され、昭和48



1. 七尾瓦窯跡 2. 吉志都瓦窯跡 ● 調査地点

第1図 調査地点位置図 (S=1:40000)



第2図 七尾瓦窯跡平面図

年刊行の吹田市文化財地図には当時の小字名をとて「地徳寺瓦窯跡」として明記された。

それ以後は当該地において大きな開発行為もなく、瓦窯の実態も明らかにされることもなかつたが、昭和54年6月に一帯で宅地開発が行われることが明らかとなり、事業者との協議により、市教育委員会によって、約2.5ヶ月にわたって発掘調査が実施された。調査の結果、標高17m、比高2.0~2.5mの東西に伸びる舌状台地の北斜面に焚口を向けて配列された6基の登窯（1~6号瓦窯）と1号瓦窯の東南25mに位置し、他の窯とは異なり、主軸を東へ振って構築された平窯1基（7号瓦窯）を確認した。調査ではこの内、2・3・7号瓦窯の全容が明らかにされ、出土した瓦から、本瓦窯が後期難波宮の供給瓦窯であることが明らかとなった。また、この時点で、名称が「七尾瓦窯跡」と改められた。

明らかになった瓦窯の概要は以下のとおりである。

2号瓦窯跡

有階有段登窯で、窯の上半は削平されているが、遺存部分では全長4.5m、焼成部幅2.0mで、平均40°の急角度で登っていく階段が確認されている。階部は2段積み



2号瓦窯跡調査状況



3号瓦窑跡調査状況

の大型堀を使用し、階段上面は丸瓦、平瓦が敷かれていた。焚口には左右に2個づつ堀を小口積みに構築し、前庭部はハの字形に地山を掘り込み、一对の柱穴が確認された。

3号瓦窑跡

窯体が完存しており、全長5.4m、最大幅1.75mの平面船形の有階有段登窯である。焼成部床面の傾斜は平均17°と2号瓦窑跡より緩やかであり、丸瓦と半截

平瓦を組み合わせた7段の階段が確認された。階部は2個の大型堀を横に並べて粘土を塗り込んで仕上げ、窯全体もこのように大型堀を縦積みして構築している。焼成部では80cmの厚さで、計8層の灰原の堆積が確認され、操業密度の高い窯であることが明らかとなった。また、焼成部では未焼成の瓦列が確認され、瓦は軒平瓦、平瓦を交互に配して立て掛けたものであり、全く被熱の痕跡を示さないことから、窯詰め途上で何らかの理由によって急速廃窯されたことが明らかとなつたが、きわめて希有な例である。前庭部は地山を丁字形に垂直に掘り込んで平坦にしているが、柱穴等は認められなかつた。



7号瓦窑跡調査状況

7号瓦窑跡

後世に大きく削平されているために遺存状況が悪いが、他の瓦窑とは構造が大きく異なっている。窯の構造は平面長方形に近く、床面の傾斜約2°の平窯構造で、本瓦窑群では唯一の平窯である。奥壁には外へ突出する煙出しが認められるが、破損しているために詳細は不明である。

出土瓦

調査では膨大な量の瓦が出土するとともに微量須恵器も確認された。軒瓦は難波宮における設定型式によれば、軒丸瓦は難波宮6303型式、軒平瓦は6664-B型式が主で、ごく少量6664-A型式が認められ、すべて同一範と考えられる。これらは難波宮出土の同型式瓦と胎土、調整技法、焼成が一致することから、本瓦窯の製品が後期難波宮に供給されたことが明らかとなった。

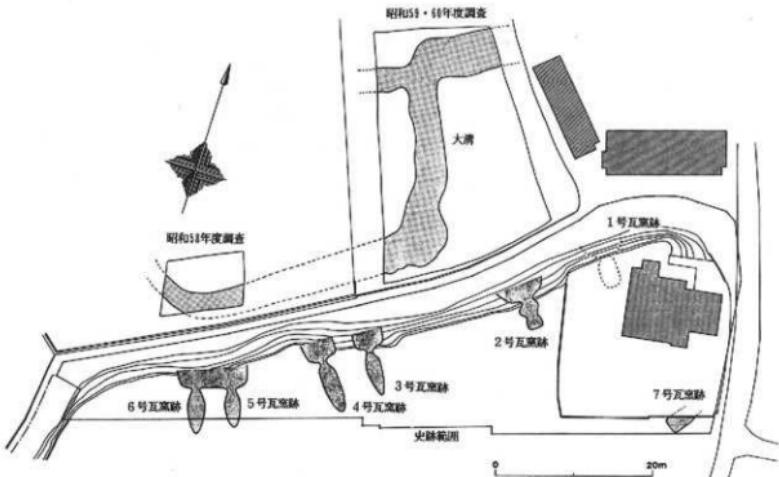
また、丸瓦、平瓦は須恵質で薄手のものが特徴的であり、その他にも道具瓦では駄斗瓦、隅切り瓦等が認められるが、いずれも難波宮出土資料と一致する。

後期難波宮出土瓦の多数を占める重圈紋系軒瓦は出土しておらず、本窯では焼成されていないと判断された。

このように、七尾瓦窯跡は最低7基の瓦窯を中心して配列した大規模な造瓦工房であることが明らかとなり、3号瓦窯の厚い灰層の堆積に認められるように短期間に集中して操業されたものと考えられた。また、調査された瓦窯の構造は3基とも異なったものであり、登窯を主としながら、平窯も混在する瓦窯群である。また、登窯も2号瓦窯は階段状の急傾斜の焼成部に高い階をもち、焼成部は地下式である等、古い様相を示すのに対し、3号瓦窯は緩やかな傾斜の床面、低い階等平窯化が進んだものであり、本瓦窯群は瓦窯の構造に新旧のタイプが認められることが大きな特徴である。

発掘調査の結果、後期難波宮の造瓦工房として初めて確認された瓦窯であることが明らかとなり、市教育委員会では国、大阪府の指導を受けながら、七尾瓦窯跡の重要性から現状保存が必要であると判断し、関係者との協議の結果、昭和55年3月24日付で国の史跡に指定された。昭和56年3月には指定地1227.6m²の内、既に住宅の所在する部分を除く996.2m²を公有地化し、平成元年度及び2年度には環境整備工事を実施した。

しかし、窯体以外の工房関連遺構についての実態は全く不明であり、瓦窯跡周辺の宅地化が急速に進み、瓦窯をとりまく環境は悪化し、周辺地域の実態の究明が至急を要する事態となっていた。そのような中、昭和58年度に瓦窯北側、5・6号瓦窯前面部分に位置する岸部北5丁目31-4において倉庫の建替が行われ、それに伴い部分的に調査が実施された。調査では、緩やかに北側に向かって傾斜する瓦窯操業期の地表面を確認し、登窯の配列に平行するように小規模な溝が確認されるとともに、軒平瓦を含め、瓦がまとまって出土した。また、小規模な溝に先行し、重複する幅約3.0mにも達する大溝が存在することが明らかとなったが、この時点では溝内からの出土遺物は土師器の細片が1点のみであることから、性格等は明らかにできず、瓦窯操業以前の遺構と考えられた。この調査によって、瓦窯北側の平坦面に造瓦関連工房の存在する可能性が高まり、唯一水田として旧状を残していた岸部北5丁目32-1において、昭和59・60年度に確認調査を実施した。調査の結果、瓦窯前面に「コ」字形に展開する平均幅3m、深さ1mの大溝を確認し、部分的に多量の瓦が投棄された状況で出土した。またこの調査結果から、昭和58年度に確認した大溝もこの延長部分にあたり、溝の調査状況等から瓦窯操業期の同一の溝と判断されるにいたった。大溝は西から東へ3度、ほぼ90°の屈曲を経て流下してい

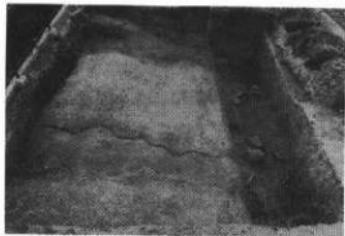


第3図 七尾瓦窯跡周辺調査概要

ことから、明らかに人为的に開削された大規模な溝と判断され、瓦窯前面部分を有機的に区画して、機能していたものと考えられた。また、建物等の他の明確な構造は確認されなかったが、瓦窯前面の広い範囲に工房が展開していることが明らかとなったのである。但し、この調査は遺構の展開状況を確認することを目的としたものであることから、大溝内の掘削及び瓦等の遺物の取り上げは部分的なものに止めている。

その他の調査としては、環境整備工事に伴い、未調査であった4・5・6号瓦窯の部分的な調査を実施している。調査の結果、4号瓦窯は3号瓦窯とはほぼ同様の構造と考えられ、5・6号瓦窯については前庭部を共有しており、同時に操業していたものと判断されるが、3・4号瓦窯とは異なる構造である可能性が高いと考えられた。1号瓦窯は未調査であるが、1・2号瓦窯、3・4号瓦窯、5・6号瓦窯と2基ずつが単位として構築され、操業していたことが

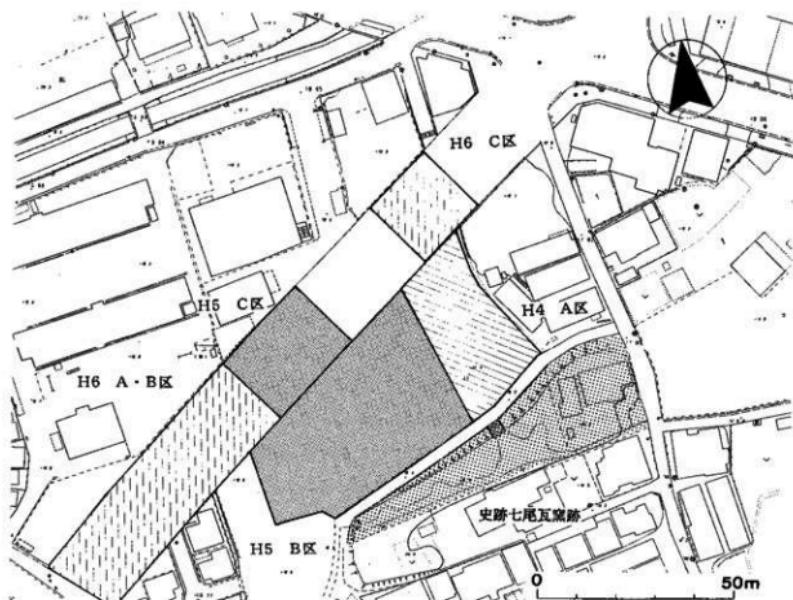
考えられ、それぞれ異なる構造の窯体構造であった可能性が高い。従って、窯体は平窯を含めて、少なくとも4種類の構造の瓦窯が構築され、さらに登窯は2基単位で操業していたことが考えられる。また、前庭部前面では丘陵に平行する溝が確認され、排水溝を瓦窯前面に巡らして工房部分と明確に区分しているものと考えられる。



5・6号瓦窯跡上面確認状況

2. 調査に至る経過

七尾瓦窯跡の所在する岸部北地区旧来の狭隘な道路が多いために阻害されていた当地へのアクセス機能や緊急時の防災機能を果たすことを目的として、吹田市において都市計画道路が計画された。しかし、道路路線は史跡七尾瓦窯跡及び平安宮初期の造宮瓦窯である史跡吉志部瓦窯跡の近接地点を通過することとなり、両瓦窯の工房部分にかかる可能性が高いことから、大阪府教育委員会の指導のもとに、工事担当の都市整備部と市教育委員会で埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。協議の結果、岸部北地区の道路路線予定地については全域で試掘調査を実施し、その結果に基づいて発掘調査を実施することとし、岸部北4丁目から5丁目にかけての延長616m、幅員12~20m、面積約11,400m²の工事区間について、平成3年7月5日付で吹田市長から発掘通知が提出された。調査は平成3年度に史跡吉志部瓦窯跡の南接地点の試掘調査を開始し、七尾瓦窯跡工房関連の調査では平成4~6年度に試掘調査及び発掘調査を実施した。



第4図 調査区平面図

第2章 位置と環境

七尾瓦窯跡は吹田市岸部北5丁目10他の千里丘陵東南端の紫金山と呼ばれる支丘陵端の北斜面に位置する。千里丘陵は大阪平野の北部、淀川右岸の沖積平野上に舌状に突出する東西約10km、南北約8kmの規模で、吹田市北部から豊中市東部、そして箕面市、茨木市の一帯まで広がる。地質的には第三紀鮮新世末から第四紀更新世前半に古大阪湖・古大阪湾に堆積した大阪層群がその後の地殻変動によって隆起したものである。この隆起運動は西から突き上がるような形で起こったために概して北西部が高く、最高地点は豊中市島熊山北方の標高133.8mの地点である。吹田市では市域北西端付近を最高所として、南へ高度を減じていく標高50~100mのなだらかな丘陵となっている。堆積土が未固結のために河川等による侵食作用が進み、開折谷が発達しており、特にその東南部は谷が丘陵の深部にまで発達している。

紫金山は佐井寺集落の東部を基点として、東南に向かって標高40m前後で伸び、平野に突出する部分で北東に屈曲して积迦ヶ池の南を東に伸びていく。そして、丘陵の南側には淀川・安威川へ流下する小河川が形成した微高地が広がり、沖積平野へと続いている。七尾瓦窯跡が所在する丘陵端部は後世の開発のために西方の丘陵本体から切り離されて、比高差2.0~2.5m余りの舌状の残丘となっている。この残丘は西から東へ伸びるが、北方から流下する正雀川の開析谷を遮るように突出するため、正雀川はこの丘陵手前で南東から東北東へとほぼ直角に流れを変えて、平野部へと流下していく。

今回の調査地点は七尾瓦窯跡の所在する丘陵の北西で、北側を流れる正雀川とのほぼ中間の地点に当たる。旧状の地形は丘陵側から正雀川に向かって傾斜する地形をなしていたものと考えられるが、一帯の開発によって大きく盛土造成されており、標高は17.0~17.6mである。

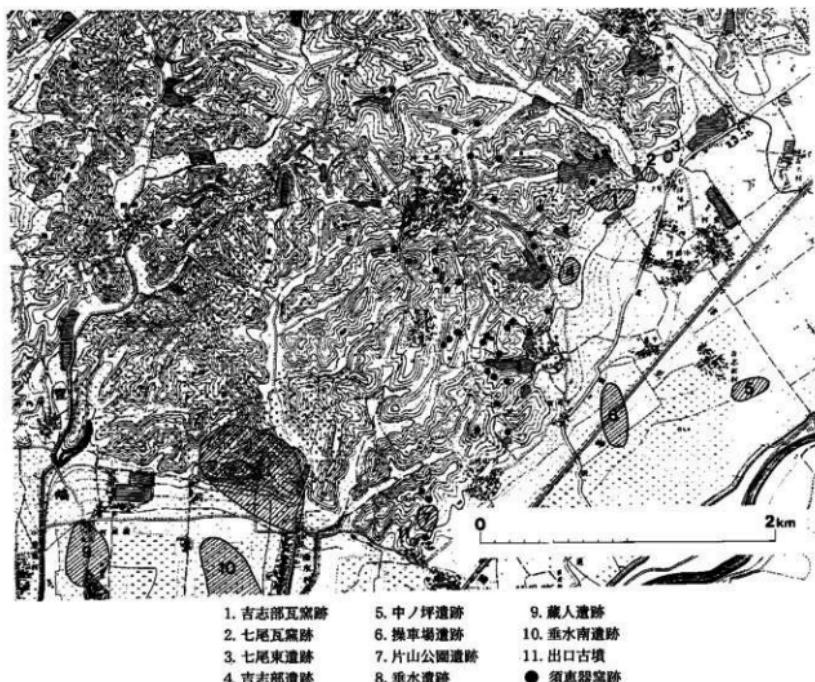
七尾瓦窯跡周辺の考古学的環境をみると、旧石器時代の遺跡では吉志部遺跡が確認されている。吉志部遺跡は千里丘陵の東南斜面に位置し、昭和初期からの探集活動による資料の収集と、昭和55年度からの7次に及ぶ調査においてナイフ形石器、削器、錐状石器、楔形石器、石核等が確認され、平成5年度に遺跡の南西部で実施された第7次調査では礫群が検出されている。繩文時代にはいると、気候の温暖化に伴う海平面の上昇により、一帯の環境は大きな変化を見せたと思われる。この時期の遺跡の丘陵の縁辺部、特に開析谷の周辺に認められ、遺物の出土は確認しているが、明確な遺構を伴う遺跡は確認されていない。吉志部遺跡では石錐、錐状石器、楔形石器等の石器類が認められるが、土器は確認されておらず、狩猟活動の作業場的な性格が推定されている。他には、昭和59年度に実施した七尾瓦窯跡に北接する水田における確認調査では、七尾瓦窯工房関連遺構の下層において晚期の船橋式土器が自然流路と考えられる落込み内の多量の炭が混じる堆積層中からまとまって出土したが、小範囲の調査であることから詳細は明らかにはできなかった。

弥生時代には千里丘陵周辺の遺跡は急激に増加し、丘陵南方の沖積平野は西摂地域と三島地域の中間地域として一つの遺跡群を形成している。七尾瓦窯跡周辺では吉志部遺跡で石包丁

等の弥生時代の遺物が認められるとともに、七尾瓦窯跡北東100mの七尾東遺跡においては平成4年度の発掘調査において、中期の竪穴建物1棟を確認しており、丘陵南縁部に当該期の遺跡の展開が想定されるが、発掘調査が規模、件数ともに十分には行われておらず、遺跡としての実態は明らかでない。

古墳時代では紫金山丘陵上で3基の古墳（吉志部1～3号墳）が確認されており、吉志部1号墳は7世紀初頭で小規模な横穴石室を有し、2・3号墳は主体部は不明であるが、6世紀初頭の年代が考えられ、他にも古墳の存在が考えられることから、紫金山一帯に古墳時代後期を通じての墓域が存在した可能性が考えられる。吹田市域の後期の古墳については前・中期の希少さに比べると、吉志部古墳等の存在は注目されるが、西摂及び三島地域の後期古墳の状況に比べると大きな相違があり、これは須恵器窯跡群の存在と関わるものと考えられる。

千里丘陵一帯に展開する須恵器窯跡群については昭和60年度に調査されたST32号窯跡及び採集遺物によって確認されたST54号窯跡、そして近年の豊中市域の窯跡群の検討から千里丘陵



第5図 周辺遺跡分布図

では陶邑窯跡群とはほぼ同時期に須恵器生産を開始したものと考えられるが、本格的な生産が行われるのは豊中市域で5世紀末、吹田市域で6世紀前半からである。そして、豊中市域では6世紀前半に、吹田市域では6世紀後半に生産のピークをむかえ、6世紀中葉を境にして生産の主体が移動していることが考えられるが、共に7世紀前半に急速に衰退し、中葉にはその活動をほぼ終了している。

紫金山一帯も釈迦ヶ池を中心に窯跡が分布し、千里古窯跡群の内、市域では最も東に位置する支群である。一帯の窯跡は名神高速道路の工事等によって、大半の窯が破壊されたが、10基以上の窯が存在したことが考えられ、時期的には6世紀中葉から後半にかけて操業したものであり、市域における窯群の操業が最盛期を迎える時期のものである。

一方、この時期の集落遺跡については、現在までは確認されておらず、昭和59年度の七尾瓦窯跡の調査において布留式甕、壺、高杯、陶邑編年II型式4段階の須恵器杯等が出土しているが実態は明らかでない。また、須恵器生産者集団の集落についても明らかではなく、丘陵東南の沖積平野上の何か所かの遺跡で、6世紀代の須恵器が出土しており、一帯の当該期の集落の展開が考えられるが、実態の把握は今後の課題である。

この須恵器生産は7世紀前半には急激に衰退していくが、奈良時代には丘陵東南部において聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯が操業を開始する。これは当地一帯の良質な原料粘土の存在という地質的条件や古墳時代の須恵器生産の技術的背景が大きな要因となったものと判断され、七尾瓦窯以後約60年を経て平安宮造宮瓦窯である吉志部瓦窯の開窯時においても大きな要因の一つであったと判断される。このように七尾瓦窯、吉志部瓦窯の操業は難波宮や平安宮という国家による大規模な造営事業にともなう官営工房が同一地域に営まれるという、他の窯業地帯に対して特色のある地域であり、当該地の古代史像を考える上で重要な問題を示唆しているといえる。

中世の遺跡については、遺構が確認された例は少ないが、昭和59・60年度の七尾瓦窯跡の調査において、13世紀代を主とする瓦器椀、土師器皿・土釜、東播系須恵器鉢等の中世遺物の包含層及び七尾瓦窯前庭部の溝と一部重複して北東から南西に走行する溝を確認している。また、他にも吉志部遺跡、七尾東遺跡、吉志部瓦窯跡工房跡等でやはり13世紀代を主とする遺物がまとまって出土しており、一帯において中世に大規模な開発が行われたことや当該期の集落の存在が考えられる。文献史料にみられる当地一帯の吉志荘内にまとまった莊園村落の存在が予想され、これらの遺物等との関連が考えられる。

第3章 平成4・5年度の発掘調査

1. 調査の経過

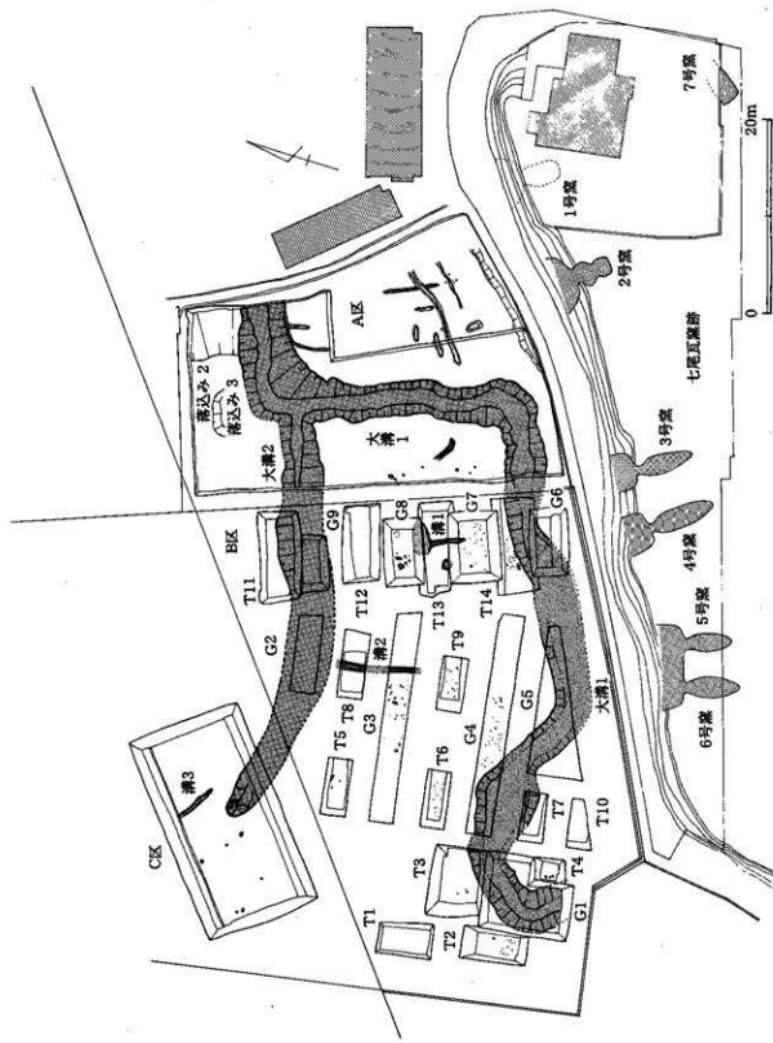
平成4・5年度の調査は七尾瓦窯跡北側隣接地の水田・会社敷地・道路予定地の3か所において行い、それぞれの調査区をA・B・C区とした。平成4年度は、平成4年7月20日～平成5年3月31日、平成5年度は平成5年5月20日～9月30日に実施した。

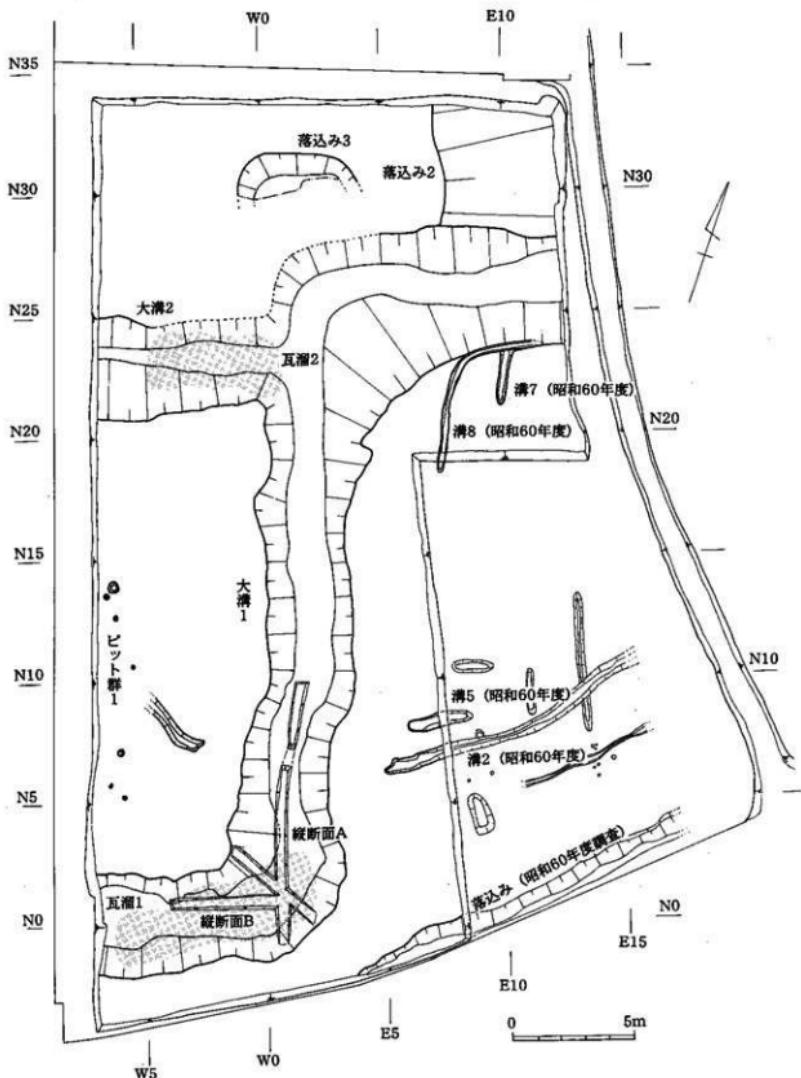
まず、A区は、七尾瓦窯跡北側の水田、吹田市岸部北5丁目10ほかにおいて、瓦窯関連遺構の検出を目的とし、調査を実施した。A区は昭和58・59年度実施の調査区と同一箇所であり、未調査区を含めやや広がる範囲を調査対象とした。調査面積は約605m²である。まず、重機により現代水田層を除去することから開始し、昭和58・59年度調査の所見を参考に現地表下0.4m以下は人力による分層発掘を行った。調査成果としては前回調査を大幅に修正することなく、現地表下0.6mから主として黄色粘土を主体とするベース層で奈良時代の瓦窯操業期の遺構面を検出した。遺構は奈良時代の瓦窯操業期の大溝、ピット、溝等、古墳時代の土坑等を検出した。また、昭和59・60年度調査で検出後、保存を図るために最小限の取り上げに止めた瓦溜は今回の調査対象とし、記録作成後取り上げを行った。これらの遺構・遺物の写真撮影及び図面作成等の記録作成後、遺構部分には川砂で埋め戻しを行い、保存を図った。また、平成4年9月12日に市民約80名の参加を得て現地説明会を開催し、調査状況等について説明した。

B区の調査は、七尾瓦窯跡北側の会社敷地でA区調査区の西隣に当たる吹田市岸部北5丁目26・28ほかにおいて実施した。当調査区は既に昭和58年度に一部の調査を行っているが、部分的な調査であり、まず包蔵状況確認のための試掘調査を実施した。試掘トレンチは規模が一定でないが、7×4m大のものを標準とし、調査区全体に及ぶように合計14か所設定した。調査面積は合計408m²である。調査はT4から重機により現代盛土層を除去することから開始し、常時3～4か所のトレンチを同時並行で行う工程で進め、順次分層発掘を行った。その結果、これまでの調査で確認された大溝の延長部を確認し、新たに溝、ピット等を検出し、さらに調査を拡大する必要が生じた。また、旧会社倉庫に当たる所は建物基礎が深くまで設置されており、基礎に当たる部分は既に攪乱を受けていたことが判明した。検出した遺構等は写真撮影及び図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行った。

B区の本調査では、七尾瓦窯跡関連遺構の検出を目的とし実施した。当調査区の内、旧会社倉庫に当たる所は、既設基礎以外の部分を対象とし、その他は未調査部分を対象とし、合計9ヶ所の調査区を設定した。まず、調査は試掘調査と同様にG1から重機により現代盛土層を除去することから開始し、常時3～4か所の調査区を同時並行で行う工程で進め、順次分層発掘を行った。調査面積は約626m²である。その結果、新たに溝、ピット等を検出し、大溝の延長部も確認したが、大溝は北西方向に向かわず、屈曲し南東方向に向きを変えていることを確認した。瓦窯工房関連建物跡と断定できる遺構は検出できなかった。検出した遺構等は写真撮影

第6図 A・B・C区検出遺構全体平面図





第7図 A区造構平面図

及び図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い、調査を終了した。なお、現地説明会は平成5年7月3日に開催し、市民約50名に調査状況等について説明した。

C区の調査は都市計画道路予定地に当たる吹田市岸部北5丁目26・28において実施した。東西22m×南北12mの調査区（調査面積約264m²）を設定し、重機を使用し、現代盛土層・水田層を除去した後、人力で分層発掘を行った。その結果、遺構面が2面認められ、1次面からは大溝の西方延長部を確認したほか小溝とピット数ヶ所を検出した。2次面ではピット群を検出し、これらの遺構等の記録作成後、埋め戻しを行い、調査を終了した。

2. 調査の成果

a. 基本層序

A区の現在の地表面は標高約16.5m（現代水田面）、B・C区では標高約17.4～17.6mを測る。これまでの調査成果を概観すると、調査区の土層序は基本的に以下の7層に分けることができる。

I層

B・C区ではほぼ全域にみられる現代の盛土で、地表面は標高約17.4～17.6mを測る。層厚約0.9～1.1mを測る。

II層

調査区全域に広がる現代の水田層である。水田面の標高は約16.5mを測る。この層の下に薄い床土がある。層厚は約30～40cmを測り、近世から現代までの遺物細片を少量含む。

III層

ほぼ調査区全域に及ぶ。層厚は約20cmを測り、灰色粘質土・灰色砂質土によって構成される平準な堆積層である。中世の瓦器・土師器等の細片が出土した。明確な遺構は認められず、中世の水田層の可能性がある。

IV層

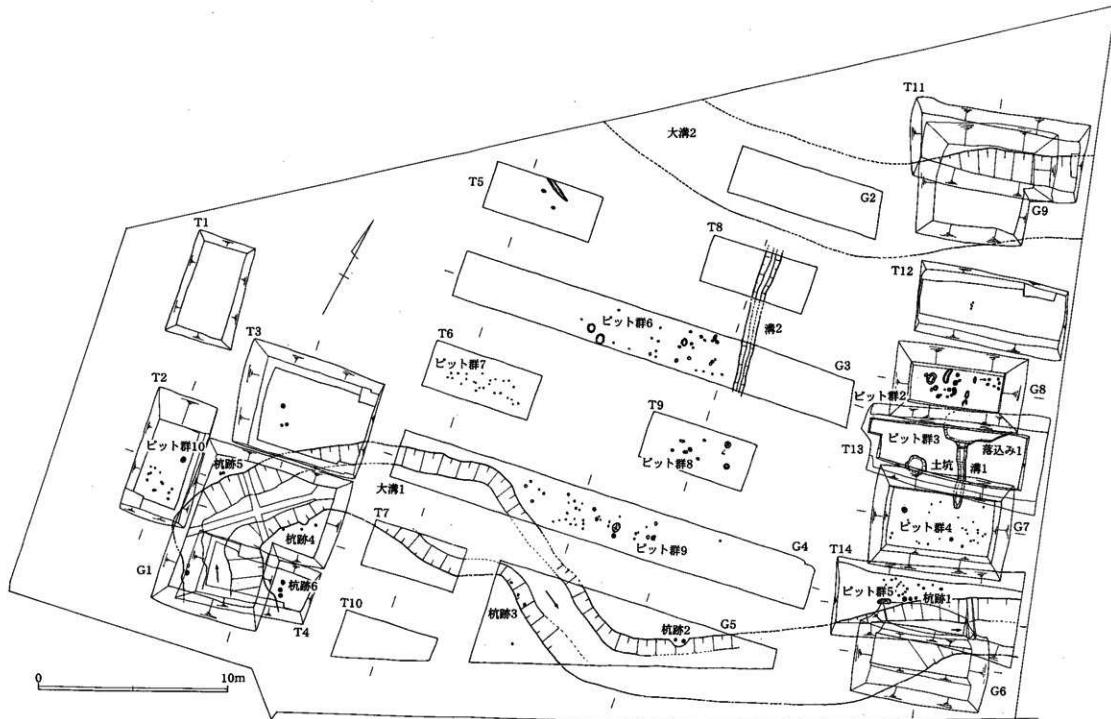
調査区で部分的にみられる灰褐色粘質土等の層で、層厚約10cmを測る。この層をベースとして第1次遺構面が形成され、B区T9で杭跡、T13で溝と土坑、G7で溝とピット等の遺構を検出した。層位的に見て、奈良時代の瓦窯操業期以後の時期と考えられるが、特定はできない。

V層

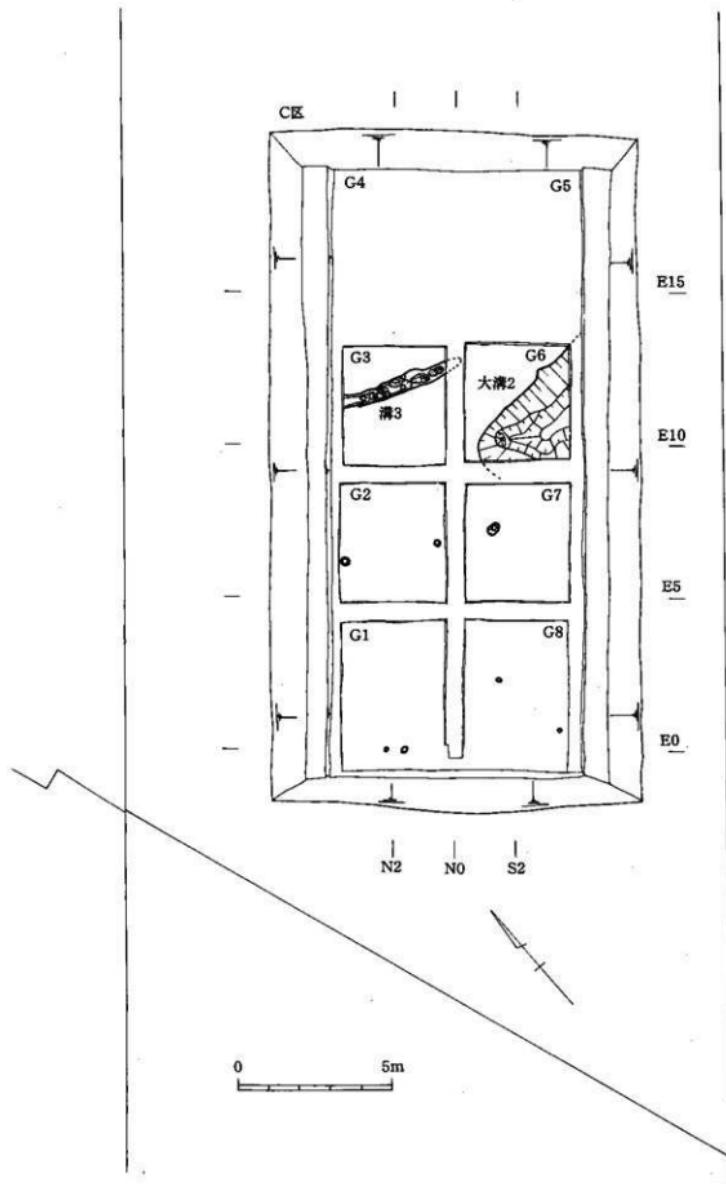
ほぼ調査区全域に及び、A区では地表下約0.5～0.6mに認められる。黄灰色粘質土・黒灰色粘質土等で構成される。やや軟弱なもの、標高15.9mを前後する平坦な遺構面（第2次遺構面）が形成される。奈良時代の瓦窯操業期の遺構面と判断される。A・B・C区で大溝、溝、土坑、ピット群、瓦溜等の瓦窯操業期の主な遺構を検出した。

VI層

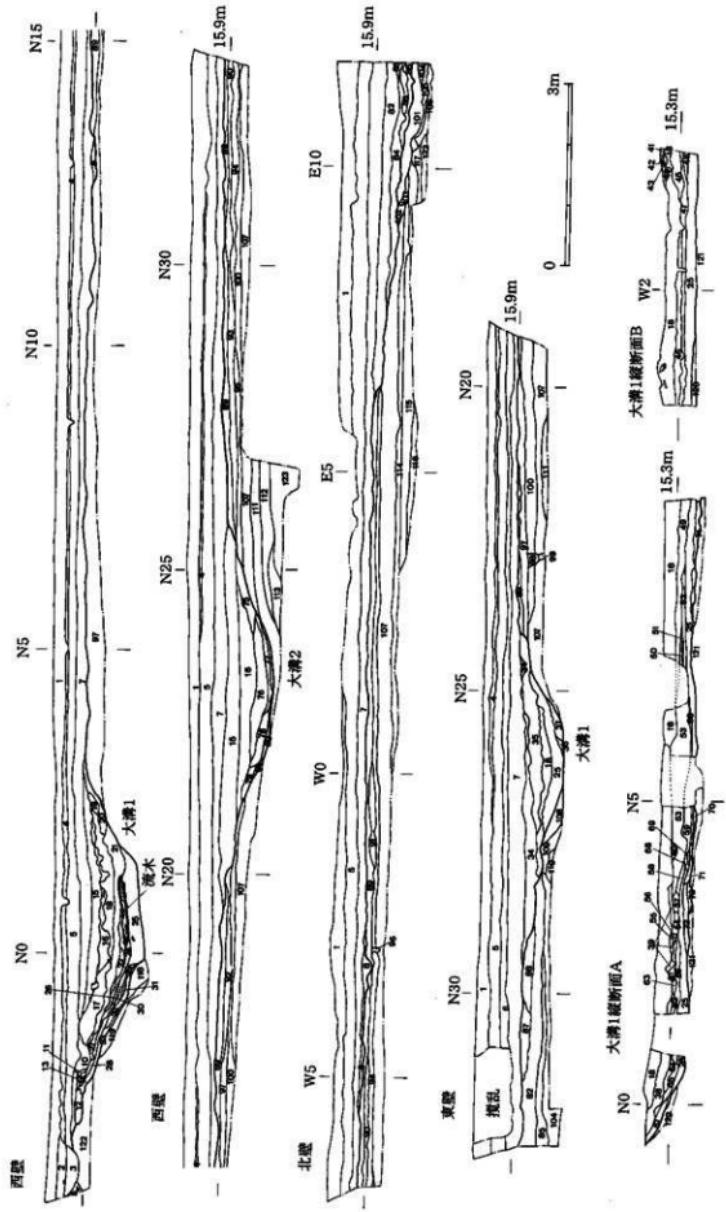
V層の下に確認した灰褐色粘土層で層厚約0.2mを測る。この層をベースに第3次遺構面が



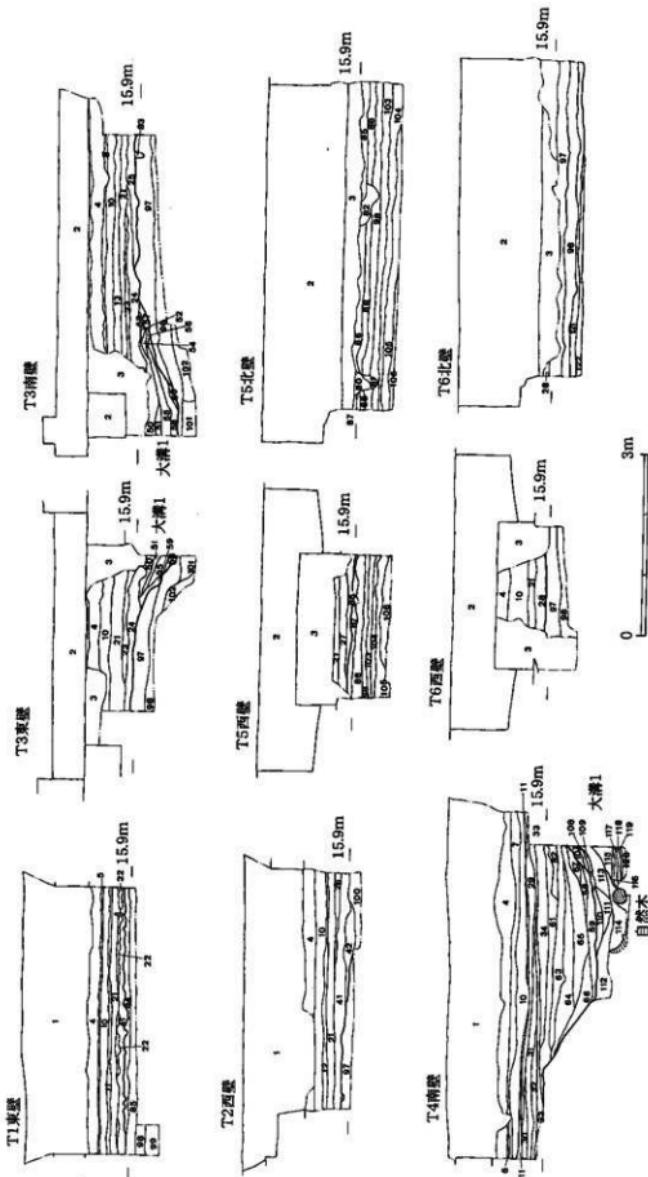
第8図 B区遺構平面図



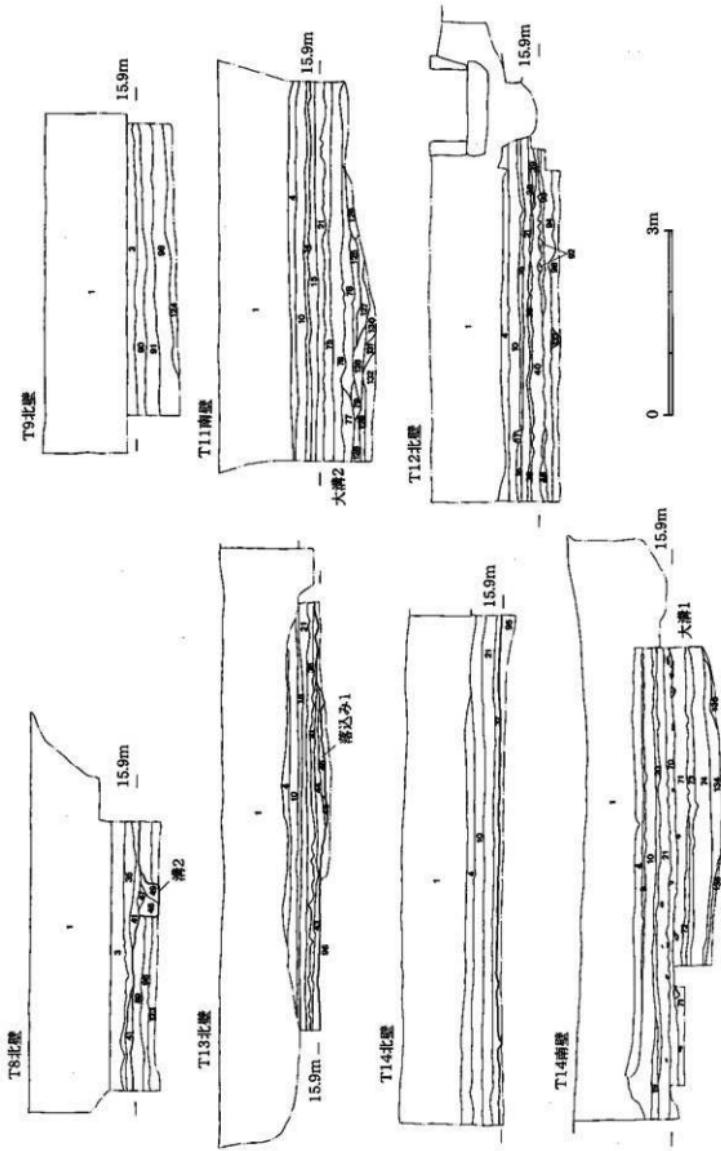
第9図 C区遺構平面図

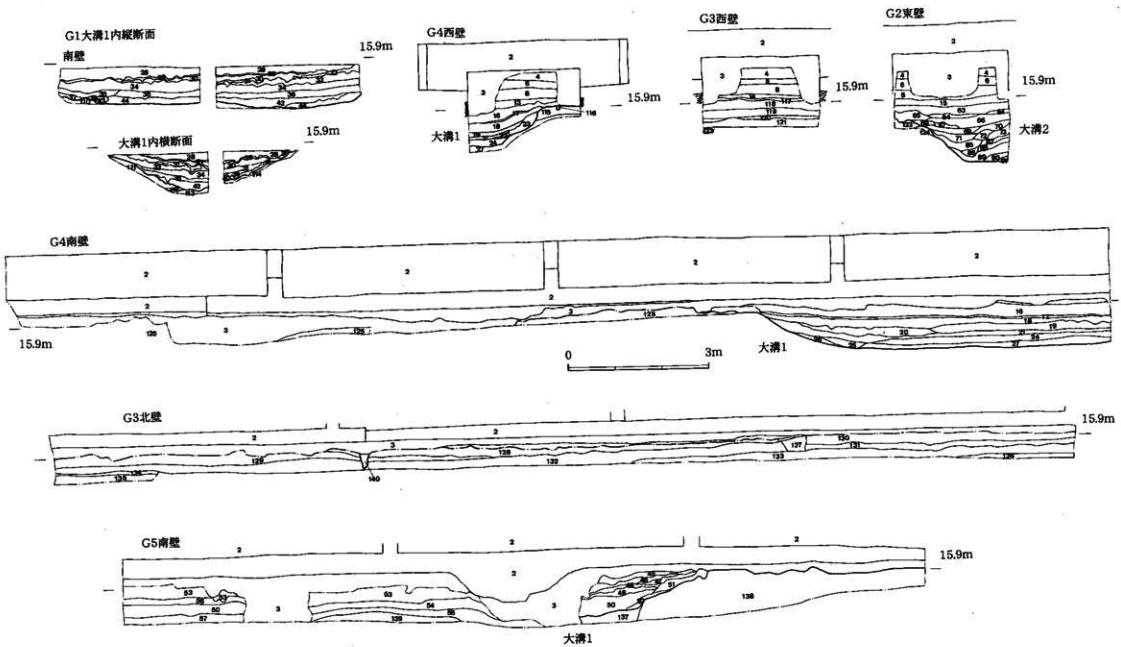


第10图 A区土层断面图

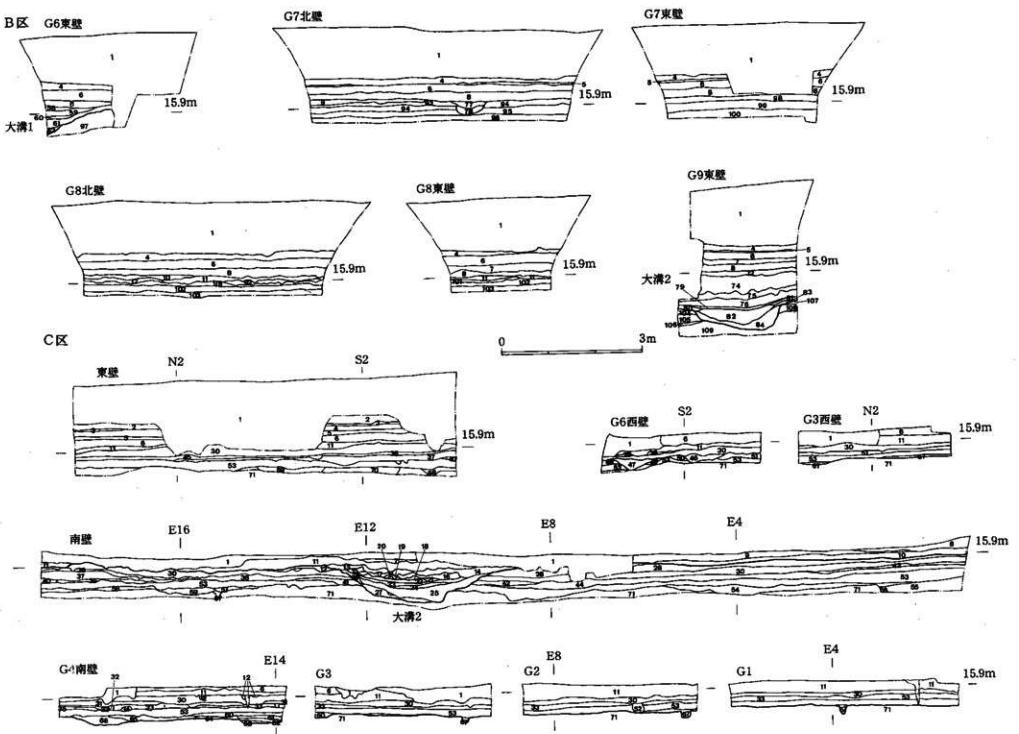


第12図 B区土層断面図(2)





第13図 B区土層断面図(3)



第14図 B区及びC区土層断面図

土層断面一覧

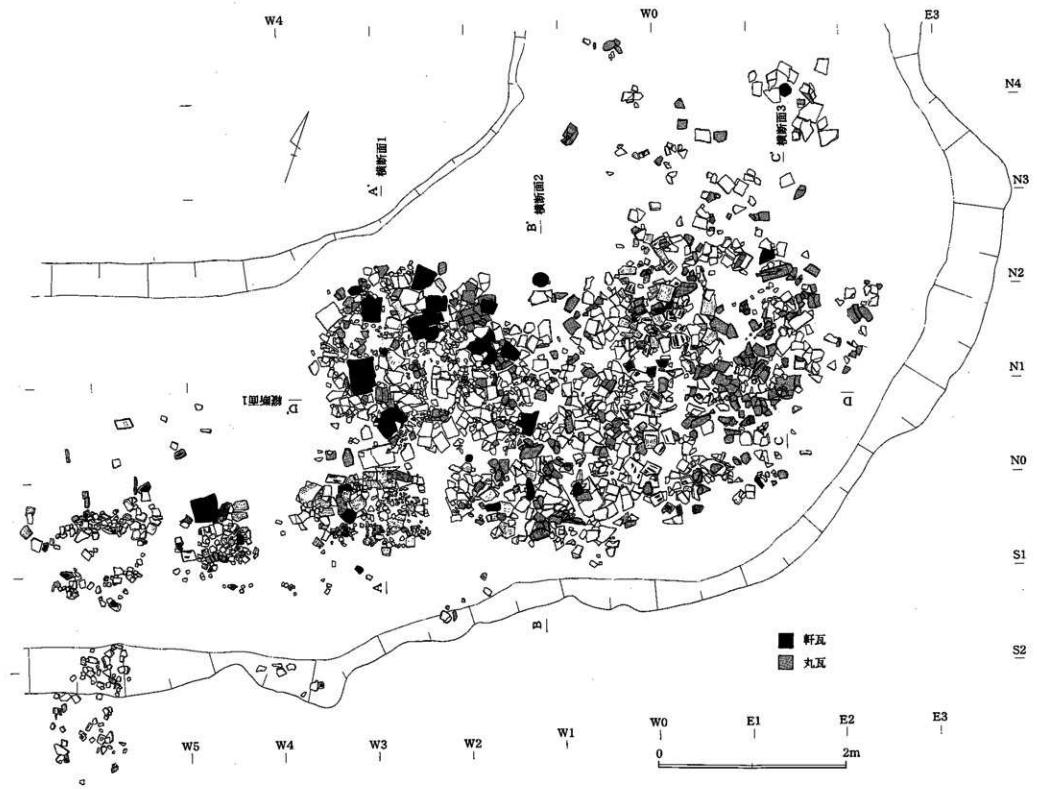
平成4年度 A区土層一覧

63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 988 989 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 998 999 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1050 1051 1052 1053 1054 1055 1056 1057 1058 1059 1059 1060 1061 1062 1063 1064 1065 1066 1067 1068 1069 1069 1070 1071 1072 1073 1074 1075 1076 1077 1078 1079 1079 1080 1081 1082 1083 1084 1085 1086 1087 1088 1088 1089 1089 1090 1091 1092 1093 1094 1095 1096 1097 1098 1098 1099 1099 1100 1101 1102 1103 1104 1105 1106 1107 1108 1109 1109 1110 1111 1112 1113 1114 1115 1116 1117 1118 1119 1119 1120 1121 1122 1123 1124 1125 1126 1127 1128 1129 1129 1130 1131 1132 1133 1134 1135 1136 1137 1138 1139 1139 1140 1141 1142 1143 1144 1145 1146 1147 1148 1149 1150 1151 1152 1153 1154 1155 1156 1157 1158 1159 1159 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 1169 1170 1171 1172 1173 1174 1175 1176 1177 1178 1179 1179 1180 1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187 1188 1188 1189 1189 1190 1191 1192 1193 1194 1195 1196 1197 1198 1198 1199 1199 1200 1201 1202 1203 1204 1205 1206 1207 1208 1209 1209 1210 1211 1212 1213 1214 1215 1216 1217 1218 1219 1219 1220 1221 1222 1223 1224 1225 1226 1227 1228 1229 1229 1230 1231 1232 1233 1234 1235 1236 1237 1238 1239 1239 1240 1241 1242 1243 1244 1245 1246 1247 1248 1249 1249 1250 1251 1252 1253 1254 1255 1256 1257 1258 1259 1259 1260 1261 1262 1263 1264 1265 1266 1267 1268 1269 1269 1270 1271 1272 1273 1274 1275 1276 1277 1278 1279 1279 1280 1281 1282 1283 1284 1285 1286 1287 1288 1288 1289 1289 1290 1291 1292 1293 1294 1295 1296 1297 1298 1298 1299 1299 1300 1301 1302 1303 1304 1305 1306 1307 1308 1309 1309 1310 1311 1312 1313 1314 1315 1316 1317 1318 1319 1319 1320 1321 1322 1323 1324 1325 1326 1327 1328 1329 1329 1330 1331 1332 1333 1334 1335 1336 1337 1338 1339 1339 1340 1341 1342 1343 1344 1345 1346 1347 1348 1349 1349 1350 1351 1352 1353 1354 1355 1356 1357 1358 1359 1359 1360 1361 1362 1363 1364 1365 1366 1367 1368 1369 1369 1370 1371 1372 1373 1374 1375 1376 1377 1378 1379 1379 1380 1381 1382 1383 1384 1385 1386 1387 1388 1388 1389 1389 1390 1391 1392 1393 1394 1395 1396 1397 1398 1398 1399 1399 1400 1401 1402 1403 1404 1405 1406 1407 1408 1409 1409 1410 1411 1412 1413 1414 1415 1416 1417 1418 1419 1419 1420 1421 1422 1423 1424 1425 1426 1427 1428 1429 1429 1430 1431 1432 1433 1434 1435 1436 1437 1438 1439 1439 1440 1441 1442 1443 1444 1445 1446 1447 1448 1449 1450 1451 1452 1453 1454 1455 1456 1457 1458 1459 1459 1460 1461 1462 1463 1464 1465 1466 1467 1468 1469 1470 1471 1472 1473 1474 1475 1476 1477 1478 1479 1479 1480 1481 1482 1483 1484 1485 1486 1487 1488 1488 1489 1489 1490 1491 1492 1493 1494 1495 1496 1497 1498 1498 1499 1499 1500 1501 1502 1503 1504 1505 1506 1507 1508 1509 1509 1510 1511 1512 1513 1514 1515 1516 1517 1518 1519 1519 1520 1521 1522 1523 1524 1525 1526 1527 1528 1529 1529 1530 1531 1532 1533 1534 1535 1536 1537 1538 1539 1539 1540 1541 1542 1543 1544 1545 1546 1547 1548 1549 1549 1550 1551 1552 1553 1554 1555 1556 1557 1558 1559 1559 1560 1561 1562 1563 1564 1565 1566 1567 1568 1569 1569 1570 1571 1572 1573 1574 1575 1576 1577 1578 1579 1579 1580 1581 1582 1583 1584 1585 1586 1587 1588 1588 1589 1589 1590 1591 1592 1593 1594 1595 1596 1597 1598 1598 1599 1599 1600 1601 1602 1603 1604 1605 1606 1607 1608 1609 1609 1610 1611 1612 1613 1614 1615 1616 1617 1618 1619 1619 1620 1621 1622 1623 1624 1625 1626 1627 1628 1629 1629 1630 1631 1632 1633 1634 1635 1636 1637 1638 1639 1639 1640 1641 1642 1643 1644 1645 1646 1647 1648 1649 1649 1650 1651 1652 1653 1654 1655 1656 1657 1658 1659 1659 1660 1661 1662 1663 1664 1665 1666 1667 1668 1669 1669 1670 1671 1672 1673 1674 1675 1676 1677 1678 1679 1679 1680 1681 1682 1683 1684 1685 1686 1687 1688 1688 1689 1689 1690 1691 1692 1693 1694 1695 1696 1697 1698 1698 1699 1699 1700 1701 1702 1703 1704 1705 1706 1707 1708 1709 1709 1710 1711 1712 1713 1714 1715 1716 1717 1718 1719 1719 1720 1721 1722 1723 1724 1725 1726 1727 1728 1729 1729 1730 1731 1732 1733 1734 1735 1736 1737 1738 1739 1739 1740 1741 1742 1743 1744 1745 1746 1747 1748 1749 1749 1750 1751 1752 1753 1754 1755 1756 1757 1758 1759 1759 1760 1761 1762 1763 1764 1765 1766 1767 1768 1769 1769 1770 1771 1772 1773 1774 1775 1776 1777 1778 1779 1779 1780 1781 1782 1783 1784 1785 1786 1787 1788 1788 1789 1789 1790 1791 1792 1793 1794 1795 1796 1797 1798 1798 1799 1799 1800 1801 1802 1803 1804 1805 1806 1807 1808 1809 1809 1810 1811 1812 1813 1814 1815 1816 1817 1818 1819 1819 1820 1821 1822 1823 1824 1825 1826 1827 1828 1829 1829 1830 1831 1832 1833 1834 1835 1836 1837 1838 1839 1839 1840 1841 1842 1843 1844 1845 1846 1847 1848 1849 1849 1850 1851 1852 1853 1854 1855 1856 1857 1858 1859 1859 1860 1861 1862 1863 1864 1865 1866 1867 1868 1869 1869 1870 1871 1872 1873 1874 1875 1876 1877 1878 1879 1879 1880 1881 1882 1883 1884 1885 1886 1887 1888 1888 1889 1889 1890 1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1898 1899 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1909 1910 1911 1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1949 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1988 1989 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1998 1999 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2019 2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026 2027 2028 2029 2029 2030 2031 2032 2033 2034 2035 2036 2037 2038 2039 2039 2040 2041 2042 2043 2044 2045 2046 2047 2048 2049 2049 2050 2051 2052 2053 2054 2055 2056 2057 2058 2059 2059 2060 2061 2062 2063 2064 2065 2066 2067 2068 2069 2069 2070 2071 2072 2073 2074 2075 2076 2077 2078 2079 2079 2080 2081 2082 2083 2084 2085 2086 2087 2088 2088 2089 2089 2090 2091 2092 2093 2094 2095 2096 2097 2098 2098 2099 2099 2100 2101 2102 2103 2104 2105 2106 2107 2108 2109 2109 2110 2111 2112 2113 2114 2115 2116 2117 2118 2119 2119 2120 2121 2122 2123 21

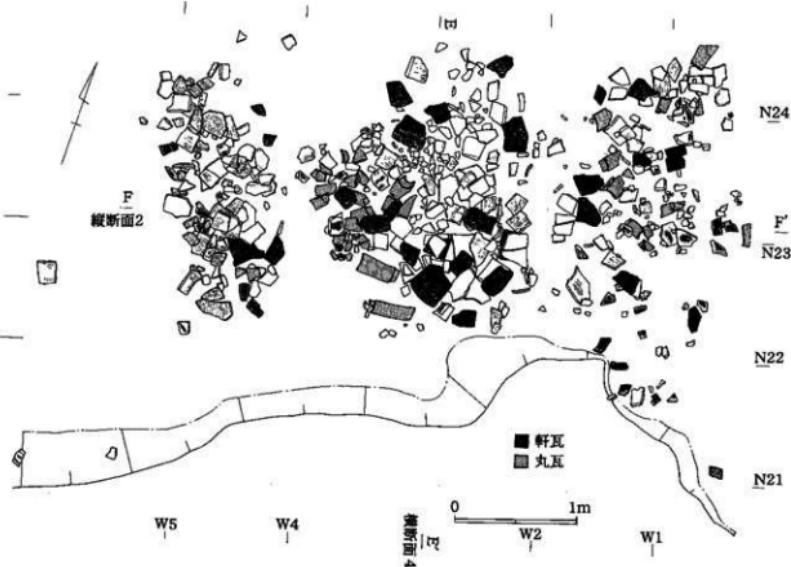
平成5年度 B区土層一覧

平成5年度 C区土層一覧

--



第15図 瓦溜1平面図



第16図 瓦窯2平面図

形成される。A区の北端付近で古墳時代の土坑を検出した。

Ⅳ層

黄色系の堅緻な粘土層で地山と判断される。A・B区の南端で認められた他、C区では白灰色粘土層として確認でき、この層をベースとして第4次遺構面が形成される。この面は北端で標高約15.5mを測り、南端ではこれより約0.25m低い。ピット群・落込みを検出した。なお、昭和59・60年度のA区の調査では古墳時代の落込み、縄文時代の落込み等の遺構を検出した。

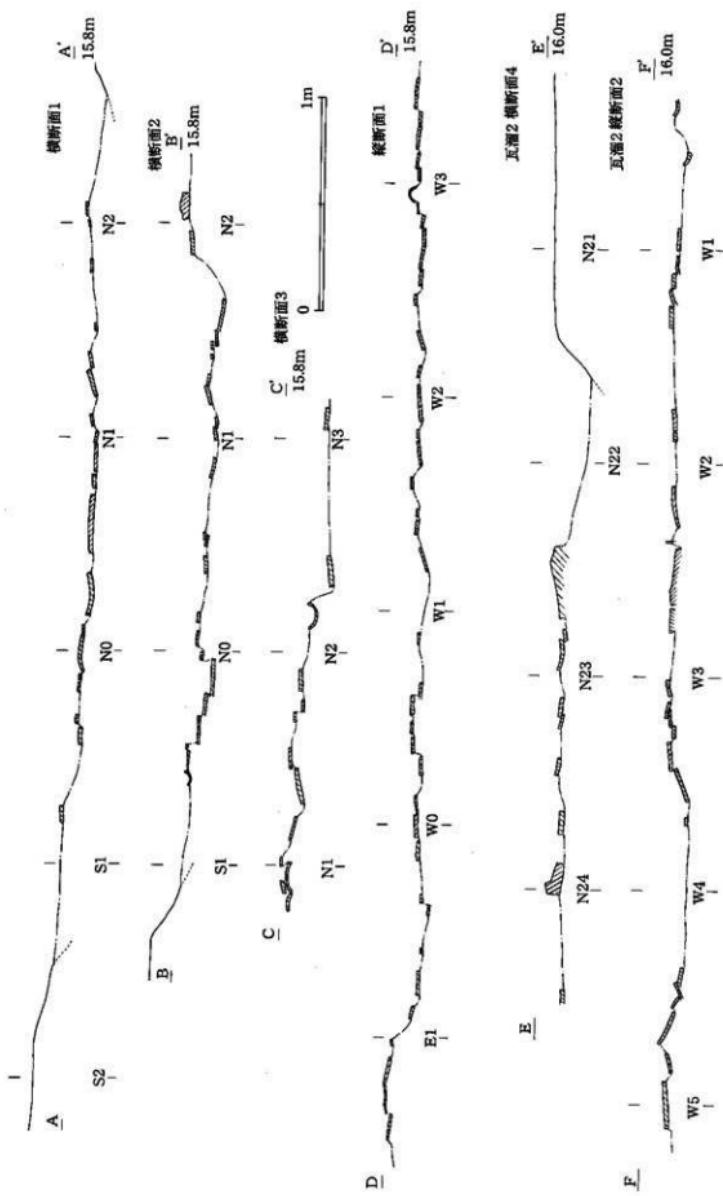
b. 遺構

(1) 第1次遺構面

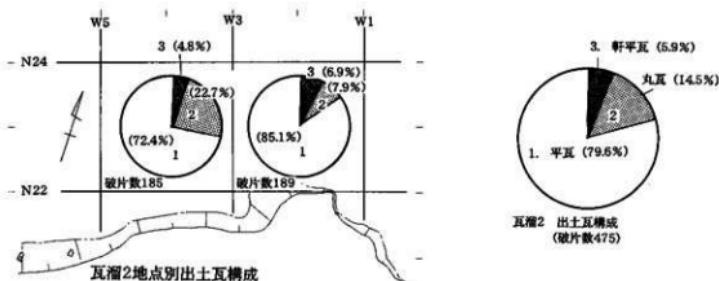
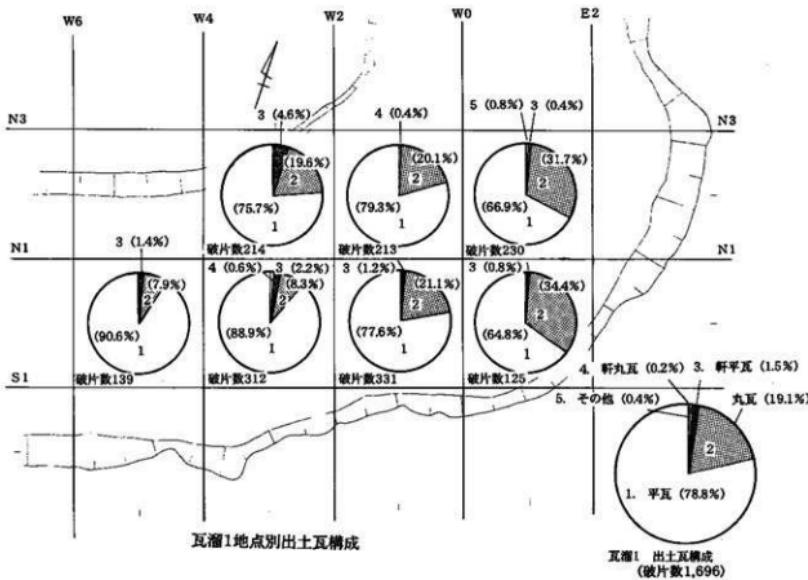
杭跡4基、溝、落込み、ピット等の遺構を検出した。出土遺物はほとんど認められず、層位からみて瓦窯操業期以後と判断できるが、所属時期については明らかでない。

杭跡はB区T9で検出したもので、径約0.15m、深さ0.2~0.25mを測る円形のものを南北に3基連接した状態で検出した。また、南へ0.7mの位置に同様の杭跡を検出した。いずれも遺構内堆積土は灰色粘土で、径約4cmの木質部が遺存した。材の大きさから、建物の柱とは考えられず、柵状のものと判断される。

溝1はB区T13及びG7で検出したもので、南北方向に走行する。幅約0.4m、深さ約0.1mを測り、北端は土坑で削られ、南端はG7の北端で途切れる。検出長は約3.5mを測り、溝内堆



第17图 瓦沟1·2 横·纵断面图



第18図 瓦溜1・2出土瓦構成図

積土は黒灰色粘質土である。

落込み1はB区T13で検出した、不整な長椭円形を呈する浅いものである。東西長約3.2m、南北検出長約1mを測る。遺構内堆積層は灰色砂・淡黄灰色粘土等数層みられる。

ピットはB区G7で1基検出した。径約0.25m、深さ約0.07mを測る。大きさからみて柱穴とは思えない。

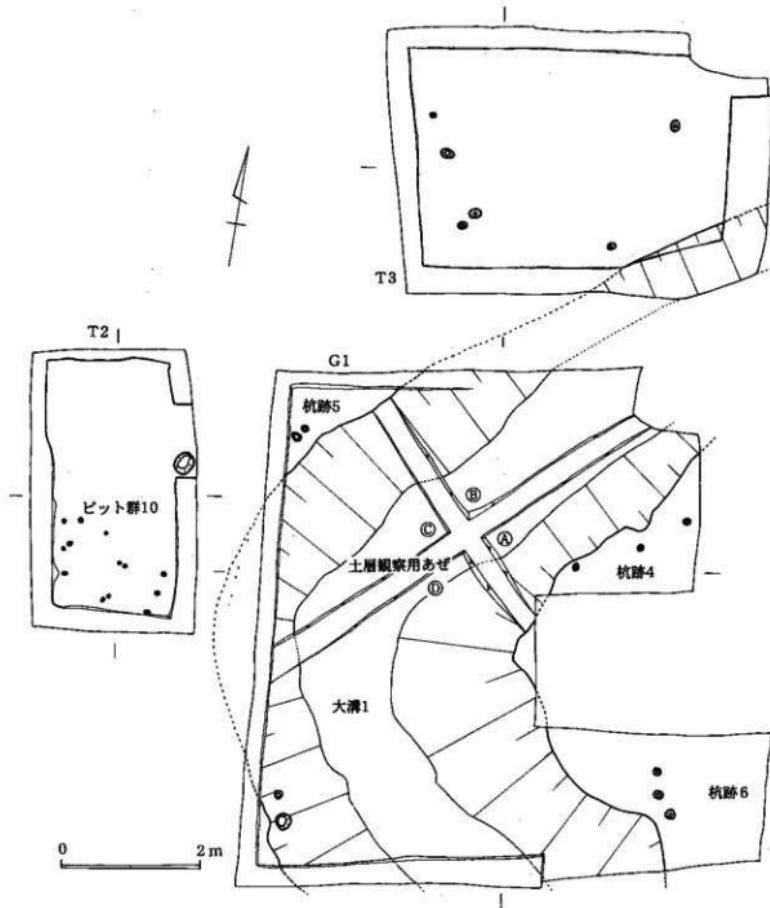
(2) 第2次遺構面(瓦窯操業期)

大溝、ピット、溝、瓦窯等の遺構を検出した。前回の調査で報告済みのものは省略する。

・大溝

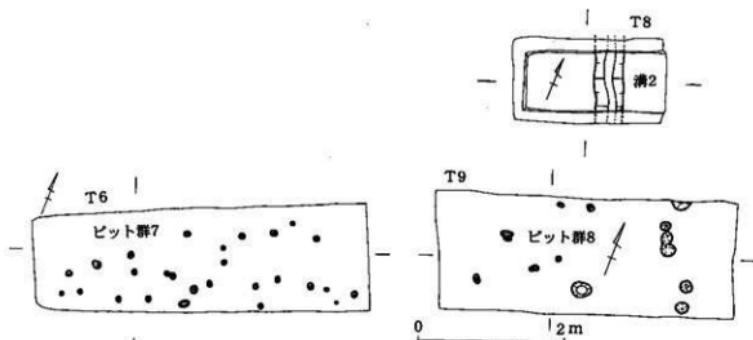
以前の調査で確認した大溝のうち、規模の大きな主なものを大溝1とし、分流を大溝2とした。

大溝1はA・B区で検出した主要な遺構で、B区の南西端付近から認められ、北西の向きから急に北東方向に屈曲し、さらに南東に向きを変え、約15m走行する。6号瓦窯の前面から5・4・3号瓦窯の前面を約30m東に走行し、A区に入る。2・3号瓦窯間で直角に近い角度

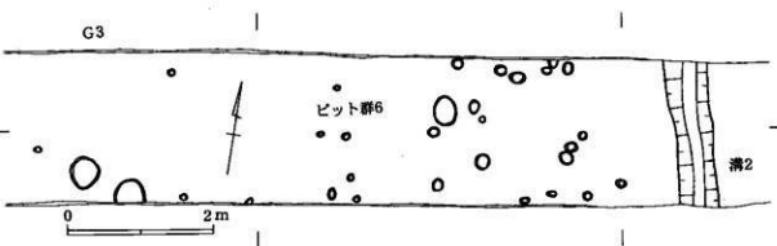


第19図 B区T2・3、G1遺構平面図

で北に向きを変えてA区のほぼ中央を北へ約25m走行する。A区の北部からほぼ直角に東に向きを変え、A区の北東端に至る。検出総延長は約95mである。溝幅は上端部で約3~4.5mを測り、深さは約1mを測る。溝底はU字状を呈し、最深部は標高約14.90m~15.10mを前後し、大きな高低差は認められない。護岸などの杭跡等はA区では認められず、B区ではT4・14、G1で検出した。溝内堆積層は基本的には4期に区分でき、最下層から最上層へI~IV期とした。最下層のI期は有機物・炭を含む青灰色系粘土・粘質土が見られ、砂の堆積も若干認められる。有機物・炭を含む粘土層が認められることから、この時期は流水が顕著でなく、むしろやや澱んだ状況であったと考えることができる。I期の粘土層からは長さ約1.2m、径約0.1mを測るやや遺存状態の悪い自然木を検出したほかは、遺物は出土しなかった。II期は地山の黄色粘土を含んだ灰色系粘土が数層堆積しており、ほとんど遺物は出土しなかった。III期は層厚20~30cmを測る軟質・精良な灰色粘土層を主体とし、地点によって部分的に灰色系砂層が認められる。III期の瓦の出土は溝内のほぼ全域にわたってみられるが、特にA区の南端ではまとまってみられ、瓦溜（瓦溜1）を形成する。今回の調査で出土した瓦の大部分がここからの出土である。IV期は最上層で灰色系粘質土で構成される。出土の瓦は細片が多く、量も



第20図 B区 T6・8・9遺構平面図

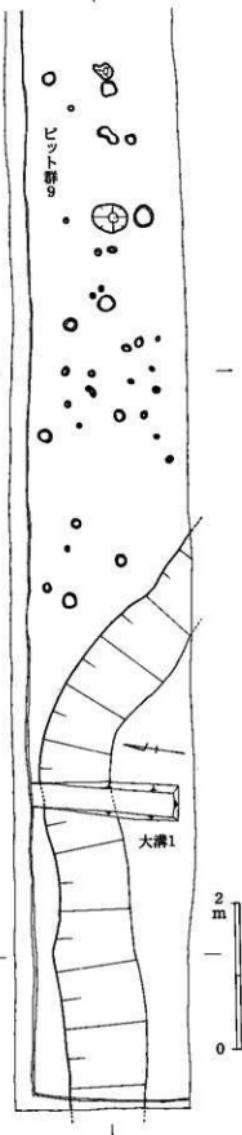


第21図 B区 G3遺構平面図

少ない。瓦の出土状況から見て、II期堆積土上面が瓦窯操業期の最終段階の溝底面と判断される。

瓦溜1は、瓦片が東西11m、南北3.5mの範囲に密集した状態で検出された。出土状況には規則性がなく、全域に灰層が堆積し、また、瓦は大半が破損していることから、瓦窯での最終段階の焼成後の一時期に投棄されたものと考えられる。出土した瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦などがある。瓦溜1の出土瓦の構成をやや子細にみると（第18図参照）、全体として平瓦が78.8%を占め、次に丸瓦が19.1%で、軒平瓦が1.5%、軒丸瓦が0.2%、その他が0.4%である。平瓦が大部分を占め、8割近い数値を示す。丸瓦も多く2割近い。軒瓦については約9割が軒平瓦であり、軒丸瓦に対して軒平瓦の数量が圧倒的に多い。次に、出土位置に傾向が認められるかどうかをみるために瓦溜（特に瓦の出土密度の高い部分）を 2×2 mの区画で7つに分け、それぞれの区画の出土瓦の構成を示した。そうするとまず、東の方へいくほど丸瓦の比率が高まっていることが認められた。また、軒平瓦の出土は北西部に出土地が偏っている傾向がみられた。

大溝2はA・B・C区にまたがり検出された溝である。先端部をC区の南端で確認し、B区をやや弧状を呈しながら東に走行し、A区の北端付近で大溝1と合流する。検出総延長約40mを測る。底部はU字状を呈し、上端部で幅3～5m、深さ約0.7mを測り、大溝1に比べ底が深い。大溝2の先端部（西端）は2段の土坑状を呈し、その底部付近及び斜面に径約0.1mの小ピットを3基検出した。溝内堆積土は大溝1の堆積土にみられたII～IV期の溝内堆積土と同一層序である。B・C区での大溝2からはほとんど遺物を検出しなかったが、A区での大溝2の東端、大溝1との合流点付近でIII期に属する顯著な瓦溜（瓦溜2）が認められた。瓦はすべて破片であり、出土状況には特に規則性がなく、投棄されたものと考えられる。瓦溜2の出土瓦の構成を瓦溜1と同様にやや子細にみると、全体として平瓦が79.6%を占め、次に丸瓦が14.5%で、軒平瓦が5.9%である。瓦溜1と同様に平瓦が大部分を占め、ほぼ8割を示す。



第22図 B区G4遺構平面図

丸瓦はやや少なく1割5分弱である。軒瓦についてはすべて軒平瓦であり、瓦溜2全体の中でもその割合は高い。出土位置の傾向をみるために瓦溜2を $2 \times 2\text{ m}$ の区画で2つに分け、それぞれの区画の出土瓦の構成を示した。あまり傾向は顕著でなかったが、やや西側に丸瓦が多い傾向にある。これらの瓦は瓦窯操業期の所産とみられる。ただ、当地点は瓦窯から 30 m 以上離れており、南端部の瓦溜1とは廃棄された状況が異なると考えられる。

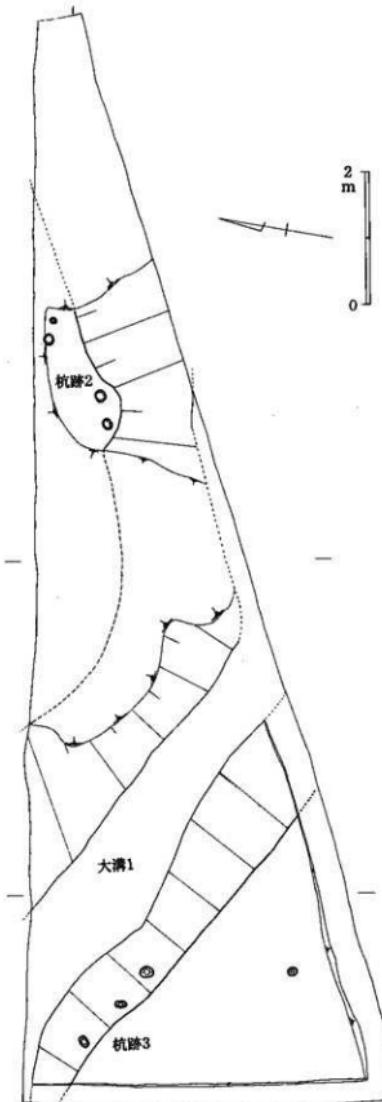
溝

溝はB・C区で合計2ヶ所検出した。溝2はB区T8及びG3で検出した。南北方向で $N - 23^\circ - W$ を測る。幅約 0.5 m 、深さ約 0.3 m を測り、底部断面はやや鈍い箱型を呈する。溝内堆積土は若干の炭を含んだ黒灰色粘土等である。北端は大溝2に接続し、南端はT9の手前で途切れると思われる。

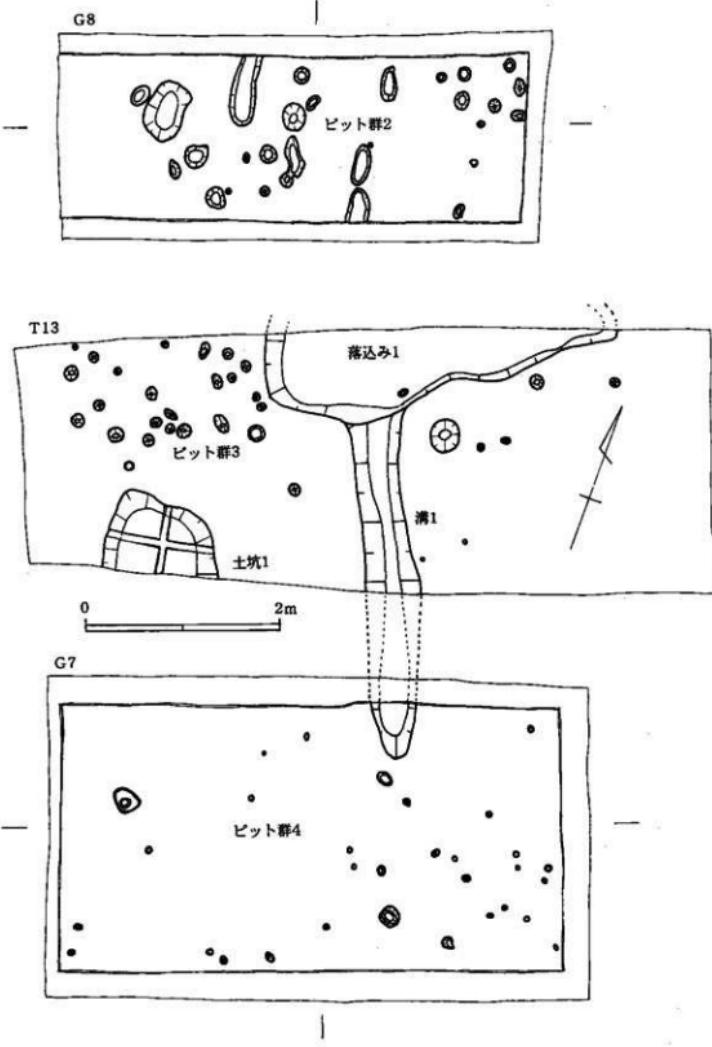
溝3はC区で検出した東西方向の溝で、 $N - 69^\circ - W$ を測る。底部断面は浅いU字状を呈し、凹凸が激しく、整備されたものではない。幅約 0.5 m 、深さ約 0.1 m を測る。溝内堆積土は若干の炭を含んだ黒灰色粘土等である。遺物は出土しなかった。大溝2とは合流せず、約 2 m の間隔がある。

ピット群

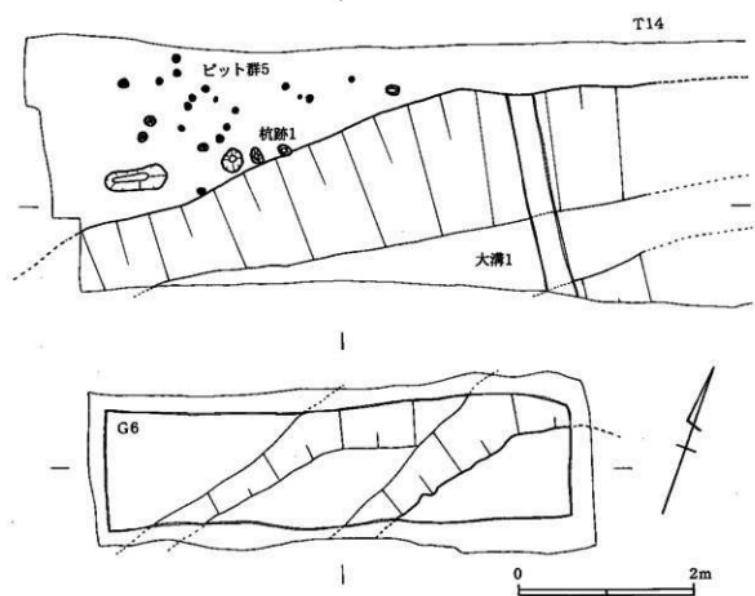
ピット群はA・B・C区で合計10ヶ所検出した。小規模の浅いピットで柱痕は認められない。いずれも本格的な建物跡を復元できるものではなく、横状のものか小屋程度の簡易なものと思われる。遺物



第23図 B区G5遺構平面図



第24図 B区T13、G7・8遺構平面図



第25図 B区T14、G6遺構平面図

はほとんど出土しなかった。

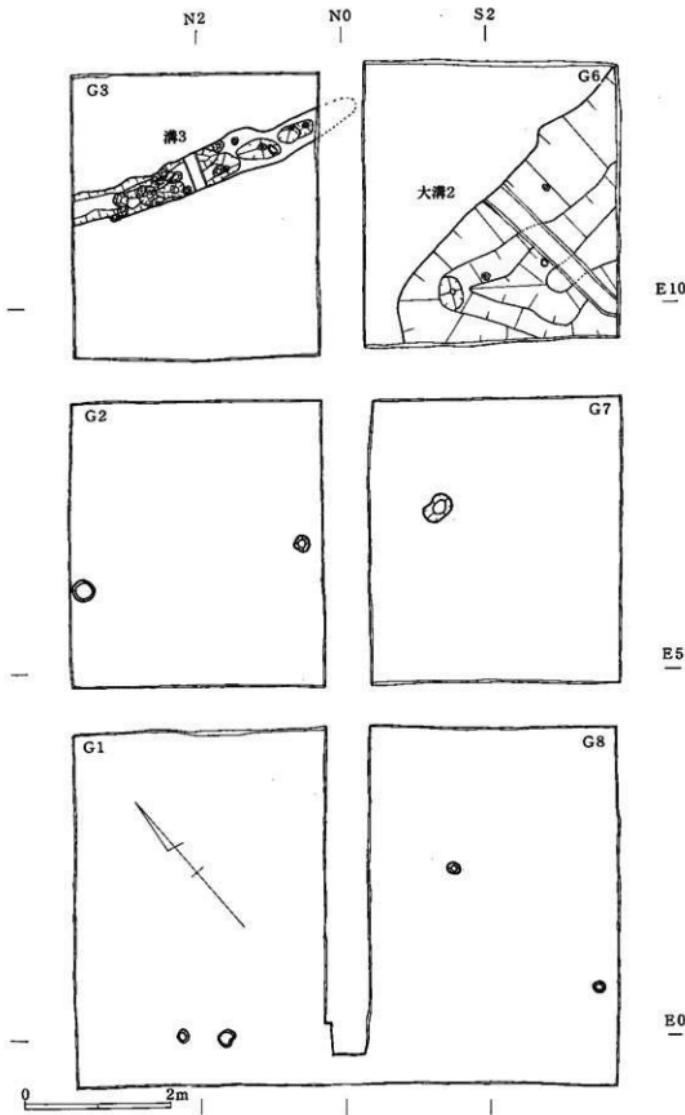
ビット群1はA区の大溝西側で散在して認められた。直径0.5m、深さ約0.1mのやや大型のもの1基と直径0.3m、深さ0.1mのもの1基、直径0.2m、深さ0.1mのもの5基がみられた。いずれも遺構内堆積土は灰色粘質土である。

ビット群2はB区のG8で検出したものである。径 0.6×0.4 mで深さ約0.06mを測り、楕円形を呈するもの以外に径0.1~0.2m大の円形のもの、長さ0.4m以上の細長いものなど合計29基検出した。堆積土は砂混じりの灰褐色粘質土である。いずれも浅いものである。

ビット群3はB区のT13で検出したもので、0.1~0.2m大の円形のもの合計30基検出した。とくにG7の西半部で集中して検出した。堆積土はビット群2と同様の砂混じりの灰褐色粘質土である。

ビット群4はB区のG7で検出した。ビット群3に比べ散在的である。径0.05~0.1m大の円形のもの合計30基検出した。堆積土はビット群2・3と同様である。

ビット群5はB区のT14、大溝1の北岸で検出した。ビット群4に比べやや集中する。径0.1~0.2m大の円形のもの合計21基検出した。堆積土は灰色粘質土である。



第26図 C区第2次遺構面平面図

ピット群6はB区のG3中央付近で集中して検出した。径0.1~0.2m大の円形のもの27基、径0.4m大のもの3基合計30基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群7はB区のT6でやや散在した状態で検出した。径0.1mの円形の小ピットを合計27基検出した。東西方向に並ぶ可能性はあるが、明確ではない。堆積土は灰色粘質土である。

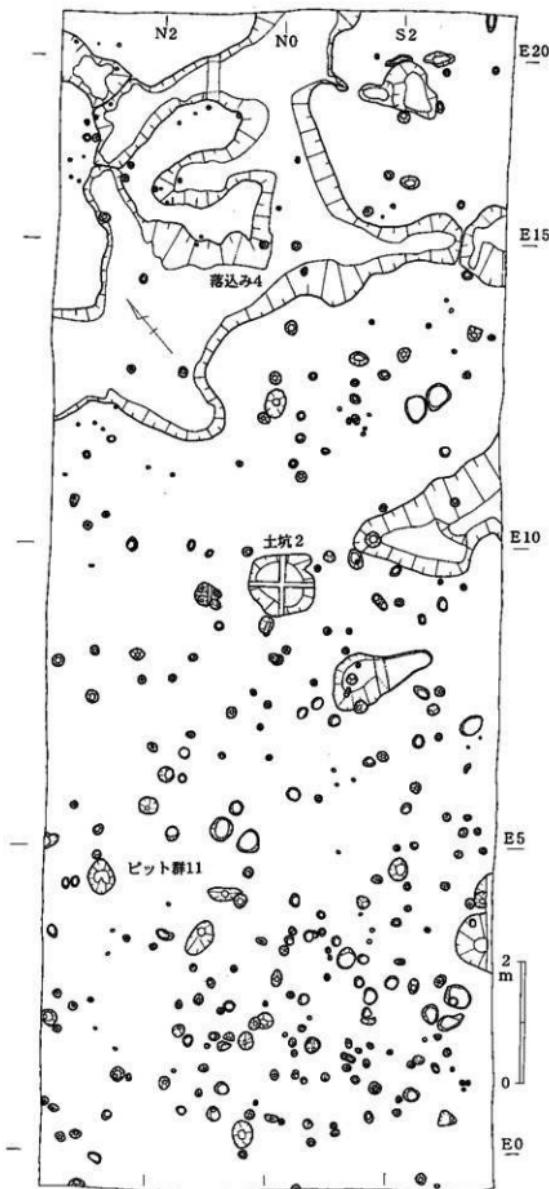
ピット群8はB区のT9で散在した状態で検出した。径0.1~0.2m大の円形のもの10基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群9はB区のG4、大溝1の北岸でややまとまった状態で検出した。径0.1~0.2mの円形のもの34基、径0.4mの円形のピット1基、径0.3mの円形のピット1基含め合計36基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

ピット群10はB区のT2、大溝1の西岸でややまとまった状態で検出した。径0.06mの円形のもの13基検出した。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡

杭跡はB区で合計6ヶ所検出した。大溝1の護岸に関わ



第27図 C区第4次遺構面平面図

り設置されたものと考えられる。

杭跡 1 は T 14 で認められ、大溝の北岸に 0.1 ~ 0.3 m と間隔はまちまちであるが、4 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.15 ~ 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。遺構内堆積土は灰色粘質土である。

杭跡 2 は G 5、大溝の北岸に約 1 m の間隔をあけて 2 ケ所ずつ合計 4 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.15 ~ 0.2 m、深さ 0.04 m を測る。

杭跡 3 は G 5、大溝の南岸やや斜面に下った位置に約 0.6 ~ 0.8 m の間隔をあけて 3 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1 ~ 0.15 m、深さ 0.1 m を測る。

杭跡 4 は G 1、大溝の南岸に約 0.8 ~ 1 m の間隔をあけて 3 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1 m、深さ 0.05 m を測る。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡 5 は G 1、大溝の北岸に約 0.1 m の間隔をあけて 2 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1 m、深さ 0.03 m を測る。堆積土は灰色粘質土である。

杭跡 6 は T 4、大溝の東岸に約 0.3 m の間隔をあけて 3 基並列する。いずれも平面円形を呈し、直径約 0.1 m、深さ 0.04 m を測る。堆積土は灰色粘質土である。

土坑

土坑 1 は B 区 T 1 3 で検出した。約 1.1 m 大、深さ約 0.05 m を測る。平面隅丸方形を呈し、底部は浅いすり鉢状を呈する。遺構内堆積土は灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

その他

昭和 60 年度調査で検出した溝 2、溝 5 の西側延長部を検出した。溝 2 の西側延長部は幅約 0.5 m、深さ約 0.1 m を測り、溝 5 の西側延長部は幅約 0.5 m、深さ約 0.1 m を測る。いずれも大溝までは到達せず、途中でとぎれている。

(3) 第 3 次遺構面

落込み 2

A 区の北東端で部分的に検出した。南北方向に走行する溝状のものと考えられるが、部分的な検出であり、形状・規模については明確でない。底部は東側に緩やかに下がり、検出部分で深さ約 0.3 m を測る。遺構内堆積土は、上層は灰色系の粘土で下層は黄・灰色系砂で構成される。下層の砂の堆積から、流水のあったことが想定できる。出土遺物は検出できず、時期については明確にできなかったが、落込み 2 の堆積後、大溝 1 が形成されていることから大溝 1 より古く、瓦窯操業期以前の可能性がある。

落込み 3

A 区の北端で検出したもので、平面の形態は隅丸方形を呈し、底部はすり鉢状を呈するが、南側は遺存していない。東西現存長約 5 m、南北現存長約 1.7 m、深さ約 0.7 m を測る。堆積土は黒褐色粘土である。底部で古墳時代の須恵器杯身が出土したほか、堆積土中に須恵器杯蓋が出土した。古墳時代の所産と判断できるが、その性格については明確にできなかった。

(4) 第 4 次遺構面

ピット群 11

C区で直径 0.1 ~ 0.3 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m のピットを合計 301 基検出した。ピットは C区全体に認められたが、特に西半部に集中してみられた。遺構内堆積土は暗灰色粘土である。柱痕の残るものではなく、またその配置には規則性が認められず、人為的なものかどうか判然としない。遺物は出土せず、形成時期については明らかでない。

土坑

土坑 2 は C区の中央で検出した土坑で、形態は平面円形で底部は浅い緩やかなすり鉢状を呈する。径約 1 m、深さ約 0.1 m を測り、遺構内堆積土は暗灰色粘土である。出土遺物はなかった。

落込み 4

C区の西半部で検出した浅い不定形の落込みである。東西検出長 7 m、南北検出長 7.5 m、深さ約 0.2 m を測る。遺構内堆積層は茶褐色砂である。遺物は出土しなかった。落込み内にピットを検出したが、相関関係はないと思われる。形状から人為的なものではなく、自然遺構と考えたほうが妥当である。

c. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、A・B・C区合わせて遺物収納箱約 105 箱分に及ぶ。遺物の内容は、瓦類（軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、道具瓦）、須恵器、土師器、瓦器等が認められたが、圧倒的に瓦類が多い。また、瓦類の中でも平瓦・丸瓦が圧倒的に多く、軒瓦は約 70 点に過ぎない。出土遺物の大半は、大溝上層の 2か所の瓦窯で出土したもので瓦窯操業期の遺構面では比較的少ない。また、A区は昭和 59・60 年度調査区と同一調査区であり、以前出土した遺物と接合可能のものもあった。

軒丸瓦（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）

(1) ~ (5) は軒丸瓦で難波宮 6303 型式軒丸瓦と同范である。完形に近いものは少なく、外区外縁が遺存するだけの細片が多い。内区は彫りの明瞭な細長い複弁蓮華文を主文とする。蓮弁は突出気味で、弁端が反り、やや間弁は鈍いが文様は全般的に鮮明である。T字状の間弁は先端がやや高く、長く伸び、蓮弁の根元まで達する。わずかに盛り上がった中房は小さく、1 + 6 の蓮子を配する。蓮子は全体的に均等に配置されておらず、偏りがみられる。外区内縁には、2 本の圓線の間に 21 個の珠文が配されている。外区外縁は 18 個のやや均齊さを欠く線鋸歯文がめぐらされる。全体的に文様に厚みが顕著である。胎土は白色の微砂粒を含むが、全体的に緻密である。色調は青灰色～淡灰色で、須恵質に焼かれているものが多い。瓦当部の製作順序については、焼成途上に、周縁部が剥離したものが多いため、範に粘土をつめる際、粘土塊を一気に押し込めるのではなく、まず周縁部に粘土を入れ、次に外区・弁区・中房などに別々に粘土をつめていると考えられる。瓦当部と丸瓦部の接合の方法は、範に粘土を入れた後、瓦当裏面の中央に近いところに丸瓦の先端部をやや斜めに押しつけ、接合部内面にか

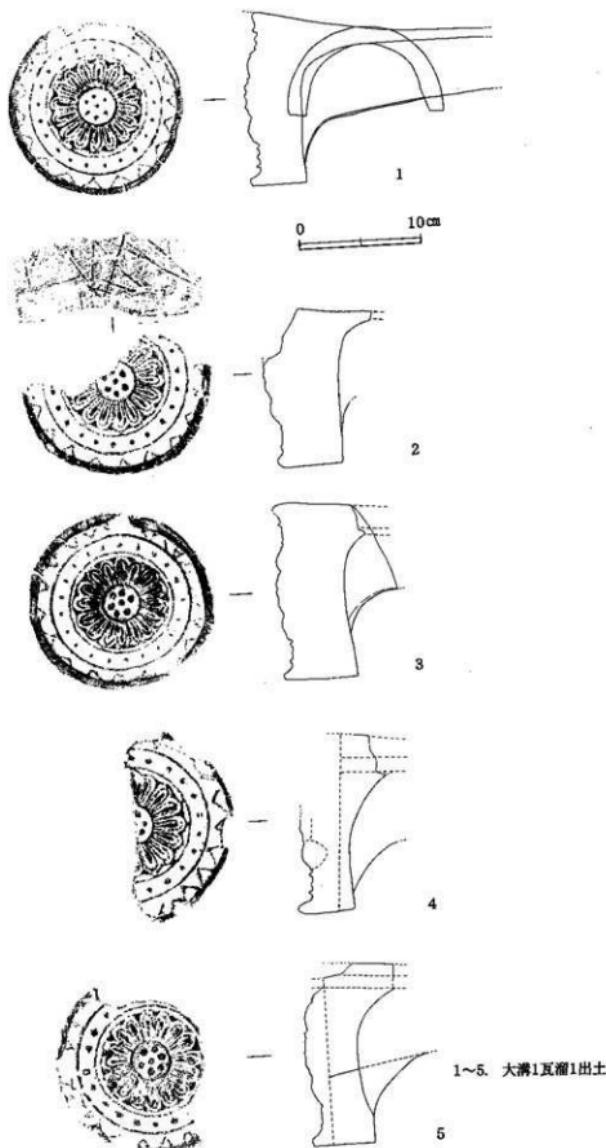
なりの厚さで、粘土を被せ、外面・内面にも粘土を補填・整形し、ナデ調整を行う。瓦当部側面から丸瓦部凸面にかけてはヘラケズリされ、瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけてはヘラによつて粗くナデる。

軒平瓦（均正唐草文軒平瓦）

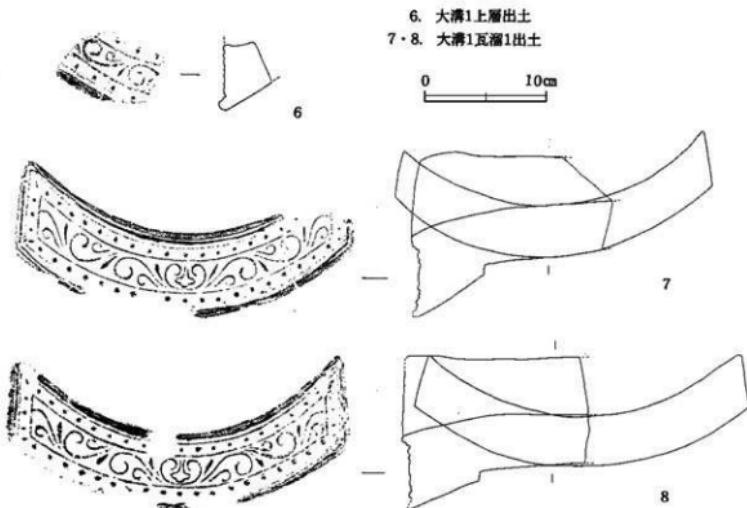
(6) はA区大溝1上層から出土した軒平瓦の破片で、内区左第2単位及び左第3単位の唐草文と外区の一部である。難波宮6664-A型式軒平瓦と同范である。難波宮6664-B型式より内区の幅が狭く、珠文の間隔が広い。焼成はやや不良、色調は淡灰色～褐色で、范には内区から順次外区へ部分ごとに粘土を詰めるものと推定できる。出土数は極めて少なく、これまでの調査では、昭和54年度の第1次調査、2号窯灰原出土のもの、昭和60年度第4次調査3区南端落込み出土のものがあり、今回の出土で3点目を数えるのみである。

軒平瓦（均正唐草文軒平瓦）

(7)～(10) は軒平瓦で難波宮6664-B型式軒平瓦と同范である。40個体程度出土しているが、全容のわかるものは3点のみ



第28図 出土遺物実測図及び拓影 (1)



第29図 出土遺物実測図及び拓影（2）

である。文様は圓線によって内・外区に分かれる。内区は中心左側に、やや開き気味の花頭状の中心飾で、これを大きく包み込むC字形は左にややふくらむが圓線には接しない。唐草は中心飾の左右で3回反転し、主葉の左右に、小さな唐草状の第1支葉とつぼみ状の第2支葉とを配し、最も外側の3番目の主葉は大きく巻き込まれる以前で側方の圓線に取りつく。右第1単位の主葉は曲がり方が不自然で、左側の第1と第3単位の第1支葉は巻き込む部分が折れ曲っている。外区は上部隅に菱形の飾りを配し、下部隅にやや偏平した珠文を配し、他は円形の珠文を廻らす。珠文の数は、上下外区で各々19、左右脇区で各々4である。珠文の特徴は上下外区右から2・3番目の珠文、左脇区の上から2・3番目の珠文が周縁にくっつき、下外区の右から1・6番目の珠文が周縁にくっつき。周縁は、2段のもの、3段のものがあるが、今回の出土瓦では、2段28.2%、3段71.8%で3段のものが圧倒的に多い。

次に平瓦部本体の凸面の調整により、大きく5つのタイプに分けることができる原因是昭和59年度の概報のとおりであり、これを次ページに表で示す。

丸瓦

通有の丸瓦と薄手の丸瓦の2種がある。この他丸瓦を用い、線刻を施すものや丸瓦本体部が短いものもあり、これについては既に報告されている。

玉縁付丸瓦

厚手と薄手のもの2種がある。本体部長は27~29cm程度、玉縁長は4~5cm程度であり、

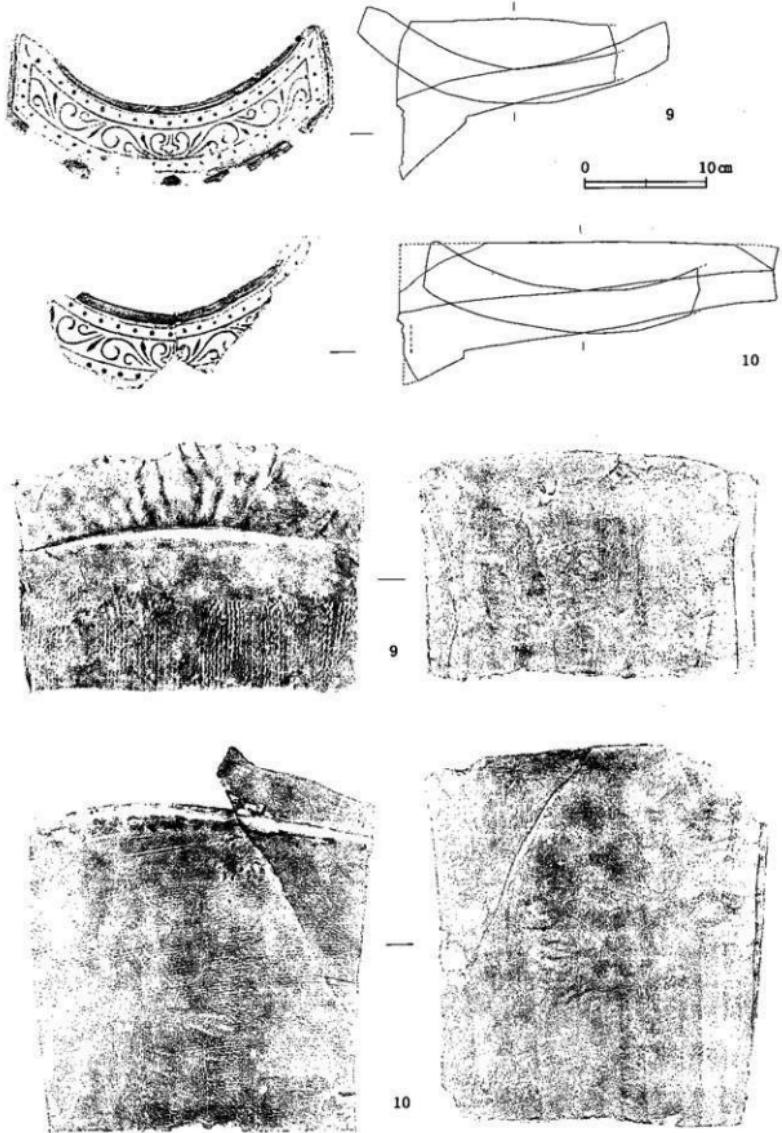
	凸面の特徴	凹面の特徴
A	横位の繩目叩キ、繩目痕が顕著、2次調整少ない	瓦当面側横・斜めヘラケズリ、以下縦ヘラケズリ、一部布目痕残るものあり
B	斜め繩目叩キ	瓦当面側斜めヘラケズリ、以下縦ヘラナデ、一部布目痕残る
C	上部右上がりの繩目叩キ、下部横位繩目叩キ	瓦当面側横ヘラケズリ、以下縦ヘラケズリ
D	全面ナデ、繩叩キ目残らない	瓦当面側横ナデ、以下縦ヘラケズリ、一部布目痕残る
E	縦位の繩目叩キ	瓦当面側横ヘラケズリ、以下ヘラケズリ

本体部の厚さは厚手 11 ~ 15 mm、薄手 6 ~ 9 mm 程度である。凹面は布目がほぼ未調整で残り、布の合わせ目、しづり目も残る。また、粘土紐の痕跡が明瞭に残るものがあり、粘土紐作りと判断できる。模骨の枠板の痕跡は残っていない。凸面は縦位の繩目叩キの後、粗い横方向のナデで繩目を消している。狭瑞部は未調整もしくは極めて軽いナデを施し、側面部は未調整である。分割する際に、内側からヘラ状工具で、上から下まで切り込みを入れ、分割載線と分割の際の破面が残る。胎土は緻密で、白色微砂粒が混じる。色調は淡灰色~青灰色を呈する。焼成は良好、須恵質のものが多い。

平瓦

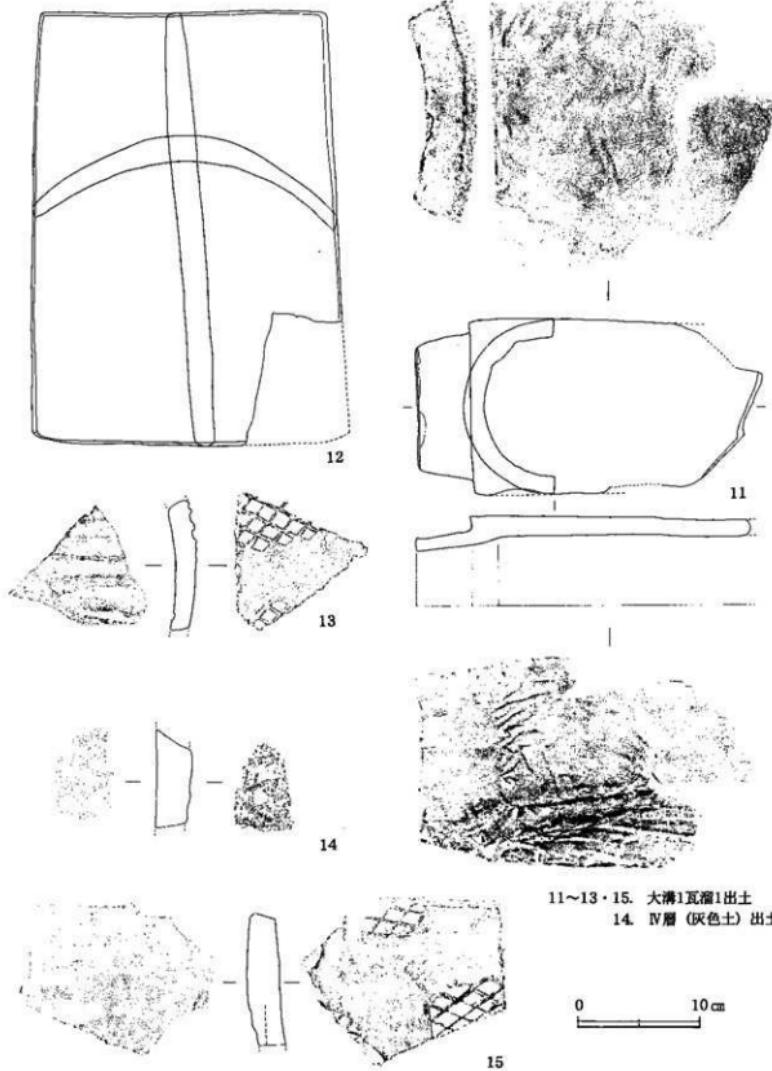
厚手と薄手の 2 種があり、ほとんどが薄手のものである。

薄手の平瓦は広端部幅 26 cm 前後、長さが判別できるものでは 31 cm 前後と 35 cm (12) のものがある。厚さは 2 cm 前後である。凸面は、縦位の繩目叩キが施されているものや繩目叩キの後ケズリを施しているものがある。格子叩キのものも少量ある。凹面は未調整で、布目がそのまま残り、模骨の痕跡の認められるものや布目を縦方向にナデ消しているもの、丁寧にヘラケズリされ、布目がほとんどわからないものもある。模骨の痕跡は、短冊形の板を綴り合せたもので、表面に残っている限りでは 12 枚分確認できた。それぞれの幅は 2.5 cm 前後である。凹面には他に布の綴じ目、糸切り痕が残るものもある。側・端面は丁寧にケズリがなされている。胎土は密で、白色砂粒・黒色斑粒を含んでいる。色調は、淡灰色~青灰色を呈する。焼成は良好で、須恵質のものが多い。なお凸面斜格子叩きのものは 3 種認められ、今回の調査

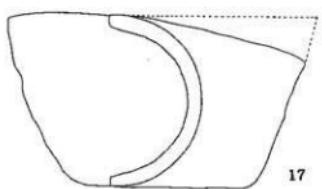


9・10. 大溝1瓦溜1出土

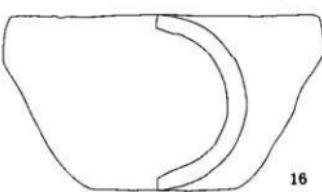
第30図 出土遺物実測図及び拓影(3)



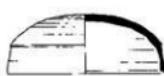
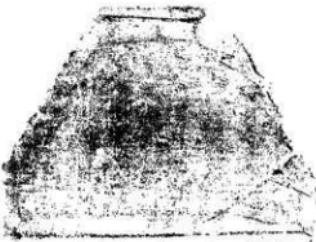
第31図 出土遺物実測図及び拓影 (4)



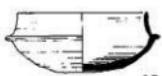
17



16



18



19

16・17. 大溝1瓦窯1出土
18・19. 落込み2(黒色粘土層)

0 10cm

第32図 出土遺物実測図及び拓影(5)

では破片が数点出土した。やや小さい格子単位をもつ格子叩きとやや大型の斜格子のものがある。平瓦の成形については、繩目叩きが全面にわたって施されていないものがあること、布の縫じ目、糸切り痕、棒板痕が残るものがあることから、粘土板を桶状模骨に巻いて成形したもので、その際の粘土板は小粘土板を複数使用したと推定できる（概報1986）。

道具瓦

今回の調査では、面戸瓦が確認できた。

面戸瓦（16・17）

丸瓦本体の一部を利用し、両側辺を切り落とし、面戸瓦にしたものである。上端長25cm前後、下端長12～13cm、中央幅14cm前後、厚さ1.1～1.5cmを測る。凸面は縦位の繩叩きの後横方向のナデを施しているが、繩目は一部残る。凹面は端部から約1.5cmがヘラケズリされている他は布目が良く残る。側縁・端縁は丁寧にナデ調整されている。他に薄手の丸瓦を使用したものも認められる。

須恵器

（18）は杯蓋で復元径12.8cm、器高4.8cmを測る。天井部はやや高く、中央から丸みを持ちながら下がり、下方に伸びる口縁部を有し、口縁端部はやや鋭い。口縁部と天井部の境はやや鈍い稜を巡らす。天井部外面上半部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。陶邑編年I～4段階頃のものと判断される。

（19）は杯身で、口径10.5cm、器高4.9cm、受部径12.6cm、立上がり高2.0cmを測る。底部は平らに近く、深い。受部は外方に伸び、立上がりは内傾して長く伸び、端部はやや鋭い。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。陶邑編年I～4段階頃のものと判断される。

第4章 平成6年度の調査

1. 調査の経過

平成6年度の調査は平成4年6月15日～7月8日に試掘調査を実施した岸部北5丁目32-2他及び平成6年2月14日～3月11日に実施した岸部北5丁目9・15において、奈良時代七尾瓦窯操業期の溝等の遺構・遺物を確認したことから調査範囲を拡大して調査を実施したものである。今回の調査では平成4年度の試掘調査地点をC区、平成5年度の試掘調査地点をA区及びB区とし、計728.91m²（A区304m²、B区290.6m²、C区134.31m²）の調査区を設定した。A区・B区は平成5年度調査地点の北西側で、A区は6号瓦窯の西約65m、B区は北西約42mの地点であり、C区は平成4年度調査区の北側で、1号瓦窯の北約45mの地点である。調査は平成6年5月2日からA区での調査を開始し、まず、重機によって盛土層及び近現代の耕作土層まで掘り下げ、A・B区では現地表下1.0m前後、C区では1.8m前後で確認された中世包含層以下について人力による分層発掘を実施し、A区での調査が完了した後、順次B区、C区へと調査を進めた。調査では中世包含層下層においてA区では現地表下約1.2m、B区では1.5m、C区では2.0mで七尾瓦窯操業期の遺構面を確認し、A区で七尾瓦窯操業期の溝、掘立柱建物1棟を、B区で池状の落込み、溝、掘立柱建物5棟を、C区で溝、土坑等の遺構を確認した。

C区の調査の完了をもって平成6年度の七尾瓦窯跡工房跡の現地における調査を終了したが、7月23日にはB区において現地説明会を開催した。平成9年度には七尾瓦窯跡工房跡の出土遺物等の整理作業を実施し、報告書の刊行作業にかかった。

2. 土層序

A・B区の現況の地表面は標高（T.P.）17.60m前後、C区は標高17.80mを前後する。各調査区とも後世の開発等によって、七尾瓦窯操業期遺構面まで擾乱を受けている部分がかなり認められるが、遺構堆積土を除き基本的に以下の5層に分けられる。

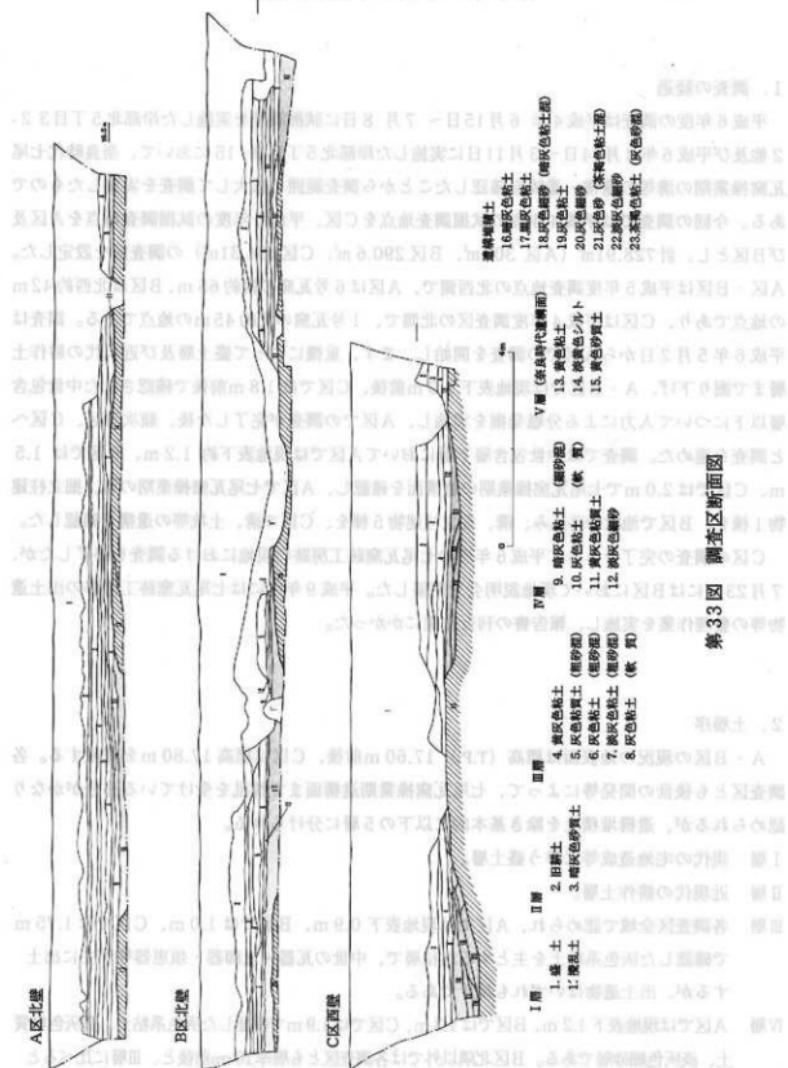
I層 現代の宅地造成等に伴う盛土層。

II層 近現代の耕作土層。

III層 各調査区全域で認められ、A区では現地表下0.9m、B区では1.0m、C区では1.75mで確認した灰色系粘土を主とする堆積層で、中世の瓦器・土師器・須恵器等が主に出土するが、出土遺物はいずれも細片である。

IV層 A区では現地表下1.2m、B区では1.3m、C区では1.9mで確認した灰色系粘土・黄灰色粘質土・淡灰色細砂層である。B区北隅以外では各調査区とも層厚10cm前後と、III層に比べると層厚は薄い。堆積範囲も調査区全域には及んでおらず、部分的に確認される層序で、IV層堆積後に一帯で大規模な開発が行われたことが考えられる。中世の瓦器・土師器・須恵器、奈良時代

査定の実手と御平 章下葉



第33図 査定区断面図

(七尾瓦窯操業期)の瓦等が主に出土するかいずれも細片である。

- V層 A区の現地表下1.2mで確認した黄色粘土及び淡黄色シルト層、B区の現地表下1.5m前後で確認した黄色砂質土層、C区の現地表下2.0mで確認した黄色粘土層である。このV層上面をベースとして溝、池状の落込み、掘立柱建物等の遺構を確認した。遺構及び上面で出土した遺物は少量であるが、奈良時代七尾瓦窯の瓦が主であり、中世等の遺物は認められないことから七尾瓦窯操業期の遺構面と判断した。また、試掘調査時に部分的にV層下層まで確認しており、V層相当の堆積層の層厚は概ね20cm前後である。V層下層では軟質な粘土層の堆積が続き、遺物の出土は確認されなかったことから、調査区ではこのV層を地山層と判断した。

3. 遺構・遺物

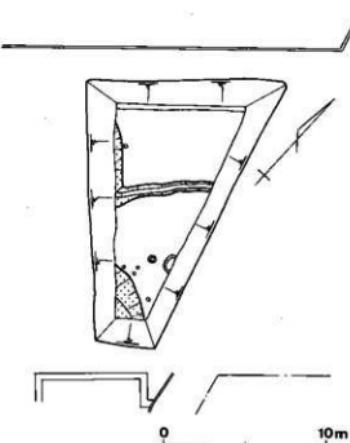
調査で検出した遺構はV層上面で確認しており、遺構面はA区は標高16.25～16.40m、B区は16.05～16.15m、C区は15.90m前後であり、北西側の調査区がやや高くなる。確認した遺構はA区で溝4条(SD01～04)、掘立柱建物1棟(SB01)、土坑3基(SK01～03)を、B区で掘立柱建物5棟(SB02～06)、池状遺構1基(SG01)、溝2条(SD05・06)を、C区で溝2条(SD07・08)、土坑1基(SK04)、ピット5基、足跡である。

(1) A区の遺構

溝(SD01)

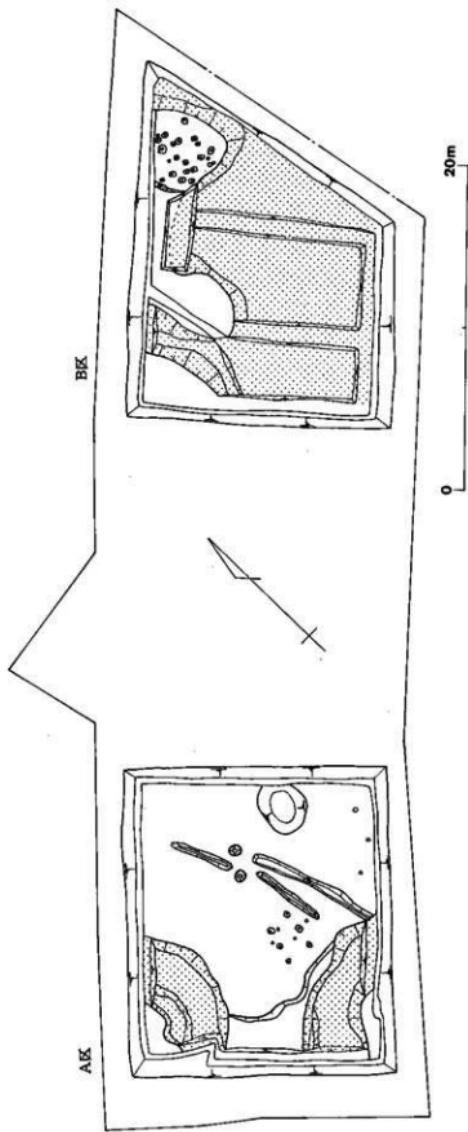
A区西半部で確認され、調査区北西で北西から走行してきた溝が調査区内では直角に近く屈曲して南西の調査区外に伸び、調査区南西で大きく屈曲して、南西から走行してきた溝が調査区内で直角に近く屈曲して南東の調査区外へ伸びる。調査区外南西側の地形や他の試掘調査等の状況から、調査区南西の地点で大きく屈曲してつながる同一の溝と考えられる。上端で幅3.0～4.3m、深さ70～95cmである。溝底面はほぼ平らであるが、検出部分では北西から南東へ非常に緩やかな高低差が認められ、北西端と南東端では約25cmの高差が認められる。

溝内の堆積状況は、大きく3期(上・

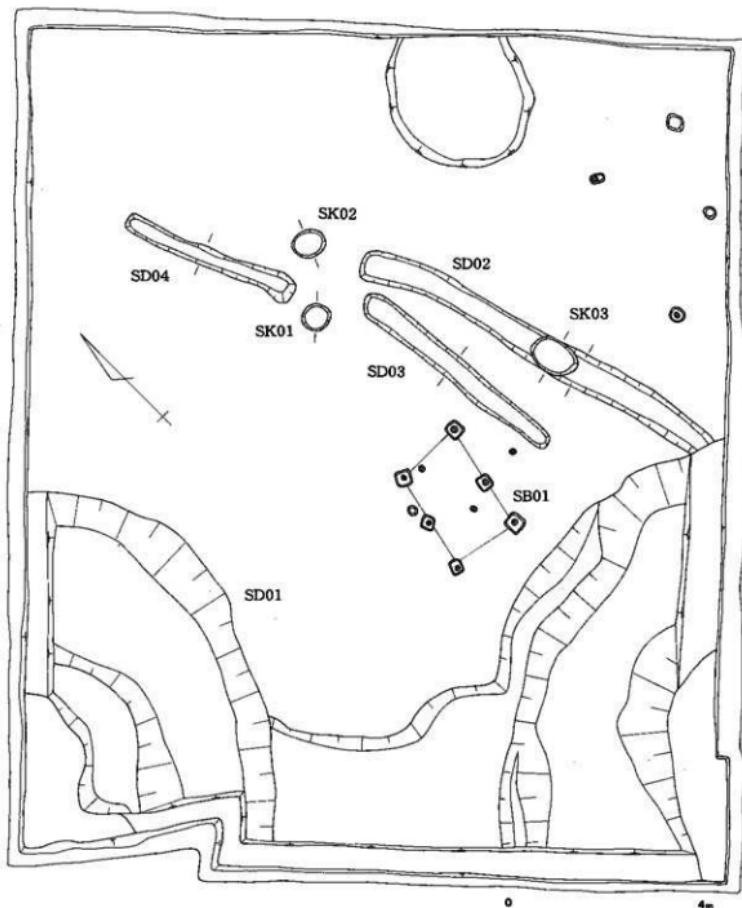


第34図 C区平面図

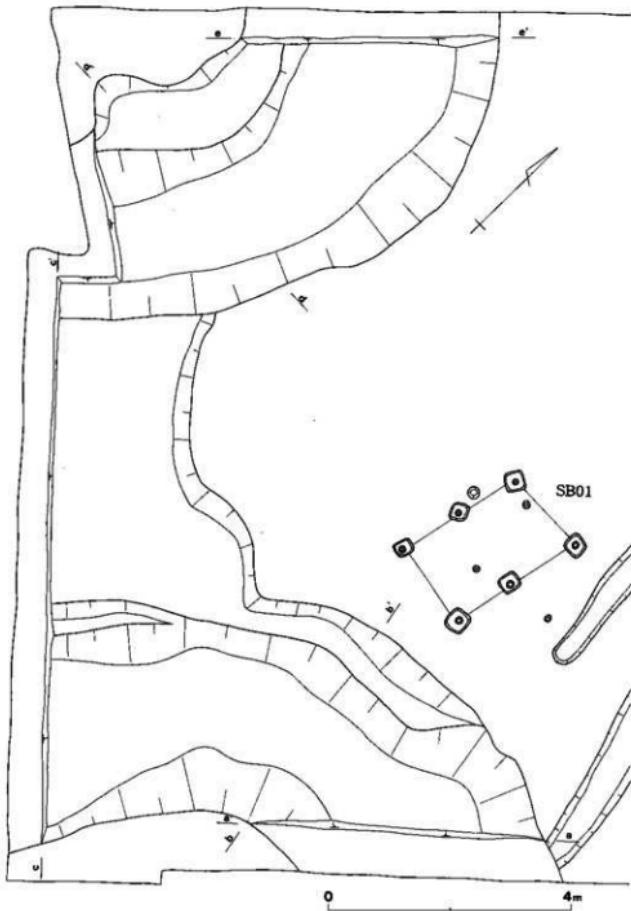
第35図 A・B区平面図



中・下層)に分けられる。上層は軟質な暗灰色粘土の堆積を主とし、中層は黒灰色粘土の堆積を主とし、地山層である黄色粘土のブロックや粗砂が比較的多く混じる。下層は細砂及び粗砂あるいは暗灰色粘土の堆積である。また、溝北西側では上層、中層間に粗砂層の堆積が認められる。溝内からの出土遺物は上層において七尾瓦窯の軒平瓦の平瓦部分及び平瓦の細片が各1点、他に布留式期と考えられる土師器の細片が10点近く出土したのみであり、中層及び下層からは遺物の出土は認められなかった。このSD01について走行状況及び溝内の堆積状況



第36図 A区平面図

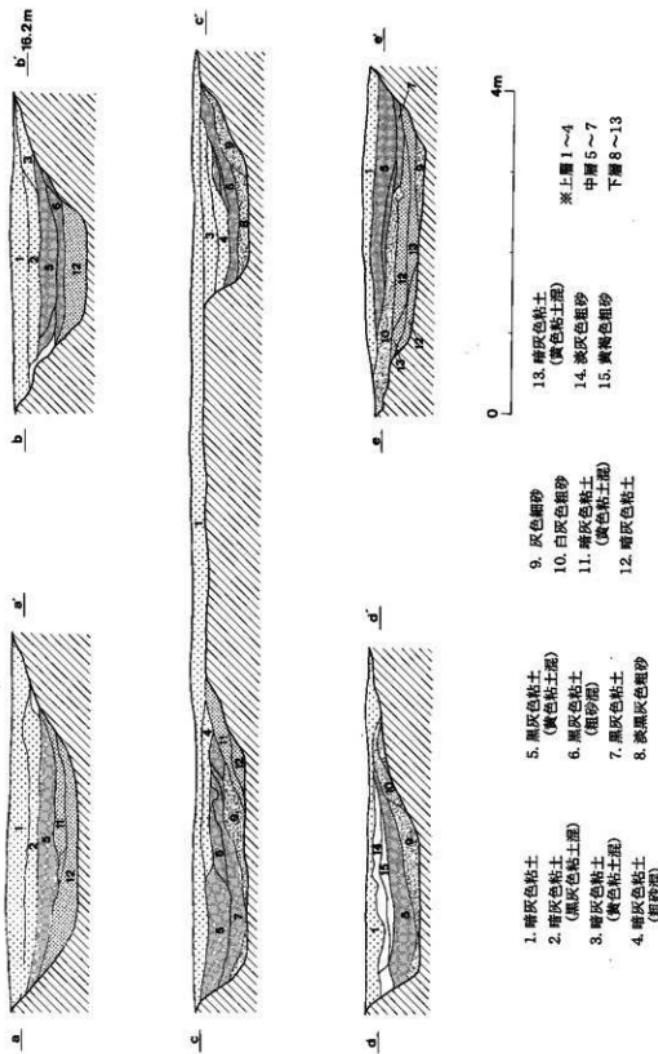


第37図 SD01平面図

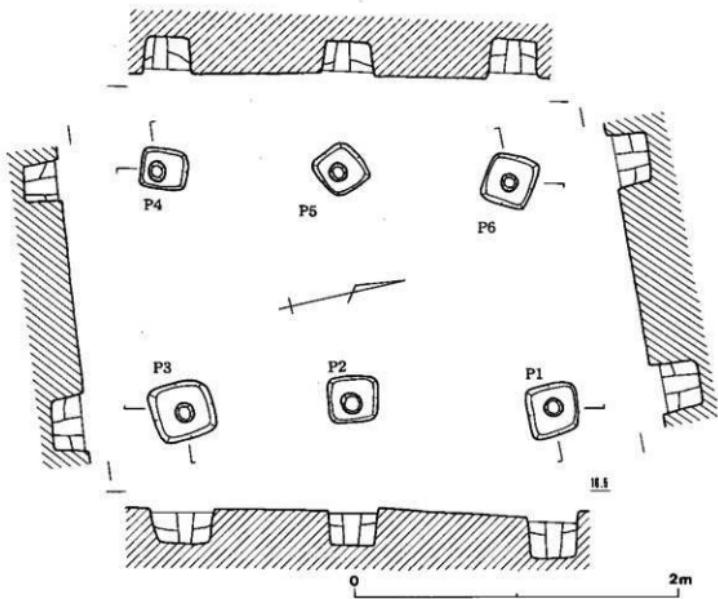
等から瓦窯前面に展開する大溝へつながる可能性が高く、同一の溝と考えられる。

掘立柱建物（SB01）

A区、SD01が南西から南東へ屈曲する部分の北岸に接して確認した。1間（北1.42・南1.51m）×2間（東2.28・西2.18m）で主軸方位をN13°Eにとる。柱掘方は方形で、一辺26～38cm、深さ21～28cmであり、柱痕は径11～13cmである。桁行の柱間寸法は1.03～



第38图 SD01断面



第39図 SB01実測図

1.25 mであり、面積は 3.21 m^2 である。P5の柱痕部分（暗灰色粘質土）から七尾瓦窯平瓦の細片が出土している。

溝（SD02～04）

調査区東半部で小規模な溝3条を確認した。SD02は走行方向をN 13°～22°W前後にとり、北西から南西に緩やかに彎曲してSD01に接続する。延長8.0 mを確認し、幅50～80 cm、深さ7～9 cmで堆積土は淡黒灰色粘質土で遺物は出土していない。SD03はSD02の西側20～90 cmに位置し、走行方向N 9°Wにとり、全長4.8 m、幅50～55 cm、深さ8

cm前後で堆積土は淡黒灰色粘質土

で、遺物は出土していない。SD0

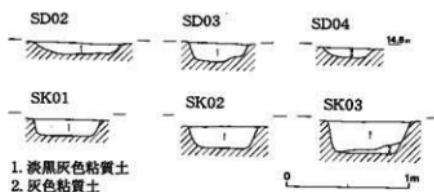
4はSD03の北側に位置し、走行

方向N 23°Wにとり、全長3.7 m、

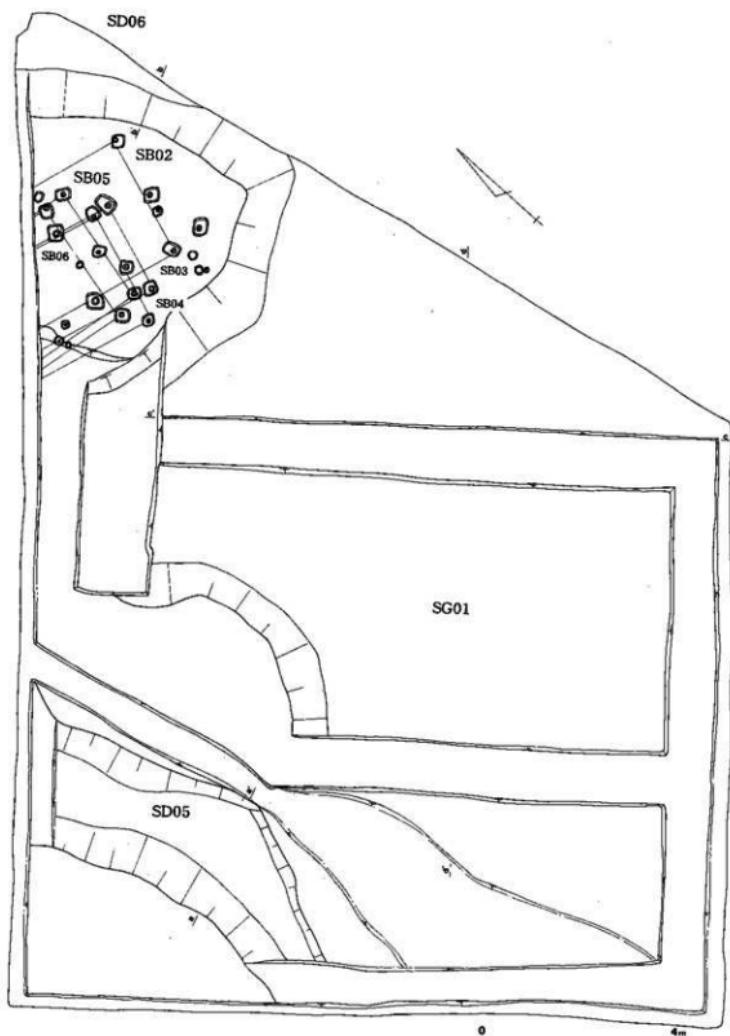
幅35～55 cm、深さ15 cm前後で堆

積土は灰色粘質土で、遺物は出土し

ていない。



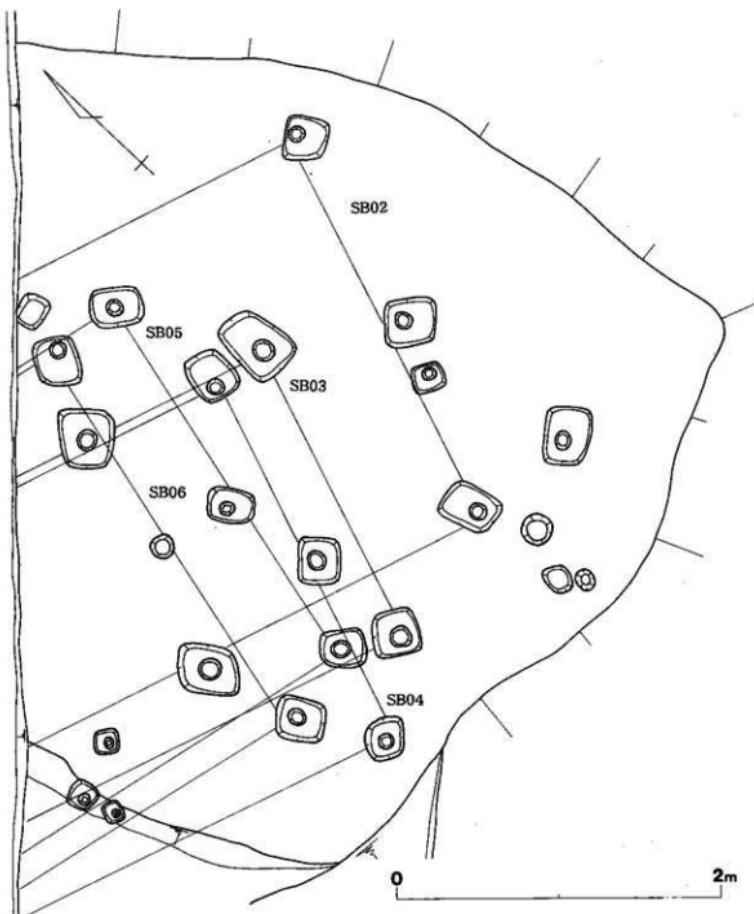
第40図 溝・土坑断面図



第41図 B区平面図

土坑（SK01・02）

土坑はSD02及びSD03とSD04間に位置し、共に平面はほぼ円形でSK01は径55～60cm、深さ14cmであり、SK02は径60～70cm、深さ17cmである。堆積土は共に淡黒灰色粘質土であり、遺物は出土していない。



第42図 SB02～06平面図

(2) B区の遺構

掘立柱建物

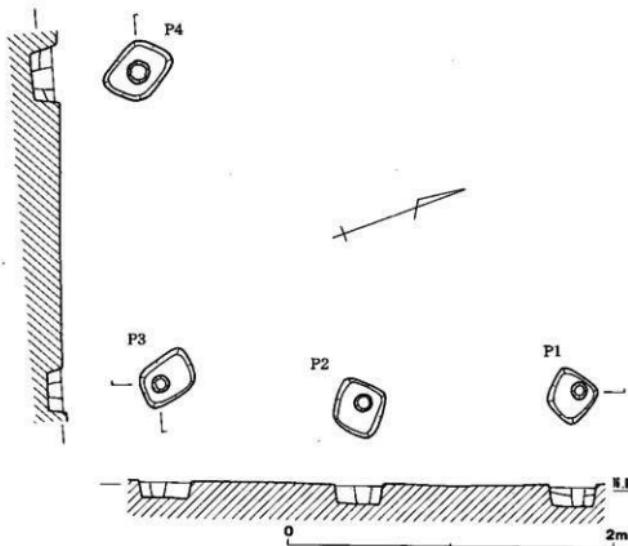
B区北隅の池状遺構SG01に溝SD06が接続する地点のSD06南西側で、柱穴が集中して確認されており、5棟の掘立柱建物（SB02～SB06）が復原された。いずれも西側の調査区外に続き、全体は確認できなかったが、東西方向に主軸方位をとるものと考えられる。主軸方位からはN73°Wにとるもの（SB02～04）と、N77°Wにとるもの（SB05・06）があり、柱穴等の直接の重複関係は認められないが、全ての建物が平面的に重なる。

SB02

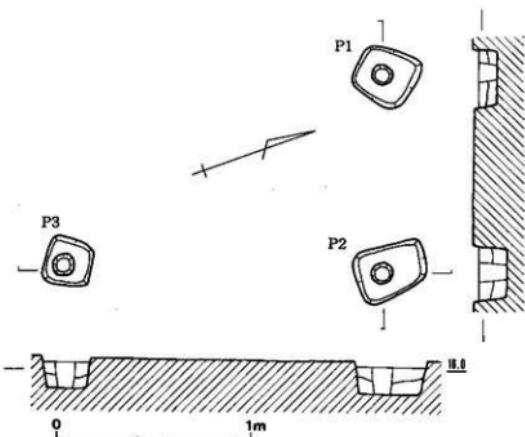
2間（2.58m）×1間以上（1.93m以上）で、主軸方位をN73°Wにとる。柱掘方は方形で一辺26～38cm、深さ11～16cmであり、柱痕は径10～14cmである。柱間寸法は梁行で1.25・1.33mである。遺物は出土していない。

SB03

1間（1.96m）×1間以上（1.22m以上）で、主軸方位はSB02と同様である。柱掘方は方形で一辺30～45cm、深さ14～20cmであり、柱痕は径12～14cmである。遺物は出土していない。



第43図 SB02実測図



第44図 SB 03 実測図

SB 04

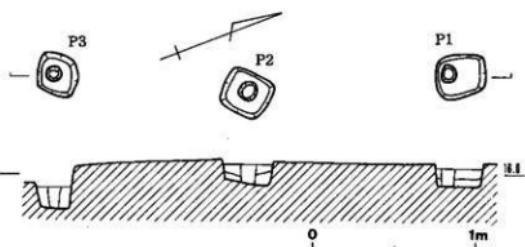
2間 (2.43 m) × 1間
以上で主軸方位は SB 0 2
と同様である。柱掘方は方
形で一辺 26 ~ 30 cm、柱
痕は径 10 ~ 12 cmである。
柱掘方の深さは南側の P 3
は 27 cmで、他は 14 cmで
ある。柱間寸法は梁行で
1.20・1.23 mである。遺
物は出土していない。

SB 05

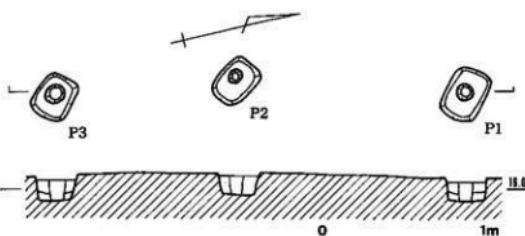
2間 (2.53 m) × 1間
以上で主軸方位を N 77° W
にとる。柱間寸法は梁行で
1.12・1.41 mである。柱
掘方は方形で一辺 23 ~ 34
cm、深さ 14 ~ 16 cmである。
柱痕は径 9 ~ 12 cmである。
遺物は出土していない。

SB 06

2間 (2.71 m) × 1間
以上で主軸方位は SB 0 5
と同様である。確認された
柱掘方は方形で一辺 28 ~
32 cm、深さ 14 ~ 16 cmで
あり、柱痕は径 10 ~ 15
cmである。P 2 は径 15
cm、深さ 14 cmである。
柱間寸法は梁行で 1.32 ·
1.39 mである。P 1 掘方
から土師器の細片が出土し
ている。



第45図 SB 04 実測図



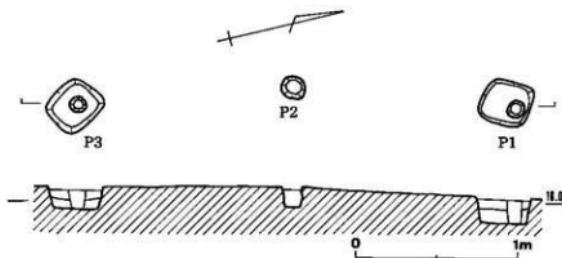
第46図 SB 05 実測図

池状遺構 (SG01)

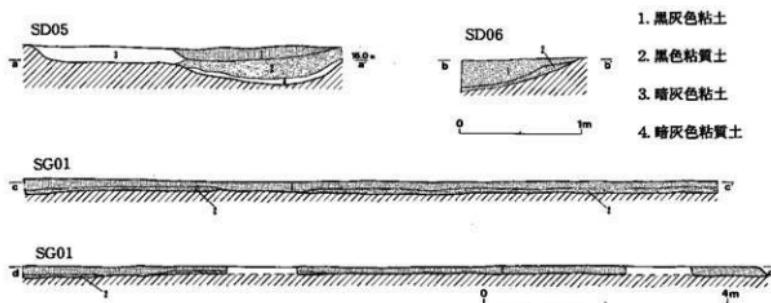
南西端は近時の埋設管の設置によって掘り込まれているが、B区の南側2/3近くを占め、調査区外にも広がり、17m以上×12m以上、深さ20cm前後である。底面はほぼ平らで、堆積土は軟質な黒灰色粘土が主で、下層に部分的に黒色粘質土が認められる。堆積土中からは七尾瓦窯平瓦4点、古墳時代須恵器2点の微細片が出土しているのみである。

溝 (SD05・06)

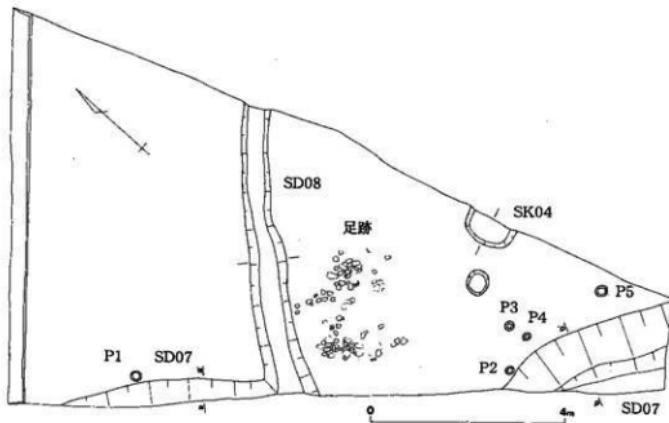
SG01の北西側に溝2条が接続している。調査区南東端近くのSD05は幅2.3～2.6m、深さ30cm前後、北東端近くのSD06は北東側肩は調査区外で、幅2.1m以上、深さ25cm前後で、調査範囲内では共にほぼ南北方向に走行する。溝の底面はSG01とほぼ同じレベルであり、調査区内では高低差はほとんど認められない。溝内の堆積土については、SD06はSG01と同様であり、SD05は下層の黒色粘質土の堆積がやや厚く、黒色粘質土堆積後に南西側に暗灰色粘土が、北東側に黒灰色粘土が堆積している。SD05は遺物は出土しておらず、SD06は黒灰色粘土層から平瓦の細片が2点出土している。



第47図 SB06 実測図



第48図 SD05・06・SG01断面図



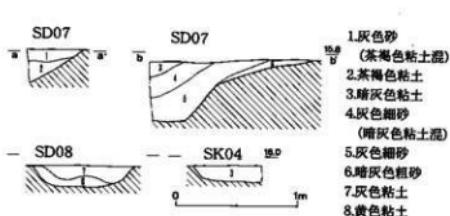
第49図 C区平面図

(3) C区の調査

溝 (SD07・08)

C区の北西半部及び南東端近くで南東から北西にのびる落込みの肩を確認した。落込み内の堆積状況から、北西から南東に走行方位をとる同一の溝の可能性が高いと考えられる (SD07)。検出部分では延長 12.8 m、幅 1.6 m以上、深さは検出部分で 50 cmである。溝内の堆積土は南東端検出部分では 3 層に分けられ、上層は暗灰色粘土層、中層及び下層は灰色細砂層である。溝内堆積土からは遺物は出土していない。また、溝の肩に沿って径 15 ~ 25 cm のピットを北西半部で 1 基 (P1)、南東端部で 4 基 (P2 ~ 5) 確認しており、杭等の護岸施設の可能性が考えられる。

SD07 の北西半部にはほぼ直交して流れ込む、幅 50 ~ 80 cm、深さ 20 ~ 40 cm の小規模な溝 (SD08) を延長 6 m にわたって確認した。SD08 の堆積土は 2 層に分けられ、上層は灰色粘土層、下層は軟質な黄色粘土層である。遺物は出土していない。



土坑 (SK04)

SD07 の北側 2.0 m の地点で南北 95 cm、東西 55 cm 以上の土坑 1 基を確認した。堆積土は暗灰色粘土層 1 層であり、遺物は出土していない。

第50図 C区溝・土坑断面図

足跡

調査区南西端、SD08南東の2.2m×2.4mの範囲に84以上の足跡と考えられる痕跡を検出した。V層上面に刻み込まれ、灰色砂が堆積しており、深さは5cm未溝の浅いものが多い。平面形態も不整形のものが多いが、人の足跡と考えられるものと、蹄状のものが認められる。人の足跡と考えられるものは長さ20cm前後であり、蹄状のものは8cm前後である。足跡は錯綜しており、遺存状況も悪いことから、歩行方向等の規則性は明らかでない。

(4) 遺物

今回の調査での出土遺物は奈良時代（七尾瓦窯操業期）の瓦、中世土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁等が主であり、他に微量であるが、弥生土器・古墳時代土師器・須恵器、平安時代黒色土器A類等が認められる。遺物収納コンテナにしてA・B区で各2箱、C区で1箱の計5箱分と少量であり、細片で器表面も摩滅したものが多い。以下、図示できたものについて報告する。

a. 瓦

いずれも細片で全体のわかるものはなかったが、従来の調査で確認したものと同様のものである。

平瓦（1～3）

1はB区IV層出土。軒平瓦の平瓦部分である。厚さ2.0cmであり、凸面は横位の繩目叩き、凹面は縱方向にヘラ削りを施すが、部分的に布目圧痕が残り、側縁は面取りされる。

2はB区IV層出土。厚さ1.6cmであり、凸面は縦位の繩目叩き、凹面は未調整で布目圧痕が残る。3はB区SD06黒灰色粘土層出土。凸面は縦位の繩目叩きの後部分的に縱方向にナデ消している。凹面は丁寧にナデ消している。2、3の凹面には幅2cm前後の模骨痕が認められる。

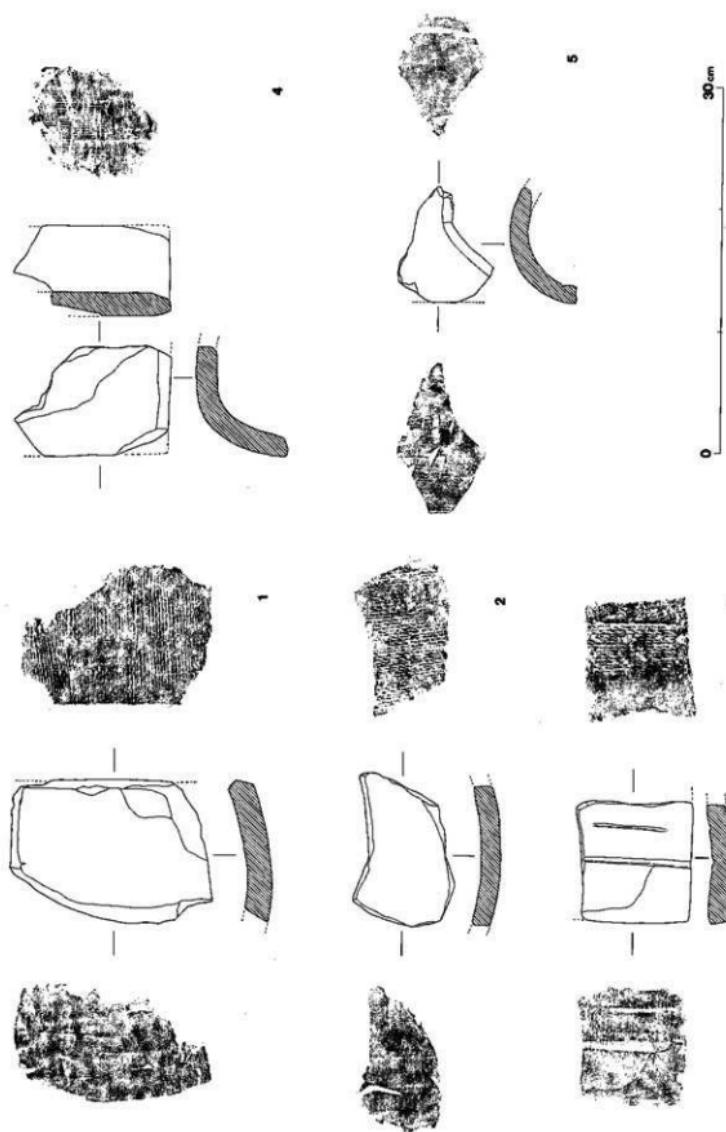
1～3はいずれも焼成は軟質で色調は淡黒灰色をなし、胎土は精良で石英、長石、黑色砂粒を多く含む。

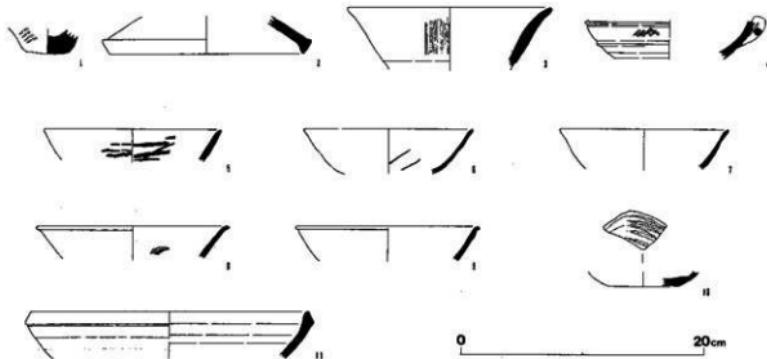
丸瓦（4・5）

共にA区IV層出土。4は厚さ1.8cm前後で、凸面は摩滅のため調整は不明であり、凹面は未調整で布目圧痕が残る。焼成は軟質で淡黒灰色から灰色をなす。

5は厚さ1.5cm前後で凸面は縦位の繩目叩き後、弱くナデている。凹面は未調整で布目圧痕が残るが、4に比べて布目は細かい。分割する際に、内側からヘラ状工具で、凸面まで達しない程度に切り込みを入れており、凸面側は破面であるが、凹面側は分割截線となっている。焼成は須恵質で硬質であり、色調は灰色なす。胎土はともに平瓦と同様である。

第51圖 出土瓦





第52図 出土土器

b. 土器

土器についてもいずれも細片で全体のわかるものはなく、口径等はいずれも復原値である。1は弥生時代畿内第V様式の壺底部、2は中期の高杯の脚部と考えられ、1はA区、2はB区Ⅲ層の出土である。共に遺存状況が悪く、調整等の詳細は明らかではないが、1は色調は淡灰褐色で胎土は2~3mm大の石英、長石、角閃石を含む。2は色調は橙色で、胎土は1mm大の石英、長石、雲母を多く含んでいる。

3は土師器壺の口縁部で、A区SD01上層出土である。口径16.4cmで、緩やかに外反しながら伸び、外面は縱方向のハケ目が認められるが、摩滅のため調整の詳細は明らかでない。色調は浅橙色をなし、胎土は1~2mm大の石英、長石を多く含む。4は須恵器無蓋高杯部であり、B区SG01、黒灰色粘土層出土である。外面に2条の凸帯を有し、その間に波状紋を施す。左右対称な部分に2個把手を有するものと考えられる。陶邑編年案におけるI型式3ないし4段階の資料と考えられる（大阪府教育委員会「陶邑Ⅲ」1978）。

5~7は瓦器碗で、5・6はB区、7はA区Ⅲ層の出土である。5は一部突出部にのみ僅かなヘラミガキが認められる。いずれも和泉型でⅢ型式2~3期の資料と考えられる（尾上実「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』1983）。

8・9は白磁碗で8はA区Ⅲ層、9は同Ⅳ層出土である。8は口径15.6cmで、口縁端部を外反させ端部を水平に近くしており、内面には櫛で花紋を描く。9は口径14.8cmで、口縁端部を外反させ、端部を丸くしている。太宰府における分類を参考にすると8はV-4・b類、9はV類ないしは皿類に相当するものと考えられる（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』4 1978）。

10は青磁皿で、B区Ⅲ層出土である。底径5.6cmで、底部の釉がカキ取られている。内面は櫛によるジグザグ紋様を有する。同安窯系青磁皿I-2類に相当するものと考えられる。

11は東播系須恵器鉢で、A区Ⅲ層出土である。口径22.8cmで口縁端部の拡張は明瞭ではなく、ただ肥厚させた状況である。

今回の調査の出土遺物については大半が包含層からの出土で、量的にも少量で、細片のものが多いが、その概要をみるとA・B区での破片数の割合では中世の土器類が最も多く、全体の76%を占め、次いで奈良時代七尾瓦窯瓦が13.5%となる。七尾瓦窯操業期の瓦等の遺物が少ないとことについては、中世における削平等も考慮する必要があるが、瓦窯前面の工房部分では瓦溜まり等部分的に多量の瓦が出土するのに対し、他の部分での遺物の出土量は非常に少なく、量的には中世遺物包含層からやまとまって瓦が出土するという状況である。また、瓦以外の土器類はほとんど認められないのが特徴であり、今回の調査結果もほぼ同様のあり方を示しているといえる。

図示した以外の七尾瓦窯操業以前の遺物については、弥生土器、土師器、陶邑編年によるII型式4段階を主とする須恵器が認められるがいずれもごく微量である。

七尾瓦窯操業以後の遺物については、平安時代では10世紀後半から11世紀前半と考えられる黒色土器A類碗の細片が数点認められるのみである。最も多くを占める中世の土器については、他の七尾瓦窯前面の調査区においてもほぼ全域でまとまった量の出土が認められるとともに、西方の吉志郡瓦窯跡工房跡の調査においてもまとまって出土している。中世の土器について時期的な幅があるが破片数の割合をみると、A・B区で土師器Ⅲ 37.3%、瓦器 57.4%と供膳具で9割以上を占める。瓦器碗はいずれも和泉型でⅢ型式2期～Ⅳ型式1期の資料である。他には14世紀前半から中葉にかけてと考えられる東播系須恵器鉢が3.1%、備前焼播鉢・壺(IVB期)等の陶器が1.4%、中国陶磁器は他に細片で図示できなかったが、青磁碗(龍泉窯系I～5類、同安窯系Ⅲ類)2点を含めて0.8%となる。時期的には瓦器碗、土師器Ⅲにみられるように13世紀代を中心とし、備前焼等15世紀後半までの資料が少量ではあるが認められる。

第5章　まとめ

1. 平成4・5年度の発掘調査

ここでは、平成4・5年度の調査で検出した遺構・遺物等について改めて振りかえってみたい。まず、遺構については4面を数える遺構面があり、それぞれに遺構を検出した。

第1次遺構面は、遺構の認められた最上面で、杭跡、溝、落込み、ピット等の遺構を検出した。遺構の展開状況は散在的で、相互の関連性については不明である。時期については層位的に瓦窯操業期以後で、この層の上に中世の遺物包含層があることから、中世までの時期に比定できる。これまでの調査で中世土器の出土から当該期の集落が存在する可能性が指摘されているが、今回検出の遺構は集落関連の遺構とは言えず、むしろ水田・畑などの耕作に関連したものである可能性がある。

第2次遺構面は、七尾瓦窯操業期の奈良時代遺構面で、主な遺構はこの面で検出した。今回の調査においても、A・B・C区で大溝、溝、土坑、ピット群などの遺構を検出し、瓦窯工房の一部と思われる。詳細については後述する。

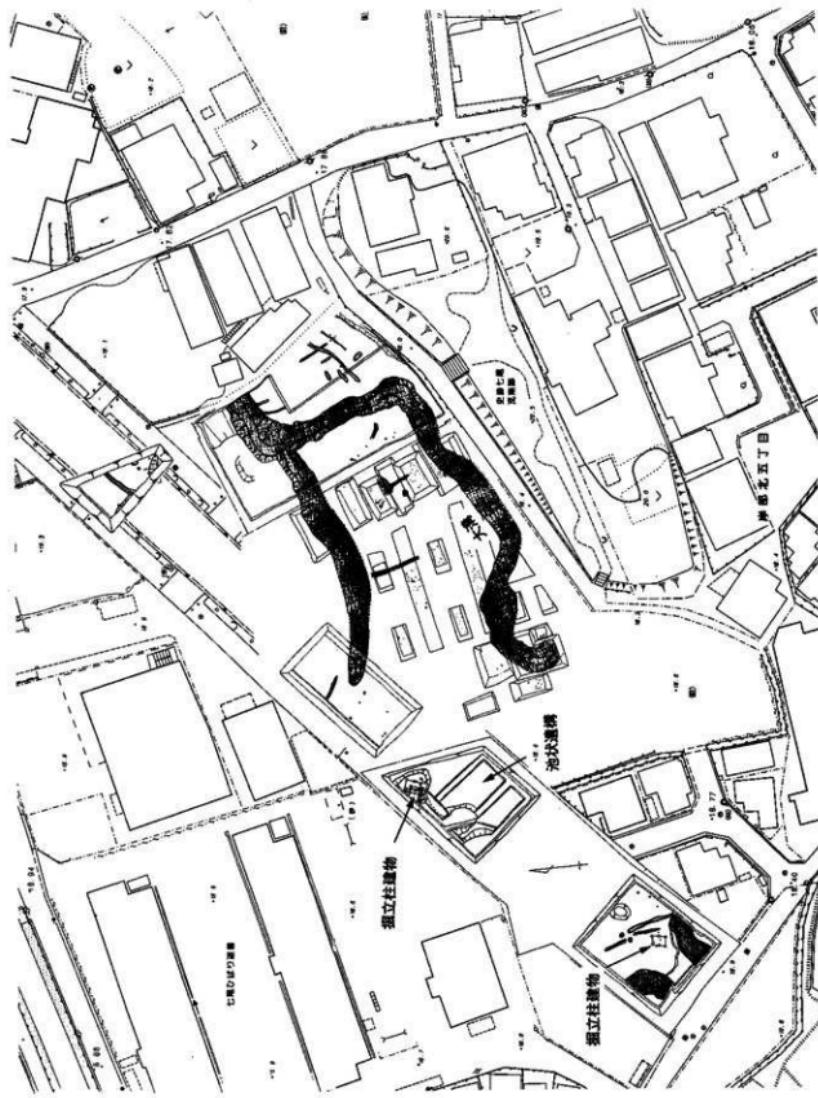
第3次遺構面は、A区の第2次遺構面下で認められた遺構面で、落込みを2基検出した。落込み3からは5世紀代の須恵器杯が出土しているが、その性格は明確にできなかった。

第4次遺構面は、古墳時代以前の遺構面とみられ、今回はC区でピット群と土坑、浅い落込みを検出した。これらは人為的なもののか断定できず、時期についても遺物が出土せず、判然としない。また、以前の調査で縄文晩期の船橋式土器が出土した落込みのベース面は、地区的相違はあるが、この面に対応すると思われる。

このように、まず、縄文時代晩期に、次に古墳時代に人為的な痕跡があり、大溝も一部構築された可能性がある。奈良時代になり、瓦生産開始に伴い、周辺は大幅に開発される。しかし、瓦生産終了後、中世には水田・畠地になったという変遷が想定できる。第2次遺構面は七尾瓦窯操業期の遺構面に該当することは先述したとおりである。以下、今回検出した遺構をめぐって述べることとする。

大溝と周囲の遺構群

大溝1は、これまでの調査で既に検出され、その展開状況についてもある程度は想定されていた。今回さらに西方へ伸びる延長部を検出し、その展開は直線状に北西へ伸びるのではなく、反転し、再度瓦窯の展開する低丘陵に向かうというもので、より複雑な状況を呈することが判明した。大溝の性格についてはすでに論述されており（概報1985・1986）、古墳時代に築造された可能性はあるものの、大幅には瓦窯開窯に伴い構築されたと考えられること、当地の排水という機能と瓦の製作・窯の築造・補修に要する水を供給する機能を有するものと考えられる。今回の調査所見としては大幅には修正するところはないが、ただ、溝の堆積状況は、瓦窯操業期と思われるII・III期に精良な粘土の堆積が顕著であり、砂の堆積が少ないとから、この時



第53図 七尾瓦焼業期造構全體図

期は流水が少なく、むしろ滯水状態の方が顕著だったと思われる。こうした状況は、給水の面の方が比重が高かったのではないかとも思われる。大溝2については、大溝1の堆積状況に似た部分があり、さらに西方に伸び、C区で途切れることが新たに判明した。

大溝の周囲の状況は、今回の調査によりある程度の状況を確認することができた。大溝2が途切れる部分の周辺は小溝と数基のピットが認められたのみで当該期の遺構は稀薄であり、建物跡と断定できるものは検出できなかった。次に大溝1・2が展開する中に区分された部分が認められ、これは南北19~23m、東西50m以上を測るほど平坦な面となっている。この面は当該期の遺物の出土は少なく、こまめな清掃がなされ、維持されてきた面と考えられる。しかし、ここは既存の建物基礎のため大半の遺構面が遺存しておらず、全体を把握できたとは言えないものの、ピット群を検出したのは成果であった。ピット群は、A・B・C区で合計10か所に及ぶことが確認できた。小規模の浅いピットで構成されたもので、形状や遺構内堆積土に同様のものが多く、概ね狭い範囲に集中し、建物の復元は困難である。このあり方は、簡易な小屋程度のものしか想定できず、土器類の出土量の少なさから言っても住居域とも考えられず、瓦窯工房の一部と考えたほうが良いように思われる。瓦製作工程の中で小ピットが集中して残る可能性が考えられるものは、製作した瓦を乾燥させたり、窯詰め前、焼成後に仮置きするような仮小屋が想定できるが、こうした簡易な建物が考えられないであろうか。

瓦溜での瓦出土状況

大溝1及び大溝2で合計2か所の瓦溜を検出した。これらの瓦溜は昭和59・60年度で既に確認されており、主なもの一部については遺物の取り上げも行っているが、全体として把握できたのは今回の調査が初めてである。基本的にはこれらの瓦溜は瓦窯から廃棄された不良品、失敗品等で構成され、出土状況に規則性が認められないとされている（概報1985）。今回、構成する瓦の種類・出土位置の様相について再検討してみた。瓦溜1・2ともに平瓦が約8割を占め、次に丸瓦が多いこと、瓦溜2では軒瓦は全て軒平瓦で、出土数も多いこと、瓦溜1では軒瓦については約9割が軒平瓦であることが判明した。また、出土位置に傾向が見られるかどうかについては、瓦溜1では東の方へいくほど丸瓦の比率が高くなることが認められた。瓦溜1・2ともに平瓦を約8割で主体としていることは共通点があるが、その他の構成瓦に少し違う様相がうかがえる。瓦溜1は軒丸瓦が約1割含まれるが、瓦溜2では軒丸瓦は含まれないなど相違点がある。瓦溜2は瓦窯から約30m隔たっており、何らかの選別を経ているのではないかと指摘されているように（概報1985）、一定の選別の反映と考えることができよう。

出土瓦類について

今回出土の瓦類は概ね從来出土のものと同様のものである。瓦の製作技法については、軒平瓦は既に論述されたとおり（概報1985）、粘土板一枚作りと考えられる。一方、平瓦は、分割裁線・裁面は確認できていないが、糸切り痕と模骨痕をとどめることから、粘土板捲作りの可能性が高い。凸面側に残るタタキ痕からタタキ板は細長い短冊形と考えられる。丸瓦は側縁凹面側に分割裁線と凸面側に破面を有すること、粘土紐の巻き上げ痕が見られることから、粘

土紐による型作りと考えられる。

軒瓦については、新たな型式は確認されず、軒丸瓦は全て難波宮6303型式で、軒平瓦は難波宮6664-A及び6664-B型式の2種である。難波宮瓦と同范であり、七尾瓦窯は、後期難波宮のための官瓦窯と指摘されている（藤原1980、八木1981）とおりであろう。後期難波宮の軒瓦は近年の調査成果では軒丸瓦重圈文18種類と蓮華文2種類、軒平瓦重圈文18種類と唐草文4種類が確認されている（宮本ほか1996）。軒瓦については重圈文系軒瓦が蓮華・唐草文系軒瓦に比べ、圧倒的に種類・数量が多く、重圈文系軒瓦の割合は軒瓦全体の約90%を占める（中尾1978）。七尾瓦窯産の蓮華・唐草文系軒瓦の用途については、中尾芳治氏は難波宮6303型式軒丸瓦、難波宮6664-A及び6664-B型式軒平瓦等の蓮華・唐草文系軒瓦は内裏正殿、内裏前殿など内裏中心部に出土が集中する傾向があり、重圈文系軒瓦は内裏・朝堂院などにまんべんなく出土することを指摘されている（中尾1972・1986）。八木久栄氏はさらに詳細に出土位置の検討を行われた結果、蓮華・唐草文系軒瓦は内裏周辺でも大安殿、大安殿前殿、内裏東外郭築地、内裏西外郭築地外側建物で出土しており、難波宮朝堂院と内裏では瓦の使い分けがされていること、朝堂院の屋瓦は重圈文系の文様で統一されていたことを述べられている。また、MP-1地区で検出された建物S B 10021のように蓮華・唐草文系だけを用いた建物があり、官衙地区からも点々と出土することから単に補足的というよりは何らかの意図があると指摘されている（八木1981）。

このように、蓮華・唐草文系の瓦の出土位置は限られた場所、内裏及び内裏周辺にみられるが、内裏西方のMP-1地区での出土のように、より複雑な様相を呈するようである。

また、出土瓦のほとんどを占める重圈文系軒瓦は神龜三年十月に始まる聖武朝難波宮の造営を契機に新たに案出されたデザインと考えられており（中尾1972）、その生産地については今だ未発見であるが、森の宮遺跡で焼け歪んだと思われる瓦片の出土があり、玉造2丁目で窯壁の融着した重圈文系軒瓦が出土しており、上町台地の東斜面に存在するのではないかとされている（中尾1986）。

さて、難波宮蓮華・唐草文系軒瓦の供給先については難波宮以外では、長岡京、平安京等の京城の他、新免寺、四天王寺、野中寺等の寺院が知られている。新免寺出土軒平瓦は七尾瓦窯産軒平瓦と同范であるが、頸の形状、胎土、焼成が異なり、七尾瓦窯産ではない（概報1986）ものの、このタイプの范を依然として選択・使用している。一方、長岡京、平安京には難波宮からの移転に伴い搬入されたものとされ（福山ほか1968）、長岡京出土瓦については、藤田さかえ氏は出土地区ごとに難波宮式、平城宮式、長岡宮式軒瓦の出土割合について検討されている。朝堂院地区では難波宮式が大半を占め、残りは平城宮式であり、朝堂院西方官衙地区では難波宮式、平城宮式が約半分ずつを占め、内裏では大半が平城宮式、内裏南方官衙地区は軒丸瓦は長岡宮式が半分を占め、軒平瓦は平城宮式が半分を占める等指摘されている（藤田1985）。また、蓮華・唐草文系軒瓦については、山中章氏は出土位置から各施設ごとに区別することなく混用し、文様の組み合わせに関わりが少なく、単なる瓦資材として再利用されたと

いう（山中1987）。長岡京の時期には既に難波宮蓮華・唐草文系の軒瓦という特別な意識はなくなつたようである。

以上のように、七尾瓦窯跡出土瓦とその供給先である後期難波宮をめぐって、様々な問題が挙げられるが、今後、七尾瓦窯跡については引き続き調査を継続し、様々な面から検討を行う必要があるだろう。

<引用文献>

- 福山ほか1968 福山敏男・中山修一・高橋徹・波貝毅「長岡京発掘」NHKブックス74 1968年
中尾1972 中尾芳治「重圓文軒瓦の製作年代と系譜についての観察」『難波宮跡研究調査年報 1971』 1972年
八木1972 八木久栄「難波宮の瓦について」『難波宮跡研究調査年報1971』 1972年
中尾1978 中尾芳治ほか「難波宮跡発掘調査概報」 高速大阪東大阪線難波宮跡調査会 1978年
藤原1980 藤原 学「御園難波宮の瓦を焼成した大阪府吹田市七尾瓦窯の発掘調査」『日本考古学会第40回総会研究発表要旨』 1980年
八木1981 八木久栄「後期難波宮出土の瓦について」『難波宮跡の研究』第7報告編 1981年
藤田1985 藤田さかえ「長岡京出土軒瓦の型式と分布」「京都考古」第38・39号 1985年
概報1985 吹田市教育委員会編『昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1985年
概報1986 吹田市教育委員会編『昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 1986年
中尾1986 中尾芳治「難波宮の瓦」「古代の瓦を考える－年代・生産・流通－」帝塚山考古学研究所 1986年
山中1987 山中 章「長岡京の造営と瓦」「長岡京古瓦聚成」 1987年
宮本ほか1996 宮本佐知子・佐藤隆「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅰ」 1996年



現地説明会風景 1992.9.12

2. 平成6年度の発掘調査

(1) 発掘調査成果の検討

平成6年度の発掘調査では七尾瓦窯操業期の遺構として、溝、掘立柱建物、池状遺構等を確認するとともに、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺物を確認した。

七尾瓦窯操業以前の状況については、各調査区とも事前の試掘調査によって七尾瓦窯操業期遺構面を地山層と判断したために、その下層についての調査は行っていない。試掘調査時の所見では、下層は軟質な粘土層が複雑な状況で堆積しており、遺構・遺物包含層は確認されなかった。これは当該地が洪積丘陵からの出水と土砂の流入等による堆積作用が繰り返された結果と考えられる。中世遺物包含層から弥生土器、古墳時代布留式期と考えられる土師器及び須恵器が出土しており、須恵器については陶邑編年のI型式3ないし4段階及びII型式4段階の2時期のものが認められる。しかし、いずれも細片で遺存状況も悪く、調査地点における七尾瓦窯操業期以前の状況についての実態は明らかでない。

七尾瓦窯操業期以降については、やはり明確な遺構は確認されておらず、出土した中世の土器についても細片で遺存状況も悪いが、まとまった量が確認されている。七尾瓦窯跡周辺においては七尾瓦窯跡北方200mに瓦器等の中世遺物散布地である地徳寺遺跡が所在し、七尾瓦窯跡、吉志部瓦窯跡の工房部分の調査においても明確に包含層が認められ、13世紀を中心とする瓦器、土師器皿等がまとまって出土している。さらに、吉志部瓦窯跡工房跡では溝や耕作溝等の遺構も確認されている。このような一帯の調査状況からは、詳細な実態は明らかではないが、13世紀前半から後半を中心とする時期に一帯において大規模な開発が行われるとともに周辺に集落の存在することが考えられる。

また、少量の細片ではあるが、各調査区から10世紀後半から11世紀前半と考えられる黒色土器A類楕が出土している。吉志部瓦窯跡工房跡の調査においてもほぼ同時期と考えられる掘立柱建物等の遺構や遺物が確認されており、平安時代後半の集落の存在が考えられる。ただし、その後の中世の集落が展開する時期までの間の遺物等は認められず、継続するものではない。

七尾瓦窯操業期については、A区で溝4条、掘立柱建物1棟、土坑3基、B区で掘立柱建物5棟、溝2条が接続する池状遺構、C区で溝2条、土坑1基、ピット5基、足跡を確認した。

A区で確認した溝SD01はその走行方向や溝内の堆積状況から、これまでの工房部分の調査で確認された、瓦窯前面に展開する大溝と同様の状況を示すものであり、同一の溝の可能性が高いと考えられる。その走行状況は、北西から走行してきてA区内では直角に近く屈曲して南西の調査区外に伸びる。そして、A区南西で大きくUターンするように屈曲して、北東に向かい、また、A区内で南東へ大きく屈曲して南東の調査区外へ伸びていくが、そこからは地形等を考慮すると、東に屈曲し丘陵に沿うような形で伸び、北側に屈曲して、平成5年度に確認した大溝につながることが想定される。

また、C区で確認した溝SD07もSD01と同様のものと考えられる。平成4年度に調査した溝が南東から北西へ走行し、瓦窯から約20mの地点で直角に北東へ屈曲して調査区

外へ伸びていくが、周辺地の試掘調査等の状況からはそのまま北東へ直進していくとは考え難く、北西に屈曲して、SD 07につながっていく可能性が高いと考えられる。

これらの調査結果から考えると、A区のすぐ南西がこの大溝の展開の南西端で、C区が北東端という可能性が考えられ、東西約140mの範囲が大溝の展開する範囲と考えられる。南北についてはSD 07の確認によって、瓦窯から約60mの地点までは確認されたが、SD 01及びSD 07の北西側については現段階では明らかではない。ただし、池状造構SG 01の北側に2条溝が接続していることから、その溝の延長部分に東西方向の支水路的な溝の存在する可能性も考えられる。

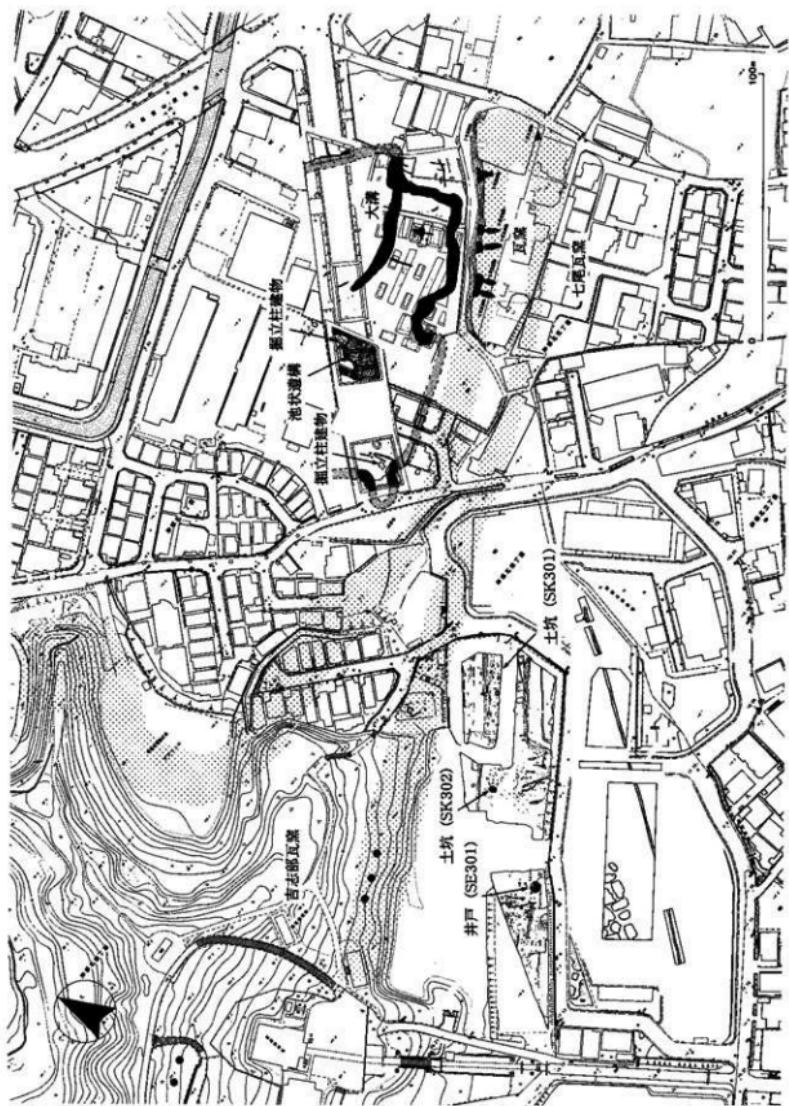
A区でのSD 01の堆積状況をみると、大きく3期（上・中・下層）に分けられ、上層は軟質な暗灰色粘土、中層は黒灰色粘土の堆積を主とし、地山層である黄色粘土のブロックや粗砂が比較的多く混じり、下層は細砂及び粗砂あるいは暗灰色粘土の堆積である。上層から微量の瓦が出土しているが中層及び下層からは遺物の出土は全く認められない。

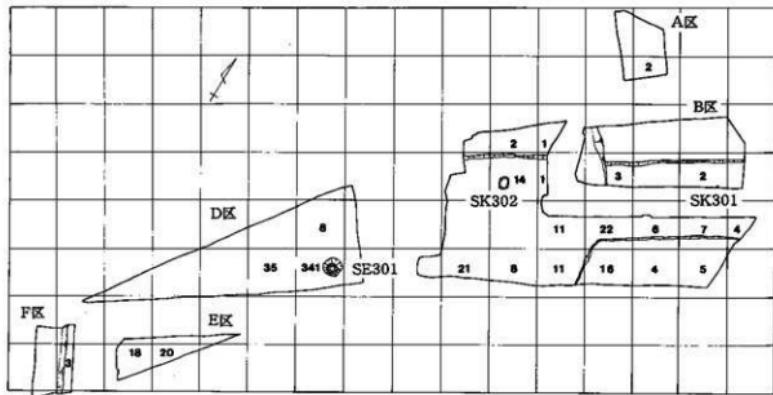
B区で確認した池状造構SG 01については底面が全域ほぼ平らで、凹凸も認められないことから、人为的に掘削された可能性が高いと考えられる。堆積土については軟質な黒灰色粘土が主であり、調査範囲での堆積土中からの遺物の出土は七尾瓦窯平瓦4点、古墳時代須恵器2点の微細片が認められるのみである。この黒灰色粘土はSD 01堆積土の中層と同様な粘土であるが、SD 01のように黄色粘土や粗砂層はほとんど混じらず、比較的均質な状況である。また、SG 01に接続する溝SD 05・06によって導水等の調整が行われたことが考えられる。SG 01の性格については、造瓦作業に要する水の供給のためのものであることが考えられるが、深さが20cmと非常に浅いものであることや全域に粘土が堆積している状況は平面的な規模がやや異なるが、滋賀県橿木原遺跡や京都府隼上り瓦窯跡で粘土溜として確認されたものと類似したものであることから粘土溜としての機能を有していたことも考えられる。

A区及びB区で確認された掘立柱建物については部分的なものではあるが、工房の調査において初めて明確に確認されたものである。これまでの工房部分の調査状況やSG 01の南側での住宅建設にともなう試掘調査において造構は確認されていないことから、未調査の工房の北西域に建物群の存在を想定せるものである。

建物の方位はB区では若干の差が認められN 73°Wにとるもの（SB 02～04：1群）とN 77°Wにとるもの（SB 05・06：2群）があり、A区SB 01は2群と一致する。また、B区の建物は全体の規模等は明らかでなく、柱穴等の直接的な重複関係は認められないが、検出したすべての建物が平面的に重なり、5回以上の建替が想定されるものである。規模を明らかにできたのはSB 01、1棟でのみであり、1間×2間、面積3.21m²と小規模なものである。B区の建物についても全体の規模は明らかでないが、柱穴自体比較的小規模なもので、柱間寸法や柱通も一定しておらず、短期間に建替が行われたことが想定される。調査状況からはこれらの建物で直接的な瓦生産が行われたとは考え難く、また、調査区全体での土器の出土もほとんど認められず、日常的生活が行われた可能性も極めて少ないと考えられることか

第54図 七尾瓦窯工房全體図





第55図 吉志部瓦窯工房跡出土七尾瓦窯瓦分布図（数値は破片数を示す）

ら、これらの建物は小規模な作業小屋的な建物と考えられる。

瓦等の七尾瓦窯操業期の遺物の出土は中世以降の開発に伴う削平等を考慮する必要もあるが、きわめて限られたものである。これは他の調査区においても、大溝等の瓦溜、数ヶ所において瓦のまとまった出土がみられるものの、それ以外の地点においては瓦の出土はやはり限られたものであり、工房においては非常に整理された状態で造瓦作業が行われていたことを示唆するものと考えられる。

(2) 吉志部瓦窯工房跡で確認された七尾瓦窯操業期の遺構・遺物

平成3年度及び7年度に実施した吉志部瓦窯工房跡の調査では、吉志部瓦窯の工房遺構と重複して、七尾瓦窯操業期の土坑2基（SK301・302）、井戸1基（SE301）を確認した。また、第55図で示した調査区内の瓦の分布状況をみると、廃窯後の一帯の造成等にともなう削平や移動も考えなければならないが、ほぼ全域で出土が認められる。この内、D区井戸SE301周辺での出土量が際立っているが、これはSE301や吉志部瓦窯操業期の遺構である土坑SK215堆積土出土の2次堆積資料が9割以上を占めるものである。また、SE301からはまとまった土師器、須恵器の出土が認められ、8世紀前半の資料と考えられる。このようにほぼ全域で七尾瓦窯の瓦が比較的まとまって出土することや当該期の土器の出土からも、吉志部瓦窯工房跡の一部に七尾瓦窯の工房が展開することや吉志部瓦窯群の東半部は未調査であることから、この部分に七尾瓦窯操業期の瓦窯が展開することも想定され、操業規模がさらに大規模なものとなる可能性が高いことを指摘した。

さらには、平成6年度調査のA区の調査状況にみられるように七尾瓦窯跡のさらに西方にまで工房関連遺構が展開していることが明らかになったことからも、吉志部瓦窯工房に重複して

いる工房跡も七尾瓦窯の同一の工房と考えられる。現在の吉志部神社を挟んで西側では七尾瓦窯操業期の遺構・遺物は明確には認められないことから、七尾瓦窯工房の範囲は吉志部瓦窯の東半部までと考えられる。その場合、七尾瓦窯の東端からおよそ300mの範囲まで工房が展開することとなり、東側の瓦窯及び工房は丘陵北斜面に展開しているのに対して、西側の工房は丘陵南斜面側に展開している点が大きく異なるが、後世に丘陵の途中で切断されていることから両者がどのように関連し、展開しているのかは明らかでない。但し、東側の工房では大溝を配することによって瓦窯前面の作業場を有機的に区画するとともに、この大溝が瓦窯の操業に大きく関わっていたことが明らかにされたが、丘陵縁辺部に立地する西側の工房では、東側の工房のように大溝を配した状況は今回の調査状況からはその可能性は少ないと考えられ、造瓦作業の状況が異なっていたことも考えられる。

また、西側の工房では井戸、土坑以外の当該期の明確な遺構等は確認できず、工房としての実態は明らかでないが、井戸等が単独で存在したとは考え難く、建物が存在した可能性は高いと考えられる。吉志部瓦窯工房の造成等後世の開発等によって遺構が削平された可能性や、建物に復原できなかった柱穴の中に当該期のものが存在する可能性も考えられよう。但し、西側の工房では井戸 S E 3 0 1 から土器師、須恵器がまとまって出土しているが、その他は東側の工房と同様に土器の出土量は少ない。従って当該地も工房としての造瓦の作業場であり、工人の居住域は別地点に求める必要があるが、現在のところ、瓦窯跡の周辺地では当該期の遺跡は確認されていない。

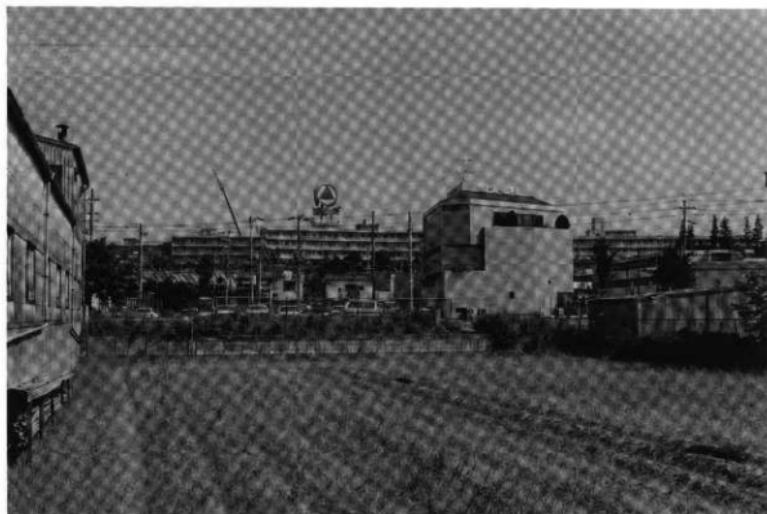
西側の工房においては確認された遺構がきわめて限られることから、瓦生産にあたっての原料粘土の採掘、粘土の精製、瓦の成形・整形、焼成、搬出という一連の作業の具体的な実態は明らかにはできなかった。

ただ、七尾瓦窯における原料粘土の採掘については、西側工房の前面部分には吉志部瓦窯工房の粘土採掘坑が展開しており、瓦の胎土分析や採掘坑周辺の粘土の分析からも吉志部瓦窯の瓦はこの地点の粘土が使用されている可能性が高いと判断されたが、七尾瓦窯の瓦と吉志部瓦窯の瓦では胎土分析の結果、Sr、Ca量やNa因子等に差が認められることから採掘地点は別の場所と考えられることが指摘されている（三辻利一「吉志部瓦窯および七尾瓦窯出土の瓦、および、その工房跡出土須恵器の蛍光X線分析」『吉志部瓦窯跡（工房跡）』1998）。よって、西側工房の前面において粘土が採掘されたとは考え難く、七尾瓦窯の粘土採掘地点は今回の調査においても確認されなかつたが、東側の工房の前面、瓦窯北側の低地部分の可能性が高いと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	ななおがようせき（こうぼうあと）						
書名	七尾瓦窯跡（工房跡）						
副書名	都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書2						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西本安秀 増田真木						
編集機関	吹田市教育委員会						
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231						
発行年月日	西暦1999年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ...	東經 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
七尾瓦窯跡 (工房跡)	すいた しょくべあわ 吹田市岸部北 5-10他	27205	32	34° 46° 55'	135° 32° 13'	19920720~ 19930331 19930520~ 19930930 19940502~ 19950331	2632.9	都市計画 道路工事 に伴う事 前調査
所収遺跡跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
七尾瓦窯跡	瓦窯	奈良時代	大溝、掘立柱建物、 溝、土坑、ピット、 池状遺構、落込み		奈良時代 瓦 弥生土器 古墳時代 土師器、須恵器 平安時代 黒色土器A類 鎌倉・室町時代 瓦器、土師器、 東播系須恵器 備前、青磁、 白磁	調査地点は史跡七尾 瓦窯跡隣接地点 七尾瓦窯跡造瓦工房 関連遺構確認		



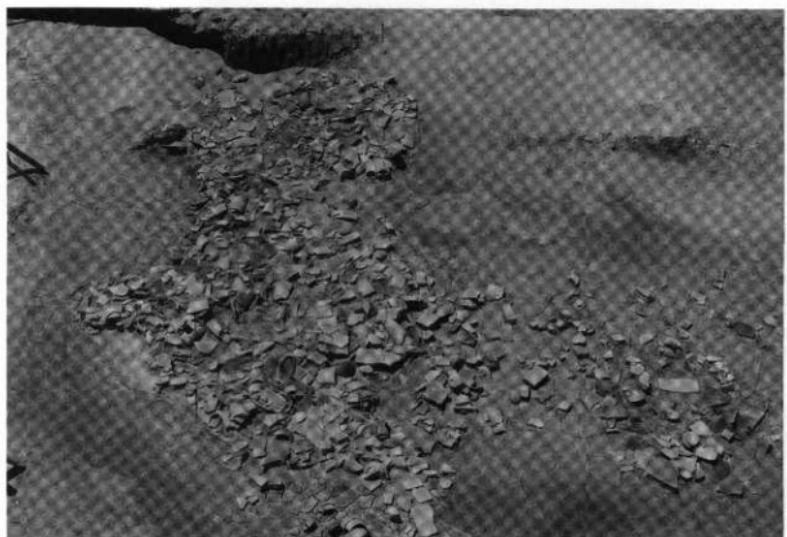
調査前近景
(南から)



大溝・瓦溜検出状況
(北から)



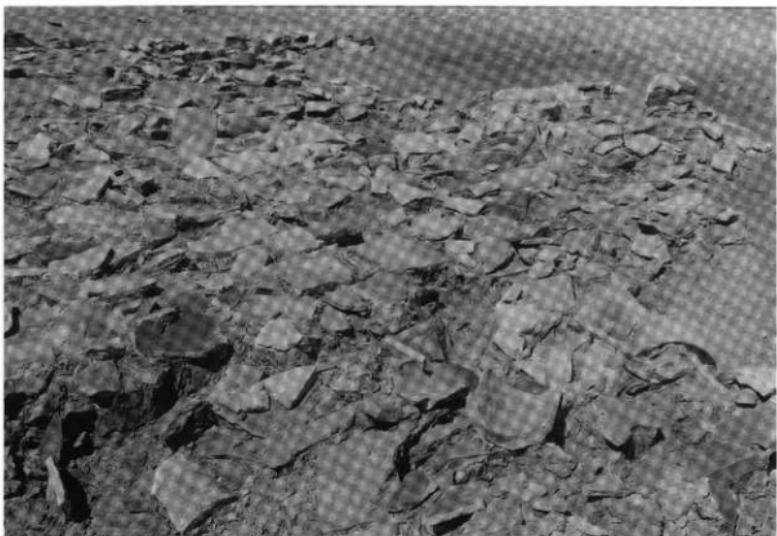
大溝1・瓦溜1（北から）



瓦溜1近景（東から）



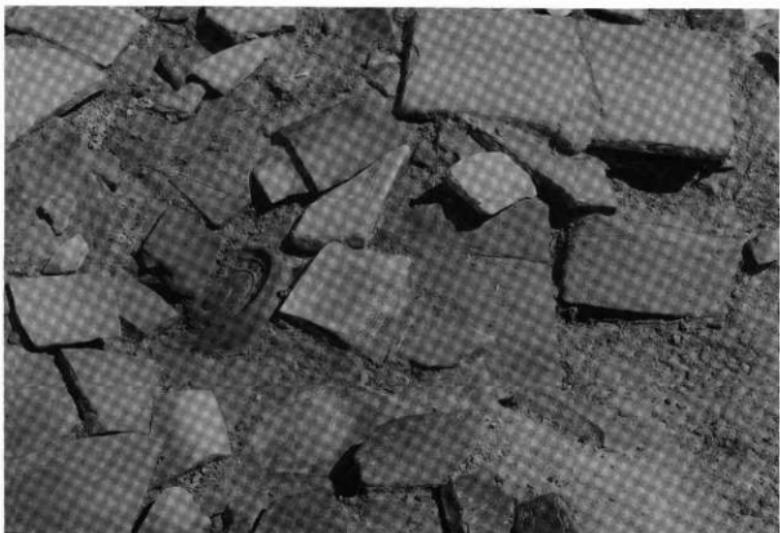
瓦溜1 近景（北から）



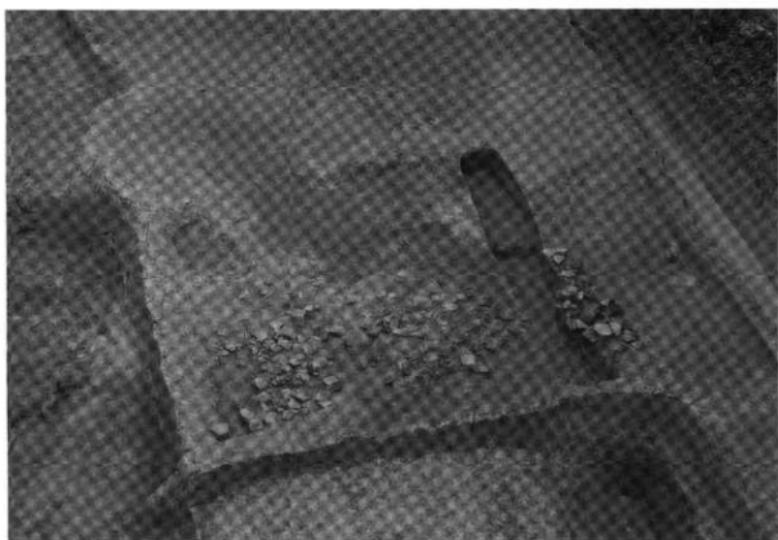
瓦溜1 近景（東から）



瓦溜1 細部（北から）



瓦溜1 細部（西から）



大溝2・瓦溜2（北から）



瓦溜2（東から）



瓦溜 2 (北東から)



瓦溜 2 細部 (東から)

A区全景(北から)

